

先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉
高校版
2019
Volume 1

4
月

VIEW21

問われる 教育の新機軸

特集

4つの実践に見る
これからの「高1指導」考

改革事例から導く！
「学校教育デザイン」を描く道標

新潟県立巻高校

主体的・対話的で深い学びへ
実践 アクティブ・ラーニング

物理 兵庫県立星陵高校 平賀直志

古文 長崎県立佐世保西高校 峯悦子

指導変革の軌跡

福島県立大沼高校

静岡県立三島北高校

一人ひとりを見つめて

生徒 めいろう 明朗先生の世界史の授業は、「熱血」という言葉がぴったりですね。「歴史はドラマだ!」と言って、身振り手振りも大きく、教壇の上を歩き回って、一人ひとりにストーリーを語りかけるように話すから、つい先生をじっと見て、聞いちゃいます。

生徒 そうそう。だから授業中に先生とよく目が合う!

先生 「自分に言われている」と思えば、しっかり聞いて、理解も深まるだろう? 「言葉は目から入ってくる」といつも言っているのは、そういうことなんだよ。

生徒 先生が一人ひとりを見ていると実感したのは、下校時に先生から「元気か?」と言われた時です。確かにその頃忙しくて、疲れているかと思って、先生のその気遣いがうれしくて、頑張ろうって思いました。

先生 あの時、担任の先生から様子を聞いていて、気になっていたからね。そうして普段から話をしていれば、相談したい時に話しかけやすいだろう?

生徒 そうかも! 志望学部を医療か教育かで迷った時、明朗先生に相談しました。私の思いを聞いて、「どちらも人との触れ合いが大切な職業だから、両方とも向いていると思うよ」と言われて、どちらを選んでも

大丈夫だからじっくり考えようと思えました。

生徒 部活動でも観察眼が鋭くて、ちょっと気持ちが緩んでいたら、先生がすごい勢いで真っ直ぐ歩いてきて、「自分だけよければいいんか!」と叱られて。しっかりしなければと、気が引き締まりました。

先生 きみたちはリーダーなのだから、みんなを引っ張るという自覚を持ってほしくて、わざとみんなの前で言ったんだよ。小さなことだからこそ、周りの気持ちを大切にしてほしいんだ。例えば、廊下のロッカーの上に物を置きっぱなしにしないというルールも、全員が心がけているから、毎日気持ちよく過ごせるんだからね。

生徒 学年集会の最後に、明朗先生が生徒に大切にしてほしいことを話されますよね。中でも、「1人でも怠けている人がいるせいで、真面目に努力している人が損をするような学年にはなってほしくない」と言われたのが、心に強く残っています。3年生になったら、苦しいことやつらいことがあると思うけれど、全員で受験に向かっていく雰囲気をつくっていきたいです。

先生 その気持ちがあれば大丈夫! これから1年、みんなで頑張ろう!

中峯明朗先生 教職歴34年。同校に赴任して5年目。指導教諭。2学年主任。地歴公民科。サッカー部顧問。

岡山県立倉敷天城高校 全日制/普通科・理数科/共学/1学年 約240人/2018年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東京大、京都大、大阪大、岡山大、九州大などに140人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ311人が合格。

2 特集

4つの実践に見る これからの「高1指導」考

- 4 課題整理
これからの高1生が直面する高校教育と大学入試の変化とは？
- 6 実践1 ● 青森県立青森高校
シラバスで育ちのプロセスを具体化し、
コンピテンシー・ベースの「青高力」を育成
- 10 実践2 ● 東京都・私立郁文館夢学園 郁文館中学校・高校／郁文館グローバル高校
主体性と協働性、グローバルな視野の育成を目指した
探究学習を推進
- 14 実践3 ● 兵庫県立相生高校
1学年独自の活動とともに、全校で情報を共有しながら
授業や定期考査を改善
- 18 実践4 ● 大分県立杵築高校
ポートフォリオ、グローバル教育、定期考査と、
できる改善から推進
- 22 座談会
資質・能力の育成に向けたマインドセットをつくり、学年・学校全体で共有する
青森県立青森高校 笠井敦司／東京都・私立郁文館高校 西谷知穂／
兵庫県立相生高校 荒内秀明／大分県立杵築高校 芦刈信司

今月の表紙メッセージ

問われる 教育の新機軸

◎昨年度の4月号では、同年度の入学生が、2020年度に初めて実施される「大学入学共通テスト」を受験する学年ということで、例年以上に注目を集める1年生であると、この欄で述べました。今年度の1年生も、「令和元年」の入学生ということから印象に残る学年となりそうですが、指導上も重要な学年と言えるのではないのでしょうか。というのも、18年度・高1生への指導は、多くの学校にとって試行錯誤の連続だったと思いますが、今年度は、昨年度の経験から指導の本質を見だし、これからの高1指導の方針や考え方を定め、その下で教育活動を実践していくことができる学年です。自校の高1指導はどうあるべきか——今号の特集がそれを考える一助となれば幸いです。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇

26 改革事例から導く！「学校教育デザイン」を描く道標

- 26 新潟県立巻高校
育成を目指す資質・能力と学ぶ内容との関係を
明確化した教育課程表を作成し、確実に実践

30 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

- 30 物理
兵庫県立星陵高校 平賀直志
モデルによる現象の理解と協働的な学びを通して、
物理の本質に迫る

- 34 古文
長崎県立佐世保西高校 峯 悦子
熟考と対話の中で生徒に気づきを委ねながら、
もの見方や感じ方を深める

38 指導変革の軌跡

- 38 福島県立大沼高校
キャリア教育
生徒の進路意識と思考力・表現力を高めるべく、
全校体制でキャリア教育を推進

- 42 静岡県立三島北高校
SGHを軸にした学校改革
全校体制による課題研究で、生徒の学びを深めさせ、
社会への広い視野を育む

46 改良！指導ツール ビフォーアフター

「課題研究」ルーブリック

50 学校を飛び出し、学びを巡る 高校教師 study-tour 新連載

公立小学校のプログラミング教育
「社会の箱庭」で仲間とともに答えが1つではない問いに向き合う

52 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

- 52 信州大学 繊維学部
農学・理学・工学・医学を融合して学び、繊維の可能性を広げる研究に挑む

- 54 奈良大学 文学部 文化財学科
世界遺産の宝庫、奈良で本物に触れながら、文化財専門職を目指す

56 これからの会議・研修のあり方、つくり方

実践者に聞く！
津屋崎ランチLLP代表、
LOCAL&DESIGN (株) 代表取締役 山口 寛
なぜ、学校現場に「対話」が求められているのか

64 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「Action!」 大分県立竹田高校 田所 伸

深く読み解く力を
いかに習得させるか
が課題。

基礎・基本の
繰り返しを
おろそかにしない
態度の育成。

特集

4つの実践に見る らの「高1指導」考

生徒の
経済面への配慮が
極めて困難である。

具体的に観点を
意識した定期考査、
授業のあり方を
構築し直す
仕組みが必要。

授業の進度が
遅れがちに
なったこと。

生徒への補完的な指導
は今後も必須であり、
外部のサポートも活用し
ながら進めていきたいと
考えている。

* 上記の声は、2018年度の高1指導方針・方法・計画を変更したことによって新たに見えてきた課題を、『VIEW21』高校版読者モニターにアンケートで聞いた結果（アンケートは、2019年2月にウェブとファクスで実施。回答数は104）を基に作成。

「大学入学共通テスト」(以下、共通テスト)の実施初学年である、2018年度高校1年生が入学して1年が経つ。共通テストにおける思考力・判断力・表現力を評価するための記述式問題、共通テストの枠組みにおいて活用される民間の英語の資格・検定試験、そして、多様な方法で多面的・総合的に評価する入試と、大学入試の仕組みや内容が大きく変わろうとしていることを受けて、各校とも、これまでにはなかった教育活動や指導を試行錯誤しながら進めてきたことだろう。

では、この1年間を振り返ることで見えてくる、これからの高1指導において大切な視点や考え方とは、どのようなものなのか。今回の特集では、これまでの高1指導から大きく方針や方法を変えた4校の実践を取り上げ、各校に共通する指導の視点や考え方を見いだしていく。

課題整理

これからの高1生が直面する
高校教育と大学入試の変化とは? P.4

4つの実践

青森県立青森高校 P.6
東京都・私立郁文館夢学園いくぶんかんゆめがくえん P.10
兵庫県立相生高校あいおい P.14
大分県立杵築高校きつき P.18

座談会

資質・能力の育成に向けた
マインドセットをつくり、
学年・学校全体で共有する P.22

学年間の引き継ぎ、
担当者間の引き継ぎ、
結果分析の蓄積
が必要。

教師・生徒とも
ポートフォリオの本質
をもっと理解すべき。

これか

ターゲットを何にするか。
これまでは
センター試験だったが、
今後、より多様な目標を
掲げる必要があるか?

アクティブ・ラーニング
のさらなる拡大。

社会で求められる資質・能力の育成 や大学入試の変化に対応した 4つの実践を紹介

青森県立青森高校 ▶ P.6

- コンピテンシーベースの学校教育目標「青高力」を策定
- 上記を基にしたルーブリックとシラバスを作成し、授業と定期考査を改善
- 振り返りがしやすいようeポートフォリオを導入
- キャリア教育委員会が仕組みをつくり、1学年団は実践に集中

東京都・私立郁文館夢学園 ▶ P.10

- 「社会探究」「協働ゼミ」で探究学習を実施
- 教育活動の軸に据えたSDGs(*1)と、授業や学校行事、特別活動などを関連づけ、生徒の学びを深めさせる
- 紙のポートフォリオとeポートフォリオを併用し、振り返りをしやすくする

兵庫県立相生高校 ▶ P.14

- 「総合的な学習の時間」で、相生市と連携した探究学習を実施
- 授業内外で英語を使う場面を増やす
- 学校行事など、定期的に振り返りの場を設け、eポートフォリオも活用
- コンピテンシーベースの学校ランドデザインを策定

大分県立杵築高校 ▶ P.18

- 学年目標として、「きつき力」を設定
- ポートフォリオの目的や入力方法などを指導し、生徒全員が実りのある振り返りを行う
- 英語4技能の育成を強化。外国に触れるプロジェクトを始動
- 定期考査の一部に、思考力・判断力・表現力をより求める問題を導入

だ。生徒が高校生活における自身の活動を振り返り、活動の質を上げていくためにも、また提出書類作成のためにも、ポートフォリオの蓄積が求められる。

● ● ●
18年度の実践を、今後の高1指導にどう生かすか

19年度は、次期学習指導要領の移行期間となる。新1学年では「総合的な探究の時間」が始まるなど、探究学習の本格的な実施が求められることになる(図3)。

21年に「大学入学共通テスト」が実施されることに対応して、多くの高校が18年度1学年の指導を従来とは変化したことだろう。その実践の成果や課題も踏まえて、今後の高1指導を計画・実践することが、高校現場には求められる。

そこで次ページからは、18年度1学年から大きく指導を変えた4校の実践と、その実践を中心として担った教師4人の座談会を通して、これからの高1指導のポイントを考えていく。

図3

大学入試、高校教育はどう変わる？

資質・能力が評価される大学入試に

◎思考力・判断力・表現力がより求められる

「大学入学共通テスト」では、「国語」「数学Ⅰ」「数学Ⅰ・A」において、思考力・判断力・表現力等を測る記述式問題が出される。

◎英語の4技能評価を実施

「大学入学共通テスト」の枠組みにおいて民間の英語の資格・検定試験を活用する、英語の4技能評価の仕組みが導入される。

◎多面的・総合的評価と調査書の仕様変更

個別大学の入試に新たなルールが設けられ、すべての入試区分において多面的・総合的な評価が実施される。それに合わせて調査書の記載内容を改善。両面1枚の制限も撤廃し、より弾力的に記載できるように。

移行措置として「総合的な探究の時間」開始

2019年度から、次期学習指導要領の移行措置として「総合的な探究の時間」が始まる。また、移行期間ではあるが、資質・能力の3つの柱のバランスのよい育成も求められる。

*1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。①貧困をなくそう、②飢餓をゼロになど、17の目標と169のターゲットから成る。

青森県立青森高校

シラバスで育ちのプロセスを具体化し、
コンピテンシー・ベースの「青高力」を育成

青森県立青森高校は、生徒への育成を目指す10の資質・能力を「青高力」と定義し、その到達度を測るための評価規準と尺度を示したルーブリックと、育成の過程を示したシラバスを作成した。現在は、その具現化に向け、授業と定期考査の改善、多面的評価のためのポートフォリオの構築に取り組んでいる。

● ● ● 全分掌、生徒も巻き込んで
ルーブリックの原案を作成

青森県立青森高校が、若手・ミドルリーダー中心の「プロジェクトチーム」を設置し、グラウンドデザインを策定したのは、2017年のこと。同校の綱領「自律自啓・誠実勤勉・和協責任」を踏まえ、育成を目指す10の資質・能力を「青高力」(図1)と定義し、各教育活動との関係を整理した(本誌18年4月号参照)。

18年度は、「青高力」の評価手法の開発、授業改善、多面的評価に着手した。その中で最大の課題は、「青

高力」を育成するために、生徒に何を学ばせ、成長をどう見取るかだった。そこでまず、学びの目的と手段を可視化(図2)。習得(分かる)↓活用I(できる)↓活用II(使える)↓探究(生み出す)の4段階とする「育ちのプロセス」を示した。その概念図を基に、「青高力」の10の資質・能力と関連する分掌を割りあて、ルーブリックの原案を作成した。大瀬幸治教頭は、その意図をこう語る。

「『青高力』の策定には教師全員がかかわり、共通理解はできていました。そこで、ルーブリックの作成では、『課題発見力』と『課題解決力』

は探究学習部、『原因分析力』と『自己実現力』は進路指導部といったように、資質・能力の内容に応じて各分掌が分担しました。教師一人ひとりが深く考えることで、生徒への育成を目指す『青高力』を具体的にイメージしてもらい、自身の指導に落とし込めるようにしました」

10月上旬、各分掌が1か月かけて作成した原案を並べ、水準や言い回しを比較して、違いが見られた部分を修正した。例えば、語尾が「でき」ではなく、「させる」となっていた場合など、教師主導の指導をイメージさせる言い回しを変えた。

青森県立青森高校

◎旧青森県立青森高校と旧青森県立青森女子高校が統合して生まれた。綱領に「自律自啓」「誠実勤勉」「和協責任」掲げる。2014年度に文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」、17年度に「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受ける。

◎設立 1900(明治33)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2018年度入試合格実績(現浪計) 国

公立大は、北海道大、弘前大、東北大、東京大、一橋大、大阪大などに2006人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大学、明治大、早稲田大などに延べ145人が合格。

◎URL <http://www.aomori-hs.ac.jp/>



教頭
大瀬幸治
おせ・ゆきはる
教職歴31年。同校に赴任して2年目。



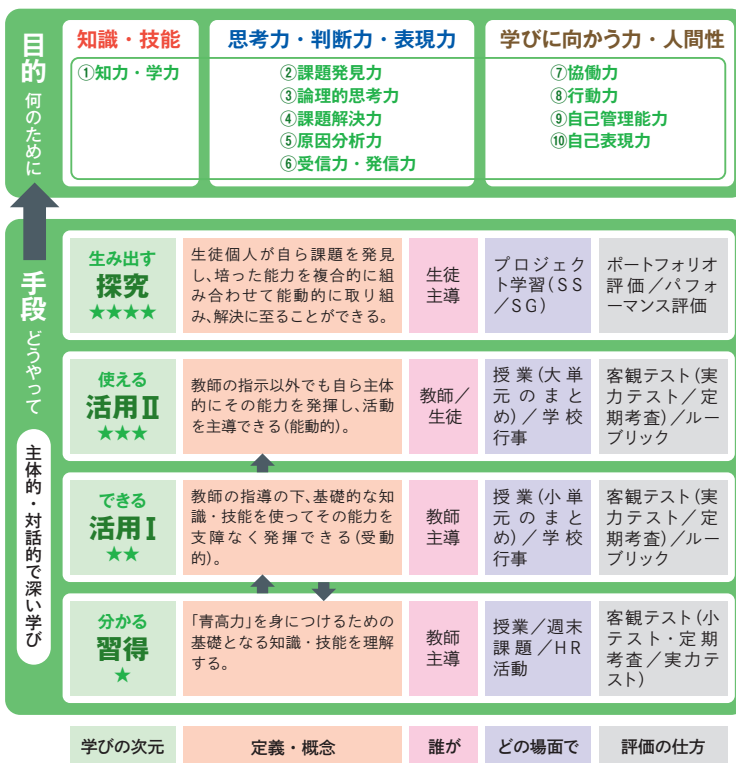
進路指導主事
笠井敦司
かさい・あつし
教職歴22年。同校に赴任して7年目。国語科。



1学年担任
市川泰斗
いちかわ・たいと
教職歴7年。同校に赴任して2年目。数学科。

ルーブリックの作成には、生徒も加わった。生徒指導部担当の「受信力・発信力」「協働力」「行動力」「自己管理能力」の原案を生徒会役員が作成したのだ。最初は評価規準を作ること戸惑っていた生徒たちが

図2 ルーブリック作成のための概念図(何のために、どうやって、誰が、どの場面で)



*学校資料を基に編集部で作成。

図1 目指す生徒像と育成を目指す資質・能力(青高力)

目指す生徒像

- 主体性と協調性をもって果敢に未来を切り拓く生徒
- 自己管理の態度と心身の健康に努める生徒
- 多様性を尊重し社会規範を遵守する生徒
- 主体的に課題を発見し、最適解を探究する生徒

育成を目指す資質・能力(青高力)

- ①知力・学力** 各教科の内容を理解し、それを活用する力及び技能
- ②課題発見力** 複数の統計や資料から、改善・克服すべき課題を設定する力
- ③論理的思考力** 客観的データや先行研究を踏まえ、自らの理論を筋道立てて構築する力
- ④課題解決力** 解決のための仮説を立て、それを実証するために行動する力
- ⑤原因分析力** 課題の背景や要因を、複数のデータに基づいて多角的な視点で捉える力
- ⑥受信力・発信力** 人の話を傾聴し様々な情報を受け取る力、自分の考えを分かりやすく相手に伝える力
- ⑦協働力** 他者の価値観を尊重しつつ他者と協力し、1つのものを成し遂げる力
- ⑧行動力** 自分の掲げる目的を達するために、主体的かつ計画的に実行する力
- ⑨自己管理能力** 基本的な生活習慣を確立し、健康と安全を意識して行動する力
- ⑩自己実現力** 社会の中で生きる自分を想像し、多くの情報を活用して実現させようとする力

*学校資料を基に編集部で作成。

が、生徒指導部の教師との対話を通して、自分たちが身につけるべき資質・能力を考え、生徒の誰もが理解できるような度も書き直し、完成させた。進路指導主事の笠井敦司先生は、生徒を参加させた理由をこう語る。

「『青高力』は、本校の綱領の1つである『自律自啓』に最終的にまともっていくものです。生徒がルーブリックの作成にかかわることで、自分たちがどうあるべきか、学校をどうしたいのかを考えさせ、生徒全員に『青高力』の意義を浸透させたいと考えました」

18年度の体育祭では、生徒会役員が行事の目的を述べた中に「青高力」を意識した発言があり、自分たちが身につけるべき資質・能力として「青高力」が定着した様子が見られた。

● シラバスに資質・能力の3つの柱で評価規準を示す

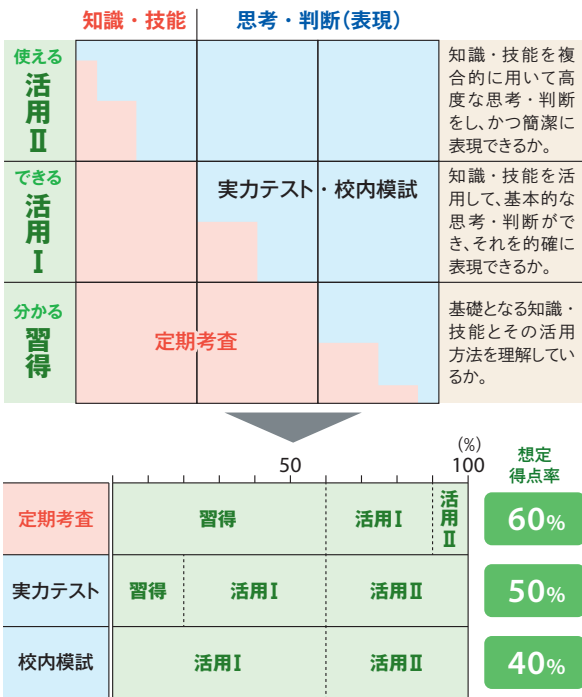
11月下旬のルーブリックの完成後には、シラバスを作成した。次期学習指導要領で示された資質・能力の3つの柱と「青高力」やルーブリックとをひもづけ、コンピテンシー・ベースの記述にしたことが特徴だ。

「本校の以前のシラバスはコンテンツ・ベースで、いつ、どんな学習を行い、どのように評価するのかを示した学習計画書でした。それを大きく変え、今自分が身につけている資質・能力はどのレベルなのか、どの資質・能力を重点的に伸ばせばいいのかを、生徒がメタ認知できるシラバスを目指しました」(笠井先生)

シラバスは、各科目ともA4版2枚とした(P.8図3)。1枚めには、資質・能力の3つの柱のそれぞれについて「習得・活用I・活用II」という到達度を示し、関連する「青高力」と評価方法を明記した。2枚めには、各学期の定期考査後に、成長したと思う点や課題を振り返り、次の目標を書く欄を設けた。そして、全教科・科目分を1冊にまとめて、19年4月、全校生徒に配布する予定。その後は、同校の教育のスタンダードとして受け継いでいく方針だ。

「かつては学年団主導でしたが、これからは学校全体がチームとして動いていかなければなりません。教師が異動しても、本校のスタイルがぶれずに確立されていることで、生徒や保護者からの信頼がさらに高まると考えています」(大瀬教頭)

図4 定期考査・実力テスト・校内模試の目的と構成



定期考査・実力テスト・校内模試それぞれの出題レベルとその比率を明確にし、教科・科目間で難易度のばらつきがなくなるようにした。
*学校資料を基に編集部で作成。

図3 1学年「国語総合」のシラバス(抜粋)

科目 (例)国語総合[現代文] 授業時間 週2単位
履修学年・級 1 学年

目標 国語を適切に理解し表現するための知識・技能を高め、それに基づいて、論理的思考力・判断力を身に付けるとともに、適切に表現する力を伸ばし、主体的に言語に親しむ態度を身に付ける。

■どのような力を、どのレベルまで身につけるのか(めざす能力とその次元)

新学習要領	知識・技能	思考・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
高次の論理技法や論理力を駆使して複雑な論理展開や抽象度を高い文章や表現を的確に表現することができる。	複雑な論理展開や論理表現を分析してわかりやすく説明し、論理を導き出したり、因果関係の論理展開や書き・表現の技法を自分の考えを他者と伝え合う。	広く社会に向けて、現象から原因を探り出し、現象の背後にある本質を追究し、研究を身に付けていく。	

■どのように評価されるか(イメージ)

知識・技能	思考・判断	表現	学びに向かう力
実力テスト・校内模試	課題レポートなど	発表発表・発表	取組状況・態度

■どう受けとめ、何をやるか(振り返り)

「A5」として、自身の学習到達度を振り返り(学習到達度振り返りシート)を基に振り返り、学習の進捗や課題を把握し、今後の学習に活かす。また、学習の進捗や課題を把握し、今後の学習に活かす。

■いつ、何を学ぶか(学習内容)

学習内容	1学期	2学期	3学期
【入門】言葉の使い方・読み方 【評論分野】評論文の読み方 【小説】小説の読み方 【小説】小説の読み方 【評論】因果関係(近代科学論) 【小説】心情の読みとり方 【評論】説話構造(昔話論) 【小説】主題の読みとり方 【随筆】素朴な心情の読みとり方 【随筆】感性的な感情の読みとり方 【評論】総合的な読み取り 【小説】背景や心情を踏まえ主題を読みとる 【表現】自分の考えを論理的に書く	【入門】言葉の使い方・読み方 【評論分野】評論文の読み方 【小説】小説の読み方 【小説】小説の読み方 【評論】因果関係(近代科学論) 【小説】心情の読みとり方 【評論】説話構造(昔話論) 【小説】主題の読みとり方 【随筆】素朴な心情の読みとり方 【随筆】感性的な感情の読みとり方 【評論】総合的な読み取り 【小説】背景や心情を踏まえ主題を読みとる 【表現】自分の考えを論理的に書く	【入門】言葉の使い方・読み方 【評論分野】評論文の読み方 【小説】小説の読み方 【小説】小説の読み方 【評論】因果関係(近代科学論) 【小説】心情の読みとり方 【評論】説話構造(昔話論) 【小説】主題の読みとり方 【随筆】素朴な心情の読みとり方 【随筆】感性的な感情の読みとり方 【評論】総合的な読み取り 【小説】背景や心情を踏まえ主題を読みとる 【表現】自分の考えを論理的に書く	

資質・能力の3つの柱の評価規準を示し、その科目の授業でどのように資質・能力を伸ばしていけばよいのかを、生徒がイメージしやすくした。

*学校資料をそのまま掲載。シラバスの全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(https://berd.benesse.jp)からダウンロードできます。「HOME」→教育情報→高校向けでご覧ください。

シラバスをベースに 授業と定期考査を変える

シラバスと連動して、授業と定期考査も変え、校内で行う3つの試験の目的と構成を再定義した(図4)。

「定期考査で教科の本質の理解を見る問題や初見の資料を扱った問題などを出すことで、生徒の学びの意識転換を図っています」(笠井先生)

ここでは、国語科と数学科の取り組みを紹介する。

◎国語科の取り組み

国語科では、授業内容の理解を基に、初見の文章を読み取る力を測ることをねらいとして、教科書本文と同じテーマで、生徒にとって初見となる課題文を示し、教科書の素材文との共通性を論じる問題を出した。

2学期末には、資料読解のグループワークを行い、学年末考査では少子化をテーマとした資料の読み取り問題を出した。その結果、社会問題に対する関心や資料を読み取る力に課題があることが分かり、授業でもその育成を重視するようになった。

◎数学科の取り組み

数学科の定期考査でも、初見の問題や問題文の読解力が求められる問

題を増やした。いずれも、定理・公式や解法を暗記するだけでは解くのは難しく、与えられた条件と既存の知識を結びつけたり、単元の本質を理解していないと解けない問題だ。1学年担任の市川泰斗先生は、出題のねらいを次のように語る。

「初見の問題でも、既習事項を活用して解けるかどうかを考えられるようにしたいと考えました。正答率は高くはありませんが、生徒の多くが、模擬試験で見慣れない問題が出てでも動じなくなったようです」

プリントには、問題ごとにシラバスに示した「習得・活用I・活用II」を明記した。この問題は、「公式を活用する」「既習事項を組み合わせて」といったことがひとめで分かるため、到達目標を意識できると生徒に好評だ。また、単元の最後には「振り返りシート」を書かせて、その時の学習内容と既習事項との関連を意識させていると、市川先生は話す。

「数学では、問題が解けても、その単元の本質を理解できていない生徒が少なくありません。学習内容を振り返り、他分野との関連を考えることで、数学の見方・考え方をつかんでほしいと考えています」

図5 ルーブリックに基づいた自己評価シート(抜粋)

活動内容		1授業・定期テスト	2ゼミ活動	3部活動	4青高祭	5体育祭	6修学旅行	7遠足	8進路行事	9Mプロ・Sプロ	10その他(記述)
三つの時	青高力	定規	A (活用Ⅱ)	B (活用Ⅰ)	C (習得)	D (未達成)	評価 (A-D)	評価の理由	改善すべき活動(備考)		
知識・技能	知力・学力	各教科の内容を本理解し、それを活用する力及び技能	各教科・科目の学習内容を本理解し、それを活用する力及び技能	各教科・科目の学習内容を十分に理解し、教師の期待が合理的に思考したり、主体的に課題を探究することができる。	各教科・科目の学習内容を十分に理解し、教師の期待が合理的に思考したり、主体的に課題を探究することができる。	各教科・科目の学習内容を基礎・基本を理解し、教師に期待された学習活動に取り組むことができる。					
	課題発見力	複数の統計や資料から、改善・克服すべき課題を設定する力	自らが出した発見から、次の課題を設定する力	教師の支援があれば、社会的・学問的意義がある課題を設定できる。	教師の支援があれば、社会的・学問的意義がある課題を設定できる。	教師の支援があれば、必要課題を設定し、2Hの時間に取り組む力					

「青高力」のルーブリックの右端に記入欄を設け、生徒が評価規準を見ながら活動を振り返り、自己評価しやすいうようにした。*学校資料をそのまま掲載。自己評価シートの全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

● ● ●
eポートフォリオで
振り返りを定期的に行わせる

18年度は、多面的評価にも着手し、独自に作成した自己評価シート(図5)を活用した。シートは、「青高力」のルーブリックに、自己評価とその

理由、資質・能力を高めた活動の記入欄を設けたものだ。18年度は、年度末に記入させたが、19年度からは学期に1回の記入を検討している。

「18年度は、『仲間と協力できたから、協働性はA』というように、甘く評価する傾向が見られました。19年度は、客観的に評価するポイントを知り、メタ認知能力を高めることが課題です」(市川先生)

「Classi」(*1)によるeポートフォリオの活用も進めている。定期考査と学校行事の振り返りを必須とし、生徒が個別に行うSGH(*2)の活動なども入力させるようにした。また、課題配信機能のテンプレートを活用したところ、記入率が格段に上がったと、市川先生は語る。

「そのテンプレートには、『よかつたこと』『今後の活動に生かすこと』など、振り返りの観点が示されています。振り返りがしやすくなり、回数を重ねる度に入力する量も質も上がっていききました」

19年度は、振り返りの結果をどのように次の行動に移させるかが課題だ。担任が面談で行動の変容を促したり、朝自習の計画を自分で立てさせるなどの方策を検討している。

● ● ●
組織改編で機動力の向上と
スムーズな意思決定を実現

そうした一連の改革を牽引してきたのが、管理職、教科主任、分掌主任から成る「キャリア教育委員会」だ。以前は、教育課程委員会と進路指導委員会がそれぞれの活動を担当していたが、高大接続改革によって迅速な意思決定が必要になったことを機に、16年度に2つの委員会を統合し、キャリア教育を統括する組織として、同委員会を立ち上げた。

現場から課題や議案が上がると、大瀬教頭が委員を招集して議論し、決定事項をすぐに職員会議で伝えて、学校全体で共有している(18年度は6回実施)。教師間で共通理解を図りながら取り組みを進めることが、スムーズな改革の鍵だと、笠井先生は強調する。

「進路・教務・学年団が個別に動いていては、意思決定が遅れやすく、取り組みの意図も十分浸透せず、効果が限定的になってしまいます。管理職・分掌・学年団の代表者が一堂に会した委員会で、課題がスムーズに共有され、機動的に改革を進めることができました」

18年度入学生を迎えて1年間が経った。改革の最大の成果は、シラバスや自己評価シートなど、コンピテンシー・ベースの教育活動を行う環境が整ったことだ。教師や生徒の「青高力」への理解が深まり、「Classi」も、生徒をより深く見取る上で欠かせないツールになっている。

19年度の課題は、同校の教育活動への保護者の理解を深めることだ。現在、学年通信を学期に1回、保護者に配布し、学力観の転換、大学入試の変化など、教育動向を伝えていくが、十分理解されているとはいえない。そこで、同校の改革のねらいや内容も周知することで家庭の支援を引き出したいと考えている。シラバスやポートフォリオにかかわる課題もあるが、それらはかえって楽しみでもあると、笠井先生は語る。

「初めての取り組みも、まずは始め、実践する中で課題を洗い出し、随時対応していくといった姿勢で進めてきました。課題はありますが、課題を具体的に挙げられるのは、土台ができてきた証拠です。問題があっても、1つずつ着実に解決していくことで、本校が理想とする教育に近づいていきたいと思います」

*1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。
*2 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。

東京都・私立郁文館夢学園
郁文館中学校・高校／郁文館グローバル高校

主体性と協働性、グローバルな視野の育成を目指した探究学習を推進

東京都・私立郁文館夢学園では、学園全体で生徒主体の探究学習を推進し、主体性や協働性の涵養を図ってきた。2018年度からは、教育活動の軸としてSDGs（*1）を取り入れ、よりグローバルな視点を重視した取り組みに転換している。

● ● ●
夢をかなえるための
人間力・学力・グローバル力

東京都・私立郁文館夢学園は、郁文館中学校と郁文館高校、海外大学への進学も視野に入れた指導を行う郁文館グローバル高校の3校から成る中高一貫校だ。教育目標に「子どもたちに夢を持たせ 夢を追わせ 夢を叶えさせる」を掲げ、その夢をかなえるための3つの力として、夢を持ち、自ら人間性を高めていく「人間力」、学ぶ意欲と学習習慣を備え、絶対的な知識と夢実現に必要な応用

力を獲得するための「学力」、主体的に生き抜くために異質な他者と共生し、未来を切り拓く「グローバル力」の育成を図っている。

例えば、「夢合宿」（中学1年次は5泊、2年次は7泊、高校は10泊。郁文館中学校2年次と郁文館グローバル高校2年次は海外研修・海外留学を実施）では、農林業体験や野外調理、アスレチックなどによる協働活動を通じて、社会で求められる人間性や協働性などを養う。郁文館高校の進路指導部部長の内藤昌宏先生は、次のように語る。

「高大接続改革で求められている資質・能力を育むための教育活動は、既に本校では行われていると自負しています。2018年度は、大学入試改革への対応も踏まえた、探究学習やポートフォリオの推進、英語4技能の育成の強化などの取り組みにより発展させることが課題でした」

● ● ●
生徒の潜在的な資質・能力が
発揮される探究学習に

郁文館高校では、次期学習指導要領を見据えて、16年度から「社会探

東京都・私立郁文館夢学園

- ◎ 私立郁文館として創立。2010年度、男子校から共学化。難関大学の合格を目指す郁文館中学校・高校と、海外大学進学も視野に入れる郁文館グローバル高校を設置。
- ◎ 設立 1889（明治22）年
- ◎ 形態 全日制／普通科・国際科／共学
- ◎ 生徒数 学園全体で約1500人
- ◎ 2018年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、帯広畜産大、東北大、筑波大、千葉大、名古屋大、広島大などに21人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大学、早稲田大などに延べ390人が合格。海外大学は、アメリカ、カナダ、イギリス、マレーシアなどの大学に延べ52人が合格。
- ◎ URL <https://www.ikubunkan.ed.jp/>

 宮坂美奈子 <small>みやさか みなこ</small> 郁文館グローバル高校 夢教育推進部／留学・国際交流系主任 教職歴23年。同校に赴任して23年目。家庭科。	 藤井崇史 <small>ふじい たかし</small> 郁文館グローバル高校 統括主任 教職歴8年。同校に赴任して8年目。社会科。	 牧野圭太郎 <small>まきの けいたろう</small> 郁文館高校 英語科主任 教職歴11年。同校に赴任して11年目。英語科。	 西谷知穂 <small>にしに あきほ</small> 郁文館高校 進路指導部 教職歴14年。同校に赴任して3年目。国語科。1学年担任。	 内藤昌宏 <small>ないとう まさひろ</small> 郁文館高校 進路指導部部長 教職歴33年。同校に赴任して33年目。英語科。
---	--	---	---	--

*1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。
 ①貧困をなくそう、②飢餓をゼロになど、17の目標と169のターゲットから成る。

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

究」に取り組んでいる。社会が抱える課題について、生徒が自らテーマを決め、問題提起と仮説・検証を行う探究学習で、その進め方は次の通りだ。

1年次の4～10月、1年生全員で起業体験を行い、社会に対する課題や気づきを得る。2学期には、それを基に、社会問題を分類した13領域から1つを選び、学級横断で5～6人のグループを組んで、研究テーマを設定する。領域は、「国際政治・社会の課題と日本のかかわり方」など、文系6領域、「モノづくりのこれからと人間・社会」など、理系3領域、「経済発展と環境・持続可能な社会」など、文理融合4領域である。

2年次には、グループごとに探究学習を行う。1学期に、調査方法やプレゼンテーションなど、探究学習を進める上で必要な知識やスキルを学び、夏季休業以降、研究テーマに応じて大学や企業などでフィールドワークを実施。10月上旬の文化祭で中間発表を行い、3学期に全グループが発表用の動画を作成して、それをタブレット端末で配信し、代表グループが保護者会で発表する。

18年度は、「社会探究」の成果を

携えて外部のコンテストに参加することを推奨した。あるグループは、東京都環境局が行った「プラスチックストローに代わるアイデア募集」に応募し、鉛筆工のストローを提案して最優秀賞を受賞した(写真1)。

地元の鉛筆工職人に依頼して試作品を製作するなど、グループの意欲的な活動が実った。

「『社会探究』では、教科学習が必ずしも得意ではない生徒がリードしてグループをまとめるなど、その生徒が持つ資質・能力を発揮しています。生徒がこれまで気づかなかった力を自覚し、自己効力感を高めることができるのも、探究学習のよさだと実感しています」(内藤先生)



写真1 東京都環境局のアイデア募集で、鉛筆工のストローを提案する生徒たち。応募総数921件の中、最優秀賞を受賞した。

●●● SDGsの観点から 社会の課題に迫る

18年度からは、探究テーマを、持続可能な開発目標であるSDGsの17の目標と絡めて考えさせる実践を行っている。進路指導部の西谷知穂先生は、そのねらいをこう語る。

「SDGsでは社会の諸課題が挙げられているので、生徒は探究学習のテーマを具体的に絞り込みやすくなります。従来から行っているボランティア活動やNIE(*2)なども、SDGsの観点から関連づけることができ、個々の取り組みとの相乗効果も高まると考えました」

それに伴い、2年次の1学期に行う修学旅行を「PBL(*3)ツアー」とし、「社会探究」の起点にすることにした。北海道美幌町・知床は食糧問題・自然との共生、鹿児島県屋久島・口永良部島は生態系、カンボジアは貧困問題といったように、行き先は生徒が探究したい課題から考えられるよう、国内5か所、海外3か所に設定。生徒は各自の課題意識に応じて行き先を選び、4～6人が1グループとなって現地フィールドワークを行う。そして、その体

験を基に研究テーマを設定して探究し、最終的に個人でレポートにまとめる計画だ。

「PBLツアー」としたねらいは、視野を広げ、フィールドワークの手法を学ぶことだと、西谷先生は語る。「これまでは、研究の進め方を生徒に任せていたため、大学や企業などに自ら連絡して探究するグループもあれば、自分たちで調べ学習をしてまとめるといったグループもあり、探究のレベルに差がありました。そこで、フィールドワークを全員必須とし、自分で探究を深める土台を身につけさせようと考えました」

毎朝全校で行うNIEでも、SDGsとの連動を進めている(写真2)。以前は、生徒に関心のあるト

写真2 NIEの活用の様子。生徒が家庭から持参した新聞から、関心がある記事を選んで要約。その後、グループに分かれて意見交換・発表を行う。

* 2 Newspaper in Educationの略。新聞などを教材として活用する教育活動。

* 3 Project/Problem Based Learning (問題解決型学習)の略。

ピックを選ばせていたが、18年度は、SDGsと関連した記事を選んで課題や解決策を考えさせた(図1)。

「SDGsを教育活動の軸としたことで、特に地理歴史、公民、理科では、SDGsと関連つけた話がしやすくなりました。生徒も、授業で学ぶ内容が社会の課題とどのように結びついているのかを、実感しやすくなったと思います」(西谷先生)

● ● ● 生徒主体の「協働ゼミ」で協働の作法を学ぶ

郁文館高校が探究学習の転換を図る一方、郁文館グローバル高校では、

13年度から探究学習として「協働ゼミ」を行ってきた実績がある。現在は、「ビジネス」「社会福祉」など、

生徒の興味・関心から設定された17のゼミで、それぞれ10〜20人で活動している。各ゼミには教師1人が顧問としてつき、卒業生1人がコーチとして研究をサポートする。

「協働ゼミ」の最大の特徴は、生徒の主体性と協働性の涵養を重視している点だ。ゼミのメンバーは3学年横断で、3年生がゼミ長を務める(図2)。ゼミ長は、リーダー研修を受け、リーダーシップとリーダーズキルの違いや、組織のつくり方などを学ぶ。郁文館グローバル高校統括

主任の藤井崇史^{なかし}先生は、そのねらいを次のように語る。

「ゼミ内で合意形成を図りながら、主体的に社会問題に関するテーマを追究していく中で、コミュニケーションや協働の作法を学ぶことを重視しています。研究成果は、その副産物と捉えています」

「協働ゼミ」は、4月に1年生がゼミを選択するところから始まる。1学期から夏季休業にかけて協働研究を行った後、生徒が個別に研究テーマを設定。12月にレポートを提出し、保護者を招待したプレゼンテーション大会で、1年生は研究成果を発表する。活動の評価は、独自のルーブリックを使い、レポートだけでなく、途中で提出する研究計画書や先行研究レポート、プレゼンテーションなどを総合して行われる。ゼミ全体での研究成果よりも、個々の研究活動を対象に評価しているのは、主体性や協働性を重視しているためだ。

18年度は、教科の授業と「協働ゼミ」を連動させようと改善を図った。例えば、世界史の授業では、宗教問題など、現代の社会問題の背景を解説したり、英語の授業では、海外の

政治家・経営者のスピーチや現代社会の課題にかかわるトピックを扱ったりと、単元の並べ替えや教科間連携を行うことで、生徒の教養を高め、興味・関心を引き出すのである。

「生徒は、探究学習を進める上でのヒントや材料を教科の授業で学んだことから探すようになり、教科の授業を聞く姿勢も変化しています。各教科・科目で学んだ知識や技能、思考力などを、『協働ゼミ』で発揮するという流れをつくりたいと考えています」(藤井先生)

19年度は、教科の内容と「協働ゼミ」の関係を示すカリキュラムマップを作成する予定だ。「協働ゼミ」で求められるリテラシーやコンピテンシーと、各教科・科目の各単元で学ぶ内容の関係を明確化し、不足している点は教科の指導計画に盛り込んでもらうなど、教科の授業との連動をさらに強めていく。

● ● ● eポートフォリオの有効活用を検討

ポートフォリオの推進にも、18年度1学年から着手した。特に、海外大学への進学やAO・推薦入試の受

図1 NIEのワークシート

SDGsと新聞記事をつなげて考えよう

クラス 番号 氏名

1 自分が興味をもった新聞記事で、SDGsと結びつけられる記事を取り付けよう。*場合によっては複数枚も取られること。

記事が大きい場合は、見出しが見えるように内側に折り込めるように貼るなど、工夫してください。

2 最も関係のあるSDGsの目標を選択しよう。*複数に当てはまる場合も、最も当てはまるもの1つを選んでください。

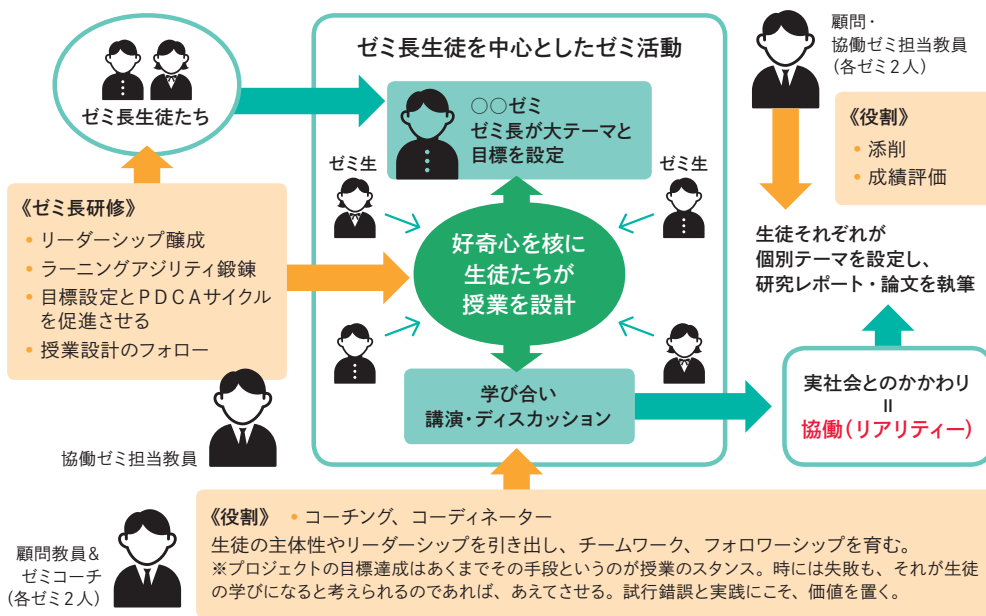
3 記事の内容を簡単にまとめよう。

4 その記事に興味をもった理由と自分の意見をまとめよう。

5 その記事の内容についてSDGsの観点から見た課題・課題解決案について考えよう。【発展】

NIEでは、SDGsと関連した記事に着目させて、考えを深めさせている。*学校資料をそのまま掲載。

図2 「協働ゼミ」の全体像



2018年度の協働ゼミのテーマ

日本臺灣文化(注1)、ビジネス、ツーリズム、社会福祉、地域活性、アフリカ、法と政治、アート、アジア、食、口永良部島、教育、エコロジー、STEM教育(注2)、メディアデザイン、スポーツ、人間科学(心理、哲学)

注1) 日本と台湾の文化。注2) STEMは、Science、Technology、Engineering、Mathematicsの頭文字で、STEM教育は、科学・技術・工学・数学に重点を置いた教育、人材育成のこと。

*学校資料を基に編集部で作成。

験者が多い郁文館グローバル高校では、ポートフォリオの重要性は一層高まると考えている。ポートフォリオ担当の宮坂美奈子先生は、次のように語る。

「郁文館グローバル高校の生徒は、

約4割が海外の大学に進学し、国内受験もAO・推薦入試がほとんどで、どちらの入試でも高校時代の活動と、それを通して身につけた資質・能力がメタ認知できて身につけた資質・能力が求められます。現在は、時系列に沿っ

て蓄積していますが、今後は、生徒自身が活動を系統立てて分類し、効果的な振り返りができるよう、指導していきたいと考えています」

18年度は、「Case1」(*4)のポートフォリオや学習記録機能と並行して、「社会探究」や「協働ゼミ」の成果、NIEのワークシート、読書感想文など、紙の記録もまとめていく。特に「社会探究」では、探究学習の過程で作成したマインドマップなど、手書きの記録も多く、紙とeポートフォリオを併用しているが、今後の大学入試改革を見据えて、「Case1」の活用のある方を検討している。

英語4技能の育成に向け、リテリング重視の指導に転換

英語4技能の育成に向けた授業改善も進めている。特に、学力層が幅広い郁文館高校では、かつては読解中心の指導だったが、18年度1学年からは、学習内容を自分の言葉で伝えるリテリング重視へと転換した。単元の最後に、学んだことを英語で書いたり話したりできるようにすることを目標とし、定期考査では長めの英作文を課すなど、アウトプットの場面を増やした。

タブレット端末を活用し、スピーキングのパフォーマンステストも行っている。英語科主任の牧野圭太郎先生は、その方法をこう説明する。

「タブレット端末に自分が英語を話す姿を動画として記録し、それを提出させて、評価の対象としています。パフォーマンステストを教師と生徒の1対1で行うと、生徒に待ち時間が発生し、評価も大変でしたが、そういった課題が解消されました」

19年度2学年では、「社会探究」との連動も視野に入れている。例えば、生徒に「クロロン技術」について英語で説明させるなど、専門的な内容を英語で発表できるように、リテリング力を高めていきたい考えだ。

また、進路指導では個別の対応が一層重要になると、内藤先生は考えている。

「AO・推薦入試の募集人員の拡大が見込まれる中、生徒それぞれに合う入試形態を、教師が見極めなければなりません。これまで以上に生徒との面談を綿密に行い、教師同士で情報共有を図りながら、大学入試改革に対応した進路指導を模索していきたいと考えています」

*4 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

兵庫県立相生高校

1学年独自の活動とともに、全校で情報を共有しながら授業や定期考査を改善

兵庫県立相生高校では、2018年度、1学年団の教師全員で指導の目線を合わせ、探究学習の推進、授業や定期考査の改善、英語4技能の育成、ポートフォリオの蓄積といった教育活動に取り組んできた。その過程で、グランドデザインを作成し、組織的に取り組む体制を整えている。

●市への提言を目指した探究学習 ●で主体性や協働性を育む

地域の進学校として、多数の国立大学進学者を輩出する兵庫県立相生高校は、2015年度の県内公立高校の学区再編を機に、地域の学力上位層が他地域の高校に進学する状況が続いている。西茂樹校長は、生徒の様子を次のように語る。

「生徒たちは、真面目ですがおとなしく、主体性を高めることが課題でした」

18年度を迎えるにあたり、18年2月に外部講師を招いて大学入試改

革などの最新情報を共有する校内研修を実施。そして、必要な改善策について全教師にアンケート調査を行い、その結果を共有。18年度1学年を中心にそれらを実践していった。

新しい取り組みの1つが、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）における探究学習だ。「わがまち相生探究活動」と銘打ち、地域のよさをアピールするCMを相生市に提言することを目標とした活動を行った。1学年主任の荒内秀明先生は、その背景を次のように説明する。

「本校の総合学習は、それまで進路学習が中心でしたが、探究のテー

マを自分の将来に結びつけながら学びを深めさせ、主体性や協働性を育みたいと考えました。そうした折、相生市から高校生の意見を市政に取り入れたいという申し出がありました。自分とかわりが深い地域の課題を探究のテーマとすれば、生徒の意欲が高まりやすいのではないかと考えました」

活動の流れは、図1の通りだ。医療、子育て、観光など、関心の高い分野ごとに生徒を学級横断の形で5人1グループとし、8グループにつき1人の教師が担当についた。そして、相生市職員から市の特色や課題

兵庫県立相生高校

- ◎校訓は「自律 創造 敬愛」。兵庫県教育委員会「理数教育等学力向上重点指定校」として、自然科学コースを中心とした理数教育の充実、国際理解教育の推進、表現力を高める取り組みに力を入れる。企業や大学など、地域と連携した活動も盛ん。
- ◎設立 1977（昭和52）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約200人
- ◎2018年度入試合格実績（現浪計） 国立大学は、京都教育大、神戸大、兵庫教育大、鳥取大、兵庫県立大などに51人が合格。私立大は、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大、甲南大などに延べ371人が合格。
- ◎URL <https://www.hyogo-c.ed.jp/~aiot-hs/>



校長
西茂樹
教職歴35年。同校に赴任して2年目。



英語科主任、総務広報部長
岸本由樹
教職歴32年。同校に赴任して5年目。英語科。



進路指導部長
桑田卓郎
教職歴31年。同校に赴任して7年目。地理歴史・公民科。



1学年主任
荒内秀明
教職歴29年。同校に赴任して2年目。数学科。



1学年担任
山本一芳
教職歴22年。同校に赴任して1年目。理科。

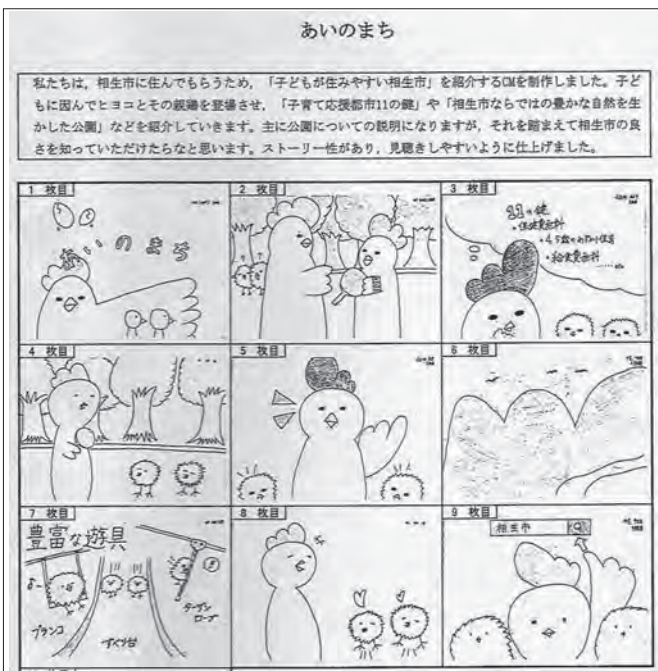
*プロフィールは2019年3月時点のものです。

図1 1学年「総合的な学習の時間」の進め方

導入		グループ探究							まとめ			
4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
オリエンテーション	相生市職員講演	グループ分け	テーマ決め 資料収集	主張提案検討	ポスター下書き	ポスター清書	ポスター発表	CMシナリオ	CM下書き	CM清書	CM発表	全体発表

* 学校資料を基に編集部で作成。

図2 生徒が作成した相生市の紙芝居形式のCM (例)



ポスター発表では、相生市職員から「若い世代の目線」と「具体的なアイデア」を望んでいることが伝えられていた。それを踏まえて、各グループはCMのシナリオを検討し、紙芝居の形でアイデアを表現して発表した。

* 学校資料をそのまま掲載。

などの説明を受け、一人ひとりが探究したいテーマと理由を書き、それを持ち寄ってグループで議論し、1つのテーマを設定した。1学年担任の山本一芳先生は、こう述べる。

「テーマ設定は、探究学習の中でも難しいプロセスですが、まず1人でしっかりと考えさせて、それを基にメンバーと議論し、より具体的なテーマにしていきました。探究しにくいテーマを選ぶグループもありましたが、壁にぶつかることも学びと捉え、生徒の考えを尊重しました」

次に、探究するテーマについての調べ学習を行った。その際、生徒に「主張には根拠が必要だ」と繰り返し伝え、表面的な主張にならないように意識させた。そして、探究したテーマに関する提案をポスターにまとめ、担当教師ごとのグループでま相生市職員が「アドバイスシート」に記入して行った。発表に対して寄せられた意見を踏まえてCMのシナリオを作成し、19年2月に紙芝居形式のCMを発表した(図2)。

「ポスター発表を経たことで伝えたい内容が精選され、CMでの表現方法がどのグループでも工夫されていきました」(山本先生)

19年3月には市長を招いた全体発表を行い、ポスターとCMそれぞれの優秀作品が表彰された。

「学級横断のグループとしたので、あまり知らない生徒同士がメンバーとなりましたが、そうした中でも1つの目標に向かって自分の意見を主張し、力を合わせて取り組んでいました。今後の課題は、生徒が到達

目標のイメージを具体的に持てるよう、ルーブリックを作成することで」(山本先生)

生徒が主体的、協働的に活動し、それを振り返る機会を充実させることで、生徒の姿勢は変容しつつある。

「きっかけを与えられてから動くのではなく、次第に自らボランティア活動に参加するなど、主体的、積極的な姿が見られるようになっていきます」(荒内先生)

● ● ●
定期考査で出題の10%程度を
思考力等を測る問題に

思考力・判断力・表現力の育成を
目指した授業や定期考査の改善にも
着手した(P.16 図3)。進路指導部
長の桑田卓郎先生は、こう述べる。

「数学科では類題の解法を説明し
合ったり、体育科ではハードルをう
まく跳ぶ方法を話し合ったり、各教
科・科目の特性を生かしながら、ペ
アやグループなどの協働学習を取り
入れるケースが多く見られます」

定期考査では、10%程度の配点を
思考力・判断力・表現力を測る問題
とすることをルールとした。「大学
入学共通テスト」の試行調査が行わ

図3 各教科の授業改善(抜粋)

教科	内容
国語	<ul style="list-style-type: none"> 授業のテーマに基づいた小論文作成 読みの解釈を比較し、発表 百字要約、百字感想
地理 歴史・ 公民	<ul style="list-style-type: none"> 資料、写真、絵画、グラフなどを読み取り、当時の状況を説明 新聞記事の各社比較、その記事の背景や理由の考察 株価動向の背景説明
数学	<ul style="list-style-type: none"> 類題の作成、定期考査予想問題とその解答の作成 図やグラフを用いて説明する機会の設定 発展問題にグループで取り組み、解答を発表 演習問題の解答の板書
理科	<ul style="list-style-type: none"> 自然現象の理由を説明
英語	<ul style="list-style-type: none"> 新しい単元に入る前の、その内容にかかわる授業前テストを実施 学習内容を自分の言葉で再表現(ストーリーリテリング) パラグラフごとのタイトル作成 本文全体を俯瞰する質問 意見英作文をペアやグループで添削し合う イラストや写真を英語で説明
その他	<ul style="list-style-type: none"> オリジナルの準備運動や集団行動演技の発表(体育) 環境問題についてグループごとにプレゼンテーション(保健) プレゼンテーションソフトを利用した発表(情報)

*学校資料を基に編集部で作成。

れた11月以降、その出題形式に合わせた作問も意識している。

「英語科では、世界史担当の教師と相談し、世界史に関連したトピックの問題を出すなど、教科間の連携も進みつつあります」(荒内先生)

それらの授業の指導案・教材、定期考査の問題は、職員会議やパソコンの共有フォルダーを活用して全教科・科目で共有し、全校の組織的な取り組みとなるようにしている。

● 授業内外の多様な学びで 英語の4技能を育成

英語科では、大学入試における英

語4技能の評価を見据えた指導改善も進めている。特に「話す」「書く」を

苦手とする生徒が少なくないため、自分の意見を英語で発信するペアワークなどを充実させた。英語科主任の岸本由樹先生は、こう説明する。

「十分な量を発信させようとしていますが、一方でどこまで正確性を求めるかを、英語科でALITも交えて議論しています。正確性を求めすぎると、生徒はそれを気にして話したり書いたりすることをためらってしまいます。英語の資格・検定試験の採点結果なども参考にしながら、指導の方向性を見定めていきます」

毎日の昼休みに、ALITと会話す

る場を設定。参加者には成績に加点する仕組みを導入したところ、1年生のほぼ全員が参加した。さらに、

3月には他校のALIT10人の協力も得て、「English Day」を実施。ALITは出身国について、生徒はグループごとに日本文化について、それぞれプレゼンテーションした。

「大学入学共通テスト」の枠組みで実施する民間の英語の資格・検定試験への対応としては、19年度に「GTEC」を1・2年生全員が受

検し、3年生は希望者が受検する。受検前には、授業で「GTEC」付属の問題集を活用するなど、出題形式に慣れる場も設ける計画だ。

● 自身の内面的変化を捉えて、 活動を振り返らせる

ポートフォリオの構築も、18年度から始めた。同校では、生徒の主体性をさらに高めようと、5年程前から、体育祭や文化祭などの学校行事を生徒主体の運営で行ってきた。18年度はそれを一歩進めて、生徒が各活動において自分の役割を踏まえた自己評価を行い、担任がコメントを返す「生徒活動報告書」を取り入れ

た。それは、学校行事のほか、部活動、ボランティア活動など、活動ごとに記録するよう指導している。

「活動の振り返りとともに、以前の自分と比べた変化を捉えて書くように伝えていきます。活動の成果という点、成績やアウトプット物に目が向きがちですが、『〇〇が苦手だと分かり、次はこう頑張りたい』といった気づきを得ることも大きな成果だと、生徒に話しています」(荒内先生)

「生徒活動報告書」は、教師用の記入用紙もある。学校行事や部活動などにおける生徒の印象的な姿を記入し、生徒の様子を教師間で共有しやすくするための。

また、「マナビジョン」のポートフォリオ(※1)も併用して、探究学習の振り返りなども記録させている。今後は、「JAPAN e-Portfolio」(※2)との連携も進める考えだ。

● 組織的に取り組むための グランドデザインを作成

1学年団の新たな挑戦が進むにつれ、西校長は、もっと組織的な動きにする必要性を感じたと語る。「大学入試改革や次期学習指導要

*1 進路・進学応援サイト「Benesse マナビジョン」において無料で利用できるeポートフォリオ。 *2 一般社団法人教育情報管理機構が文部科学省より「JAPAN e-Portfolio」の運営を許可されて運営する高校eポートフォリオ機能、大学出願ポータル機能を有したサービス。

図4 相生高校の「グランドデザイン 2018」



*学校資料を基に編集部で作成。グランドデザインの全体像は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(https://berd.benesse.jp)からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

領を見据えつつ、本校の教育目標を達成するためには、学校全体で生徒への育成を目指す資質・能力を共有し、あらゆる教育活動を充実させる必要があると考えました。そうすることで、教師は自分の指導の意味を一層自覚し、自信を持って指導できるようにになると思っています」

西校長は、各教師と意見交換を通して育てたい資質・能力を6つ設定し、それらをどのような活動によって育むのかを、教科・科目や分掌ごとに検討するよう求めた。そうして各教育活動で育成する資質・能力を明らかにし、11月、「グランドデザイン2018」を完成させた(図4)。

「これまでの教育活動を通して、生徒にどのような資質・能力を育成していたのかが整理・可視化されました。そのため、『この資質・能力を伸ばしたいから、この働きかけに『育成を意識した指導ができるようになりました』(岸本先生)

グランドデザインで学校全体の方性が共有できたことで、同僚性が一層高まったと、桑田先生は語る。

「教師個人の力量や思いに頼るだけでなく、チームで取り組む雰囲気

が強まりました。生徒が学習内容への理解を一層深め、学びの広がりを感じる活動を、教科間で連携してさらに充実させたいと考えています」

●●●
**保護者の理解と協力が
 入試改革への対応には不可欠**

18年度を終える段階で重要だと感じていたのが、保護者への情報提供だ。同校では、保護者会や学年通信で高大接続改革の要点を繰り返し伝え、「大学入学共通テスト」の試行調査の問題も見せて、保護者に自校の取り組みへの理解を図ってきた。

「eポートフォリオの利用や英語の資格・検定試験の受検料の負担などには、保護者の協力が不可欠です。保護者の理解を十分得られなければ、これからの教育は難しいと実感した1年間でした」(荒内先生)

今後、毎年グランドデザインを見直しながら指導改善に努めていく。

「1年間の成果や課題をしっかりと検証し、従来の取り組みを精選しつつ新たな試みを積極的に行っていきます。これからは先生方の熱い思いを支え、組織で取り組むことを大切にしていきます」(西校長)

大分県立杵築高校

ポर्टフォリオ、グローバル教育、定期考査と、できる改善から推進

大分県立杵築高校が、2018年度1学年の生徒に身につけてほしい資質・能力として掲げたのが「きつき力」だ。そして、大学入試改革に関する情報を収集しつつ、ポर्टフォリオの活用、3年間を見据えたグローバル教育、思考力・表現力を評価する定期考査への転換と、手探りながらも着実に指導改善を図っている。

● 「きつき力」の育成を目標に、
● 考える力や人間性を育む

2018年4月、大分県立杵築高校の1学年団は、新入生を迎えるにあたり、高校3年間で生徒に身につけてほしい資質・能力として「きつき力」を掲げた。それは、「聞く力」「伝える力」「気づく力」の頭文字を合わせた言葉で、主体的に考え、表現できる力を意味する。

3つの資質・能力の中で特に重視するのが、「気づく力」だ。自分自身の成長に気づくことに加え、集団の中で仲間の長所や強みに気づけるような人間性を高めてほしいという

思いが込められている。1学年主任の芦刈信司先生は、次のように語る。

「高校は、大学入試という目標があるために、義務教育と大学との間にある通過点と捉える人もいます。しかし、15〜18歳は、人間的に大きく成長する時期です。集団生活の中で変化・成長していく自分に気づいてほしいと思っています」

そうした思いを持ちつつ、1学年の指導を手探りで進めていった。

● ポートフォリオの活用を
● 生徒の成長実感につなげる

1学年団でまず動き出したのは、

ポर्टフォリオの活用だ。4月上旬、

ベネッセの研修会に参加し、ポर्टフォリオのねらいや運用方法、大学入試への活用などについての理解を深めた芦刈先生は、多面的・総合的評価への対応とともに、生徒が学習や活動の振り返りを行う重要性を学年団に説明。4月後半には、「JAPAN e-Portfolio」(*1)の活用を決めた。

「ポर्टフォリオに諸活動の振り返りをまとめることで、個々の活動の成果を集約し、生徒の成長実感や進路選択につなげられると考えました。高校生活で地道に取り組んできたことを多面的・総合的に評価される入試にも、その意義の大きさを感

大分県立杵築高校

◎ 大分県立杵築中学校・大分県立杵築高等学校を前身として創立。「志四海」を校是に、「尚学・剛健・真摯・向上」を校訓とする。2016年度、文部科学省「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」、専門教育政策研究所「教育課程研究指定校事業」の指定を受けた。

◎ 設立 1897（明治30）年

◎ 形態 全日制／普通科／共学

◎ 生徒数 1学年約200人

◎ 2018年度入試合格実績（現浪計）

国公立大は、北海道大、筑波大、京都大、山口大、九州工業大、九州大、熊本大、大分大、鹿児島大、北九州市立大などに72人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西学院大、西南学院大、福岡大、立命館アジア太平洋大などに延べ168人が合格。

◎ URL <http://kou-ita-ed.jp/kituki/>



1学年主任
芦刈信司
あしかり しんじ
教職歴22年。同校に赴任して6年目。国語科。



1学年担任
森本清香
もりもと さやか
教職歴10年。同校に赴任して2年目。進路指導部。英語科。

じました」（芦刈先生）

導入決定後の展開は早かった。「JAPAN e-Portfolio」のフォーマットを参考に、探究活動や学校行事、部活動など、8つのカテゴリーで記入用紙を作成。それを生徒に配布し、1学期間は手書きで記入させ、ファイルにまとめるよう指導した。

*1 一般社団法人教育情報管理機構が文部科学省より「JAPAN e-Portfolio」の運営を許可されて運営する高校 e-ポートフォリオ機能、大学出願ポータル機能を有したサービス。

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

図1 ポートフォリオに入力する項目一覧

全員入力しなければならない項目			
チェック	項目	チェック	項目
	志四海プロジェクト (A P U交流会)		志四海プロジェクト (GLOBAL 講演会)
	トレクリーンアップ		ベネッセ進路講演会
	職業人講話		杵高クリンアップ
	十王祭 (文化の部)		集団面接
	十王祭 (体育大会)		系統別学部学科研究
	校内ビブリオバトル		1年前期委員会・クラス係
	主権者教育模擬選挙		1年後期委員会・クラス係

基本情報登録後に活動内容を入力しなければならない項目			
チェック	項目	チェック	項目
	部活動 (基本情報)		各種実行委員会 (基本登録)
	部活動 (活動内容)		実行委員会 (活動内容)
	生徒会活動 (基本情報)		地域活動
	生徒会活動 (活動内容)		習い事

参加者のみ記録する項目			
チェック	項目	チェック	項目
	英語検定		学ぶ力向上ゼミ
	漢字検定		グローバルリーダー育成事業
	小学校学習補助ボランティア		科学の甲子園
	Kit-sukiになる学生研修		ふれあい看護体験
	私立図書館ボランティア		イングリッシュキャンプ
	しごとフォーラム		SGH 成果発表会
	ソーシャルワーカー体験		

上記以外の入力項目 (※それ以外の項目を入力している場合は、下の枠に項目名を記入すること)			
チェック	項目	ポートフォリオ記録総数	

学期末にポートフォリオに入力する項目の一覧表を配布し、入力漏れがないようにした。
* 学校資料をそのまま掲載。

並行して「JAPAN e-Portfolio」と「マナビジョン」のポートフォリオ (*2) との互換性を確認し、デジタル入力への準備を進めた。そして、夏季休業中の補習時、学級ごとに生徒をパソコン教室に呼び、1学期に書いた内容を「マナビジョン」のポートフォリオに入力させた。さらに、9月には、生徒にスマートフォンを持参させ、各自の端末から入力する方法を説明。ログインや振り返りの仕方などの質問に対応する相談期間も1週間設けた。

そうして1年生全員がポートフォリオを活用できるようにし、日常的な入力は生徒に任せた。また、入力漏れがないよう、各学期末に記録項目の一覧表を配布し、未入力がないよう注意を促している (図1)。
3学期に行った「進路サポート」 (*3) の進路探究チェックで「その進路を希望するきっかけとなった出来事」を書く際には、ポートフォリオを見ながら考えさせた。1学年担任の森本清香先生は、その意義を次のように語る。

「高校生活と進路選択のつながりに気づかせることが、この活動の目的でした。実際、教育学部を志望しているのに、それにかかわる活動をももっていないことに気づいた生徒もいました。自分が経験したことを基に進路を決定すること、進路実現に向けて自分で行動していく難しさを学ぶ機会になったと思います」

ポートフォリオへの入力は2年次以降も続け、最終的には3年次での推薦・AO入試出願前に、蓄積したポートフォリオを活用しながら高校生活を振り返り、自身の進路の決意表明を各学級で行う予定だ。どういった経験が自分を成長させたのか、自分がどんな仕事に就き、どのような生きていきたいのかを、ポートフォリオの記述を踏まえて展望させる。

「教師が指摘するのではなく、生徒自身が自分の変化や成長に気づき、将来に向けての課題を考え、次の行動につなげる機会にしてほしいと思っています」 (菅刈先生)

● ● ●
「志四海プロジェクト」で
英語活用への意識を高める

英語4技能の育成に向けては、3

年間のグローバル人材育成プログラム「志四海プロジェクト」を始めた (P.20 図2)。

「地方部にある本校では、日常生活において英語を使う機会はほとんどありません。そこで、本校の持つ教育資源を生かし、海外に目を向ける機会や外国人と話す場を、1年次から段階的に設けようと考えました」 (菅刈先生)

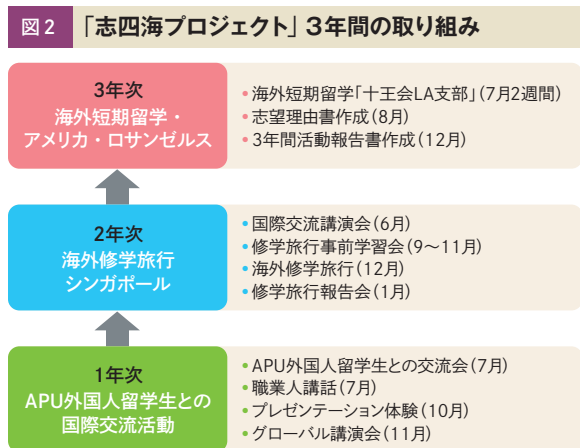
7月、同校から最も近く、外国人留学生が多数在籍する立命館アジア太平洋大学 (APU) と連携し、外国人留学生9人を招いた交流会を実施した。外国人留学生に留学先として日本を選んだ理由や日本の高校生へのメッセージを語ってもらい、レクリエーションも行った (P.20 写真)。

「生徒たちは、授業でスピーキングの練習をしていても、外国人留学生を前にすると、とっさに英語が出てこずに悔しそうです。『英語力をもっと伸ばしたい』といった声も上がっています」 (森本先生)

さらに、11月にはアメリカ・ロサンゼルス在住の卒業生を招いて講演会を実施し、異文化への興味・関心を喚起する機会とした。

19年度に行う2年次での修学旅行

* 2 進路・進学応援サイト「Benesse マナビジョン」において無料で利用できるeポートフォリオ。 * 3 ベネッセの教材の1つで、生徒一人ひとりの視野を広げ、将来の進路について考えるきっかけを与える教材。



*学校資料を基に編集部で作成。

写真 APUの外国人留学生との交流会では、生徒から「表情や身振りで相手の気持ちが分かり、私の下手な英語を真剣に聞いてくれて感謝しました。英語の大切さを実感しました」といった声が聞かれた。

は、行き先を同校で初めてとなる海外として、シンガポールを選んだ。芦刈先生は、以前担当した学年でも修学旅行先を東南アジアにすることを提案したが、治安などの理由で保護者から賛同を得られなかった。今回は、事前にPTA役員に相談してから、保護者の賛同を取りつけた。「大学入試の変化を具体的に予測できない状況が、かえって追い風になりました。今後の大学入試では、英語4技能の習得やポートフォリオに残せるような高校時代の豊かな経験などが求められることを伝え、海外研修の意義を認めていただくこと

ができました」(芦刈先生)
シンガポールの活動では、英語でのプレゼンテーションなどを計画している。そうして全員が海外を経験した上で、3年次には、希望者から4人を選抜し、10日間のロサンゼルス研修を行う予定である。

● ● ● アウトプット重視の指導で 英語4技能を総合的に高める

思考力・判断力・表現力や「きつき力」の育成を踏まえた、授業や定期考査の改善も進めている。

英語科では、16年度から2年間、

大分県教育委員会の指定を受けて、ディスカッションを取り入れた表現活動に取り組んできた。その実績を踏まえ、18年度1学年においても4技能重視の授業を行った。

まず力を入れたのは、ライティングやスピーキングの指導だ。英語を使うことに慣れさせようと、スピーキングのパフォーマンステストの評価は、正確性にはこだわらず、相手に伝われば加点する方針とした。すると、英語を話すことに抵抗感を持たない生徒が増えていった。また、模擬試験において、英作文の問題が無解答の生徒が少なくなった。アウトプットを重視した指導によって、文法は苦手でも話すことは得意というように、多くの生徒が自信を失うことなく、英語学習への意欲を持ち続けられるようになった。

そうした成果を客観的に測るために「GTEC」を年1回受検。18年度1学年は、ライティングとスピーキングで好成績を上げた。

「ライティングやスピーキングでよいスコアを出したことで、生徒は頑張れば結果につながると実感したと思います。自信を持ってアウトプットできるようになった今、

accuracy(正確性)をどのように高めていくかが課題です」(森本先生)

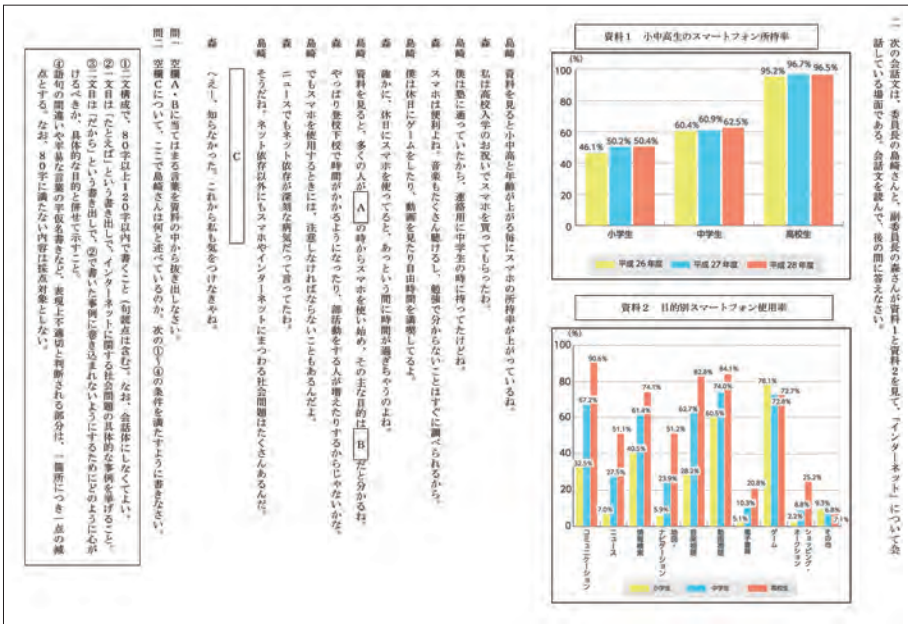
● ● ● 社会とのつながりを重視した 問題を定期考査で出題

国語科では、2学期の定期考査から、教科書の文章に関連した、教科書には載っていない資料やデータ、会話文などを素材とした読解問題を出している。そして、制限字数をやや長めの120字に設定した記述式問題を出し、初見の素材を教科書の文章の内容と比較させたり、日常生活と関連づけて考えさせたりして導いた答えを書かせている。

例えば、杵築市の福祉施策について、教科書の文章の筆者ならどう考えるかを推測させる問題や、グラフを基にインターネットの利用について考察させる問題(図3)などを出題。そして、定期考査後には、生徒の解答を示しながら解説して、「この解答は8点としたけれど、なぜだと思う?」などと問いかけ、資料の読み取り方は正しかったのか、どういった要素が解答に必要だったのかを、生徒に改めて考えさせた。

「難しい評論や架空の小説を読解

図3 国語科の定期考査の問題(抜粋)



国語科では、「大学入学共通テスト」を見据え、グラフの内容を読み取って、自身の考えを記述させる問題を出した。上記の問題は、グラフを見ながら話している高校生の会話を素材としている。記述式問題では、解答にあたって4つの条件を課した。

*グラフの出典は、「平成28年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 調査結果(速報)」(内閣府)。
*学校資料をそのまま掲載。

することが何の役に立つのかと思っ
ている生徒もいます。そういった生
徒にとっても、『大学入学共通テス
ト』の試行調査の問題は、国語を学
ぶ意義を理解することができる有効
な内容だと感じています。大学入試
で国語と日常生活とを関連づけた問

題がこれまで以上に出されるようにな
れば、国語を学ぶ意欲を高めるこ
とができるでしょう(芦刈先生)

作問においては問題レベルの設定
に苦労したが、生徒の解答を見なが
ら、「本文中から抜き出して書きな
さい」などと、生徒の学力に合わせ

3年間を見通した
指導体制を目指す

18年度は、教育環境や大学入試の
変化に対応しようと指導を変えてき
た。情報が限られる中、改革を進め
られた背景には学年団の共通理解が
あったと、芦刈先生は振り返る。

「例えば、ポータルフォリオの活用
を提案した際、大学入試における有
効性について懐疑的な意見が出るこ
とも予想しましたが、そうした声は
ありませんでした。先生方が大学入
試改革の意義を理解し、生徒の資
質・能力を伸ばすために必要なこと
を『きつき力』を通して共有できて
いたからだと思います」

ポータルフォリオは、生徒の思考を
広げるツールとして機能し始めてい
る。当初は、学習や学校行事の内容
の事実のみを入力する生徒が多かつ

て条件をつけるといった試行錯誤を
重ねるうちに、解答を書ける生徒が
増えていった。

「模擬試験でも記述式問題の無解
答数が減り、書くことへの生徒の抵
抗感がなくなってきたことを感じ
ます」(芦刈先生)

たが、何度も入力するうちに、どう
感じたのか、何を考えたのかなど、内
面を振り返る記述が増えていった。

「ポータルフォリオは、個々の教育
活動を束ねる役割も果たすものであ
り、そういった意味でカリキュラム・
マネジメントの実現の鍵にもなると
捉えています。教育活動の相乗効果
を高めるといふ観点で、取り組みを
精査する資料としても活用したいと
考えています」(芦刈先生)

今後の課題は、18年度の活動から
得た気づきやノウハウを新1学年団
に伝えることだ。特に必要性を感じ
ているのが、ポータルフォリオを統括
する担当者置くことであり、ポー
トフォリオの意義や仕組みを熟知
し、3年間でどのような資質・能力
を身につけさせるのかという展望を
持った教師を、生徒や他の教師がい
つでも相談できる窓口として機能さ
せることを検討している。

「ポータルフォリオの活用や、定期
考査の改善などの必要性を受け止め
切れていない教師もまだいます。19
年度の1学年団との意思疎通を図り
ながら、資質・能力の育成に向けた
全校的な改革に発展させていきたい
と思います」(芦刈先生)

資質・能力の育成に向けたマインドセット をつくり、学年・学校全体で共有する

2018年度1学年の指導について、4校の実践を見てきたが、
ここでは、各校で指導の中心を担った教師が集まり、実践を通じてどのような成果や気づきがあったのか、
それらを今後の高1指導にどう生かしていけばよいのかについて語り合った。



大分県立杵築高校

1学年主任
声刈信司
あしかり・しんじ

実践は P.18 ~ 21 参照

兵庫県立相生高校

1学年主任
荒内秀明
あらうち・ひであき

実践は P.14 ~ 17 参照

東京都・私立郁文館高校

進路指導部
西谷知穂
にしたに・あきほ

実践は P.10 ~ 13 参照

青森県立青森高校

進路指導主事
笠井敦司
かさい・あつし

実践は P.6 ~ 9 参照

- 指導方針や枠組みをつくり、教師間で共通理解を図る

4校の実践の共通点の1つに、指導方針や枠組みに関する共通理解を教師間で図ることが挙げられます。

声刈 青森高校の「ルーブリック作成のための概念図」(P.7図2)は、資質・能力の育成の考え方が視覚化されていて分かりやすく、それによって先生方の足並みがそろっているのだと思いました。保護者にも、自校の教育活動の意義を明確に説明できそうです。本校も1学年の目標に「きつき力」を掲げていますが、学校として育成を目指す資質・能力の明確化と、それを共有する重要性を改めて感じました。

笠井 本校がその概念図を作成したのは、資質・能力の育成において科学学習と探究学習はつながっているのに、両者の学びを別々に捉える傾向が教師にあったからです。そこで、「習得」から「活用Ⅱ」までが教科で学ぶ段階であり、生徒自らがそこで培った知識・技能を教科横断で活用する学びである「探究」を行うことで「青高力」(P.7図1)が高まるという「育ちのプロセス」を示しま

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

した。それを基に、「青高力ルーブリック」とコンピテンシー・ベースのシラバスを教師全員で作成したことで、教科学習と探究学習が同じ育ちのプロセスにあるものだという指導のマインドセットができました。

西谷 教科学習などとの関連性を見いだせず、探究学習を独立した活動として捉えている教師は少なくないと思います。本校ではSDGs（*1）を教育活動の軸とする方針を打ち出し、教科学習とNIE（*2）や探究学習などを結びつけるようにしました。例えば、教科の授業でSDGsに関連づけた説明を盛り込んだり、NIEのワークシートをSDGsの17項目を示したものに改訂したりしています（P.12図1）。生徒は、学習の目的を見いだしやすくなったと思います。

荒内 本校でも、「グランドデザイン2018」（P.17図4）の作成後、教師間の教育活動の共通理解がより深まり、教育活動の内容をグランドデザインを基準に考えられるようになりました。例えば、探究学習の発表会は、主体性や表現力を育む場になるからと、その司会を生徒に任せることになりました。すると、立候補

者が4人出てきて、その中には普段は控えめな生徒もいました。生徒が多様な経験をする機会を広げられたと思います。その一方で、本校では校内でのスマートフォンの使用が禁止であり、パソコン教室の利用も制限があるため、eポートフォリオの導入に時間がかかりました。関係する分掌と連携し、特定の時間に限り、生徒が校内で自分の端末を使えるようにするなど、合意形成をすべきでした。新たな取り組みは、早めに関係者に相談することが大切になると、次の1学年団には伝えたいです。

●教科・科目を超えた実践の共有が指導の足並みをそろえる

——教育活動の具体的な内容を共有する方法も、各校とも様々な工夫をされていて、教師間の指導の足並みをそろえる鍵になっていました。

笠井 定期考査の問題は、各教科会議で共有するようにしています。単なる報告に終わらせず、出題内容が適切かどうかをシラバスに照らし合わせて検討するといったことが、指導改善に結びついています。

荒内 本校では以前から、定期考査

の問題をパソコンの共有フォルダーに入れて、全教師が見られるようにしています。18年度は、3年生が「大入学共通テスト」の試行調査を受検したこともあり、思考力や表現力を評価する問題について、学年や教科・科目を超えて話す機会が増えました。例えば、英語科の教師が、地理歴史科の教師に授業で扱っている内容を聞き、それを素材に作問していました。また、生徒の素晴らしい解答は、周りの教師にも見せて共有することもよくあります。

西谷 本校では、中学校入試で適性検査型入試の試験問題を作成しています。思考力や表現力を評価する教科横断型の問題ですが、作問過程で他教科の考え方に触れることになり、その経験が、新しい学力観に応じた定期考査や課題の作問に生きると感じています。例えば、高校1年次の「論文」の学年末課題では、多くの図表からデータを読み取り、問題発見と問題解決の力を測る、国語と社会を融合した問題を出しました。

芦刈 どの教師も手探りで作問している状態だからこそ、教科・科目を超えた共有が重要で、本校でも、全教科・科目の定期考査の問題を学

年団で共有しましたし、19年度の1学年団にも引き継ぎました。共有の場があったことで、理数系科目が教科書の内容の習得を先に進めることを重視するあまり、思考力や表現力を評価する問題が手薄になりました。例えば、青森高校が作成されたテストの出題配分表（P.8図4）のように、出題方針を明確に示すことは有効な方法だと思います。

笠井 本校では、地元国立大学のAO入試や個別学力検査の問題を見せ、既に思考力・判断力・表現力が問われていることを先生方に示して、授業や定期考査の転換を促しました。ただ、教科・科目の特性も、足並みをそろえることを難しくしている要因だと思います。

●これまでと違うからこそ、保護者の理解が一層重要に

荒内 保護者とも、大学入試改革の状況を共有することが一層重要になると感じています。本校では、保護者会でeポートフォリオについて説明した際、「なぜ、全員入力しなければならぬのか」といった質問が

*1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。①貧困をなくそう、②飢餓をゼロになど、17の目標と169のターゲットから成る。*2 Newspaper in Education の略。新聞などを教材として活用する教育活動。

ありました。大学入試が多面的・総合的評価になることは学年通信などを通じて保護者にも伝えていきましたが、個人情報取り扱いへの意識が高く、eポートフォリオの必要性に納得できないうちは、子どもにも入力させることに抵抗があったようです。ただ、eポートフォリオは、今後の大学入試で確実に必要であり、3年生の入試直前に作成できるものではないと説明し、生徒が不利にならないよう理解を求めました。

芦刈 本校でも、修学旅行の行き先の変更やeポートフォリオの導入など、保護者の経済的負担が増えるため、変更や導入の意義を丁寧に伝えました。大学入試がどう変わるかはまだ不透明な部分も少なくないと率直に伝え、だからこそ、eポートフォリオ、「志四海プロジェクト」(P. 20 図2)、定期考査の改善を進めると説明したところ、保護者の方々に賛同していただきました。

● ノウハウを持つ人材を ● 活用し、見通しを立てる

大学入試改革の具体的な内容が徐々に見えていく中、手探りで進め

られたことも多かったと思います。

芦刈 本校では、年度当初にすべての教育活動の内容を決め込まず、できることから始めて、情報をつかみながら軌道修正をしていきました。長期休業中にも学年団が集まり、入手した情報を伝え、対応を検討する機会も設けました。そうした中、早い段階でポートフォリオの作成を教育活動の軸に据えたのはよかったです。

3年間の過去の自分と比較して成長したと実感を持たせるために、ポートフォリオを活用していきたい。 **芦刈**



ランドデザインを基準に考えることで、各教育活動の目的が明確化し、効果的な取り組みが行えるようになった。 **荒内**

思います。思考力などは、生徒それぞれに水準も成長の度合いも異なりますから、他者との比較ではなく、過去の自分との比較で力が高まったと実感させることが最も大切です。3年間で経験する学習や学校行事など、すべての活動をポートフォリオでつなげるために、全生徒が確実に記録できるよう、ログインの手順から丁寧に指導しました。学年目標の

「きつき力」は、自分の成長に気づく力でもあることを、3年生の最後の実施予定の、自身の成長を発表する会の後に種明かしする予定です。

荒内 新しい教育活動では、そのノウハウを持つ人材の活用がポイントだと思います。本校では、「総合的な学習の時間」で相生市と連携した探究学習を始めました(P. 15 図1)。本校初の試みでしたが、前任校で探究学習を指導した教師が学年団にいたので、その教師が中心になって指導計画を立て、活動を具体化していきました。全くの手探りではなく、最初に筋道が立てられたことで、安心して指導にあたれました。

西谷 確かに、しっかりと計画があることで、先生方は安心して指導できますし、それが効果的な指導なのかをPDCAサイクルの中で検証することが出来ます。本校で新たに言うことになった「PBLツアー」でも、探究学習との関連性において、明確な枠組みを作成しました。新しい取り組みでは臨機応変な対応も大切ですが、指導の継承と検証のためには枠組みも必要だと考えて、統一したプリントを活用するといった工夫をしています。

● PDCAサイクルを回し、
● 目標の達成度を検証

笠井 今思うのは、教育活動の検証は、年1回ではなく、委員会などを行う度に行えばよかったということです。それが、先ほどから課題に挙げられている、教師間・教科間の足並みをそろえることにつながると思いました。本校では17年度から、「青高力」の設定、ルーブリックとシラバスの作成、授業と定期考査の改善と、段階的に改革を進めてきました。そのすべての過程に教師全員がかかわることで「青高力」への理解が徐々に深まりましたが、その教育目標をどれだけ達成できているかについても、教師一人ひとりが自身の教育活動を検証することが必要です。

荒内 指導の検証には、生徒の声を聞くことも重要だと思います。本校では、数学の授業進度を例年よりも速めたところ、2学期末に生徒から負担が大きすぎると言う声が上がりました。そこで、教科内で話し合い、3学期は1週間ごとの復習に重点を置いた指導を行う方針を立て、小テストなどで知識・技能の定着を図るようにしました。その結果を見て、

大学入試の変化の本質を捉えることが、
指導改善につながる。

笠井



教育内容・方法の枠組みを明確化し、
PDCAサイクルの中で
成果や課題を検証することが大切。 西谷

今後の指導を検討していきます。

● 学校全体で指導を継承する
● 仕組みをつくる

—— 18年度の取り組みの成果や課題を踏まえて、これからの高1指導を考えることが重要になります。

笠井 本校では、管理職、各分掌・学年団の代表から成る「キャリア教

育委員会」が学校全体の仕組みを整え、学年団が実践するという手法を採ってきました。18年度に行ってきた教育活動は、成果が分からない中で次の1学年団に継承するため、学校として指導を蓄積する仕組みが必要だと考えたからです。新たな教育活動は指導方針を立てるだけでも大変ですから、それを委員会が行うことで、学年団は生徒の指導に集中で

きます。そして、学年団から実践の状況を吸い上げて、委員会で検証し、改善策を考えた上で、次の1学年で行うという体制を整えました。

芦刈 確かに、学年団は担当学年の指導で手いっぱい、成果や課題を検証し、次の1学年団に引き継ぐことは難しいのが現状です。学校全体での教育活動とするためには、学校組織を工夫する必要があるでしょう。

西谷 現在は、新しい学力観に応じた教育のあり方を、個々の教師が試行錯誤している段階です。学校全体の取り組みとして新しい教育活動を定着させるためには、すべての教師がその目的を十分に理解することに加え、どの教師でも実践できる共通のデザインをつくり上げる必要があると思います。

笠井 大学入試の変化の上面だけを見て指導を変えて、それで対策をしていると勘違いしてはいけないと、皆さんの話を聞いて改めて思いました。一連の教育改革や大学入試改革の目的が資質・能力の育成にあるという本質を理解し、それを学校全体で共有した上で、指導のマインドセットをすることが、今後の教育活動に必要なのではないのでしょうか。

改 革 事 例

育成を目指す資質・能力と学ぶ内容との関係を 明確化した教育課程表を作成し、確実に実践

新潟県立巻高校



- ◎ 2012年度、新潟県の県立高校として初の進学重視型単位制に改組。学校設定科目を設け、生徒が自身の関心や希望進路に沿って学びを選択できるようにしている。男子バレーボール部と女子ホッケー部は2年連続で全国大会に出場。
- ◎ 設立 1906 (明治 39) 年
- ◎ 形態 全日制/普通科/共学
- ◎ 生徒数 1年次約 280 人 (全日制)
- ◎ 2018年度入試合格実績 (現役のみ) 国公立大は、千葉大、上越教育大、新潟大、新潟県立大などに 78 人が合格。私立大は、青山学院大、中央大、法政大、明治大、新潟医療福祉大などに延べ 346 人が合格。
- ◎ URL <http://www.maki-h.nein.ed.jp/>



教育・入試改革への対応も 見据え、新たな学校改革に着手

県立唯一の進学重視型単位制高校である新潟県立巻高校は、国公立大学の現役合格者数が例年100人前後に上る地域の進学校だ。同校が新たな学校改革に向けて動き始めたのは、2017年の秋のことだった。18年度の1年次生は「大学入学共通テスト」を初めて受験する年次であるため、前年度中に学校教育目標を見直し、それを踏まえた教育課程や指導計画を作成する必要があった。高島徹校長は、学校教育目標を見直した理由について、こう説明する。

「探究学習や主体的・対話的で深い学びなどの様々な学習活動を行ってききましたが、学校全体の取り組みではなく、目的も年次によって差がありました。そこで、生徒に高校3年間で身につけさせる資質・能力を明確にすることにしました。教育方針や教育の目的は校訓などを基にした大局的な方向性を示しているものでしたので、生徒や教師に目指すゴールを具体的に分かりやすく示し、なおかつ高大接続改革や次期学習指導要領の趣旨にも沿った学校教育

育目標が必要だと考えました」

教育課程や授業をイメージしながら、学校教育目標を検討

学校教育目標の検討は、学校の運営方針を決定する「単位制推進委員会」で主に行われた。その委員は、管理職や教務主任、進路指導主事、各年次主任ら11人。委員会内にワーキングチームをつくり、まず素案を作成した。進路指導主事の竹内宏彰先生は、その時の状況をこう語る。

「ワーキングチームのメンバーで『VIEW21』高校版で参考となる事例を探したところ、具体的で分かりやすい学校教育目標を策定していたのが山梨県立吉田高校でした。同校を参考に、本校も学校教育目標を策定することにしました」

吉田高校では、「Yoshida PRIDE」を持つて未来を生き抜くことができ、生徒を育成することを教育の目的とし、その達成に向けた「教育の目標」に「自己肯定力」などの8つの資質・能力を育成することを掲げていた(本誌17年6月号P.10〜13参照)。巻高校もそれに倣いつつ、自校の生徒への育成を目指す資質・能

* 「学校教育デザイン」とは、本誌が2017年度6〜12月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。



佐久間純子
1年次担任
教職歴17年。同校に赴任して7年目。教務部。



竹内宏彰
進路指導主事
教職歴19年。同校に赴任して8年目。



小林都
1年次担任
教職歴30年。同校に赴任して6年目。進路指導部。



市村清貴
1年次主任
教職歴30年。同校に赴任して2年目。



阿部見和子
白楊QUEST委員長
教職歴31年。同校に赴任して6年目。進路指導部。



高島徹
校長
教職歴36年。同校に赴任して2年目。

力を議論。そして、「人間力」「飛躍力」など、8つの資質・能力から成る学校教育目標を策定した(図1)。「8つの資質・能力に決まるまで、委員会ですら6回検討しました。例えば、ワーキングチームの提案の中にあつた『成長力』には、『何をもつ

図1 学校教育目標

教育方針

「勤勞・廉直・恭敬」の校訓の下、明確な目標を持ち、自ら努力するとともに、親和協同して奉仕の精神と責任感を持って、積極的に行動する生徒を育成する。

教育の目的

- 心身ともに、健全で豊かな人間性の育成
- 伝統の「文武両道」へのさらなる研鑽
- 進路希望実現に向けた自立心・探究心の育成

教育目標 (目的を達成するための方策)

- 人間力/人間の魅力を高め、将来自立して生きていけるようになること
- 飛躍力/自分の持っている長所に気づき、それを生かして社会に貢献できるようになること
- 対話力/他者を思いやり、対話を通して新たな視点を獲得すること
- 行動力/行動を起こし、目的を実現させること
- 思考力/経験を振り返り、知識を基に柔軟に考えること
- 判断力/本質を見抜き、何をすべきか考えること
- 表現力/自分の思考を言葉や文章などで分かりやすく伝えること
- 探究力/森羅万象を深く追究すること

やや抽象度が高い人間力と飛躍力は、ほかの6つの資質・能力を身につけた上で最終的に獲得してほしい、より高次の力として位置づけた。

* 学校資料を基に編集部で作成。

**8つの資質・能力を育成する
学びを教育課程表で明確化**

18年1月、単位制推進委員会の提示した学校教育目標が職員会議で確

て成長したと言えるのか抽象的で分かりにくい』といった意見が上がり、再検討しました。その資質・能力を生徒に育成するためには、どういった指導や授業が必要か、教育課程にどう落とし込むのかまでを具体的にイメージしながら、学校教育目標を具体化していきました(竹内先生)

認められ、各教科・科目で8つの資質・能力をどの単元でどのように育成するのかを明示した教育課程表(教科年間計画表)の作成に着手した。まず、各教科・科目の代表から成る「教育課程委員会」が、『VIE W21』高校版の事例を参考にしながら教育課程表のひな型を作成。それを基に、各教科・科目では、18年度1年次担当予定の教師が中心となり、教育課程表の素案を作成した。それを教育課程委員会が検討し、修正を経て確定させた(P.28図2)。1年次担任の小林都先生はこう語る。

「新年度まで時間が限られていたため、学校教育目標の検討段階から準備を進め、1月以降に一気に作成しました。多くの教師が以前から授業にアクティブ・ラーニングの視点を取り入れていたので、教育課程表に8つの資質・能力を育成する活動としてグループワークや発表、リフレクションなどを盛り込むことはそれほど難しくありませんでした。8つの資質・能力と学ぶ内容の関係を示した教育課程表によって、各単元のねらいも明確になりました」

「白楊QUEST」と名づけて行う「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)も、8つの資質・能力を育成する活動・場面・方法を整理した。白楊QUEST委員長の阿部見和子先生は、こう説明する。

「進路学習では思考力や表現力、新入生宿泊研修では対話力や行動力といったように、活動ごとに育成を目指す資質・能力を明確にしていきました。その過程で、生徒が教師の話を聞くだけになっていくなど、8つの資質・能力のどの育成にもつながっていない活動は見直しました」

同委員会では、「白楊QUEST」や学校行事、生徒会活動などについ

* プロフィールは2019年3月時点のものです。

図2 教育課程表2年次「数学Ⅱ・B」の例(抜粋)

育成を目指す資質・能力			資質・能力	知識・技能	思考力・判断力・表現力			主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度		コマ数
分野・単元・履修時期			資質・能力の説明	探究力	思考力	判断力	表現力	行動力	対話力	
第3章 図形と方程式	数学Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> 直線上の点・平面上の点 直線の方程式・2直線の関係 円の方程式・円と直線 2つの円・軌跡の方程式 不等式の表す領域・実数 根号を含む式の計算 不等式の性質・1次不等式 絶対値を含む方程式・不等式 	第1回 調査まで	[方法] ・教科書の解説・例題を用いた対話型講義 ・教科書の問題をペアワークにより解答 ・週末課題として副教材A問題を解答 [目標] ・確認テストで8割以上正解	パフォーマンス課題：1h			リフレクション◎	グループワーク○	30
第1節 点と直線					グループワーク◎	○	発表◎			
第2節 円	数学B	<ul style="list-style-type: none"> ベクトル ベクトルの演算 ベクトルの成分 ベクトルの内積 位置ベクトル ベクトルの図形への応用 図形ベクトルによる表示 	第2回 調査まで	[方法] ・教科書の解説・例題を用いた対話型講義 ・教科書の問題をペアワークにより解答 ・週末課題として副教材A問題を解答 [目標] ・確認テストで8割以上正解	パフォーマンス課題：1h			リフレクション◎	グループワーク○	22
第3節 軌跡と領域					グループワーク◎	◎	発表◎			
第3節 1次不等式										
第1章 平面上のベクトル										
第1節 ベクトルとその演算										
第2節 ベクトルと平面図形										
第2章 空間の		・空間の点	・課題考査	[方法]						

* 学校資料を編集部で改編して作成。教育課程表の全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け」をご覧ください。

て、各活動の目的・形態・内容などを示した「白楊QUESTノート」を作成し、生徒と教師に配布した。「8つの資質・能力は、教科・科目や総合学習、学校行事や生徒会活動、部活動など、すべての教育活動を通じて育むべきものです。どの教育活動においても、その活動は8つの資質・能力のどれを育成することを目的としたものなのかを、生徒や教師が常に意識できるように、冊子を作成しました」(阿部先生)

教師間で情報を共有し、一体感を持って活動を推進

そうして作成した教育課程表や「白楊QUESTノート」に沿った教育活動を、18年度の1年次生で行っていった。その際に重視したのは、一体感を持って活動できるような、教師間で情報を共有することだった。例えば、各教科・科目で取り組ませたパフォーマンス課題については原則公開とし、それらの課題をまとめた資料を全教師に配布して、知見を共有した。数学科では小テストを生徒自身に作成させたり、英語科では生徒が「日本のよいところ」をテー

マに英作文を書き、発表させたりした。そうしたパフォーマンス課題の実施と評価の方法を共有し、学校全体でノウハウを積み上げていった。定期考査の問題も、全校で共有した。同校では、「大学入学共通テスト」に備え、18年度から全年次の全教科・科目の定期考査で、思考力・判断力・表現力を求める問題を必ず10%盛り込むことにした。その問題も資料にして、定期考査後に全教師に配布している。1年次主任の市村清貴先生は、情報やノウハウの共有化についての同校の強みを、次のように語る。

「以前から、本校には公開授業を積極的に行い、互いの授業を見せ合う風土がありました。それが、今回の教育課程表の検討・作成や、それを実践する場面で、大きくプラスに作用しました。新たな取り組みを浸透させる際には、教師間の関係性がいかに構築できているかが大切な条件になると改めて思いました」

目標設定と振り返りの機会を、生徒に要所で提供

8つの資質・能力を確実に生徒に育成するために、生徒自身に目標を



社会で求められる 資質・能力をより意識 して指導するように

佐久間純子先生

今回の取り組みを通じて、私自身が変わったなと感じるのは、「大学や社会がどのような資質・能力を持った人材を求めており、そのような人材を育成するために教師としての自分は何をすべきか」を、以前より強く意識するようになったことです。そのため、生徒への声かけの質やパフォーマンス課題における指導の内容などが変わりました。うれしいのは、グループワークや発表などの活動で、生徒たちが楽しそうに、そして真剣に取り組んでいることです。先日も「白楊 QUEST」でディベートを行った時、普段はおとなしい生徒が積極的に手を挙げ、発言する姿に驚かされました。今後の課題は、そうした活動を通じて、生徒たちが8つの資質・能力をどの程度身につけたかをどう評価するのか、その手法を開発していくことだと考えています。

立てさせ、その目標の到達度を振り返らせる機会を数多く設けている。まず、目標設定については、8つの資質・能力を高めるための学習面と生活面での具体的な目標を2か月おきに生徒に書かせ、各教室に掲示している(図3)。1年次担任の佐久間純子先生は、その意義をこう語る。「常に8つの資質・能力を意識して授業や学校行事などに臨むようにする上で、目標設定と振り返りには有効だと感じています。授業やホームルーム時に、折に触れて生徒に『8つの資質・能力を言ってみよう』と投げかけるようにしています」

また、各教科・科目のパフォーマンス課題で活用できるように、生徒が目標とする資質・能力がどれだけ身についたかを自己評価するシートを作成した。さらに、年度末には、1年間のパフォーマンス課題の取り組みを振り返り、気づいたことや得たことと、それらを今後どう生かしていくかをシートに書かせるとともに、その内容を「マナビジョン」のポートフォリオ(*1)に記録させた。「振り返りでは、『○○がうまくできなかった』といった感想で終わらないよう、『できなかったことができるようになるために、これから何をしていきたいのかを、考えて書こう』と指導しています」(佐久間先生)

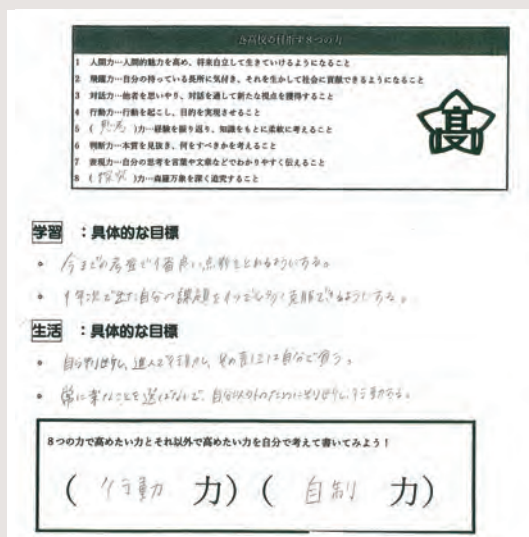
18年度の実践を通じて、教師が実感しているのは、生徒は教師の想像

以上に学習に意欲的なことだ。「総合学習で地域と連携した探究学習を行った際、普段はおとなしくて受け身だと思っていた生徒が、主体的に地域が抱える問題を調べ、その解決案を考え、それを地域の方の前で堂々と発表していました。そういった活動を通じて、自分はどうな資質・能力を身につけたいのかという目標が明確化され、アウトプットの仕方を知っていれば、教師が期待する以上の力を発揮するのだと分か

りました」(阿部先生)

学校教育目標の策定、それに基づいた教育課程表の作成とその実践という一連の取り組みを、同校では17年秋からの1年半の短期間で成し遂げた。高島校長は「走りながら、指導の形をつくってきた」と語る。未知の要素が多い取り組みだからこそ、計画を立てたらまずは実践し、その都度修正を加えながら、徐々に活動の質を高めていくという姿勢を、同校では今後も大切にしていく。

図3 2か月目標(生徒の記入例)



2か月おきに学習面と生活面の目標を立て、それを記したシートを教室に掲示。シートには8つの資質・能力を明記し、学習面・生活面で立てた目標の達成を通して、中でも高めたい資質・能力を2つ、うち1つは8つの資質・能力にはない自分で考えた資質・能力を書かせる。
*学校資料をそのまま掲載。

導かれた道標

カリキュラムは、都度修正しながらその質を高めていくことが、教師全員の確実な実践につながる

*1 進路・進学応援サイト「Benesse マナビジョン」において無料で利用できるeポートフォリオ。

●2年生「物理」の「光の回折と干渉」における全8時間のうちの8時間目。テーマは、ニュートンリング。冒頭で基礎知識を学んだ後、個人・グループで平賀先生の自作プリントの問題に取り組んだ。(P.33に単元の指導計画を掲載)

平賀先生が、本時（ニュートンリング）の概要を前時（くさび形空気層）と比較しながら3分程度で説明。その後生徒は、現象（ニュートンリングで明暗の様子ができる理由）と、数学（ニュートンリングにおける干渉条件の式）の観点から書かれたプリントを読んで本時の基礎事項をおおまかに理解し、疑問点を洗い出した。

モデルによる現象の理解と協働的な学びを通して、物理の本質に迫る

平賀先生のアクティブ・ラーニング

深い理解を促すために物理の本質に迫る授業を追究

定期考査では得点できていても、模擬試験では思うように得点が上げられないといった生徒の指導に悩む教師は少なくない。平賀直志^{ただし}先生が、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業を始めたきっかけもそこにあった。

「初任者の頃は、分かりやすい授業、面白い



兵庫県立星陵高校

平賀直志 ひらが・ただし

教職歴11年。同校に赴任して4年目。理科（物理）担当。同校に赴任後、本格的にアクティブ・ラーニングに着手。現在、探究科学推進部に所属し、新しい探究活動の設計に取り組んでいる。

兵庫県立星陵高校

◎兵庫県立第四神戸中学校として開校。教育目標は「品性と教養・健康有能・自主責任・協力奉仕」。2004年度に生命科学類型を設置。生徒を主役として、教科学習と探究学習の双方の充実を図っている。

◎設立 1941（昭和16）年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2018年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、横浜国立大、大阪大、神戸大、岡山大、大阪府立大、兵庫県立大などに117人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ455人が合格。

◎URL <https://www.hyogo-c.ed.jp/~seiryo-hs/>

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

3～4人のグループとなり、個人で解いた「理解確認問題」の解き方や疑問点を共有。プリントの基礎事項の解説・資料に戻りながら、互いの疑問点を解消し、理解を確認していった。生徒たちの力だけで疑問を解決させようと、平賀先生はほとんど声をかけない。生徒の学びの様子を見取ることに専念し、15分経った頃に解答・解説を配布した。

平賀先生が生徒一人ひとりを指名し、プリントを読んだ時点での疑問点を挙げさせた。「平凸レンズの平面部で反射する光を考慮しなくてよいのですか?」「平凸レンズの真ん中が黒いのはなぜですか?」など、出てきた疑問点について、平賀先生が解説。生徒全員が同じ基礎知識を持つようにした上で、プリントの「理解確認問題」に個々に取り組んだ。

授業をすれば、生徒は知識を習得するものだと思っていました。しかし、模擬試験で問題が解けない生徒を見るうちに、教師が知識を教えるだけの授業では限界があると気づいたのです」

悩んだ末に行きついた結論は、生徒自らが知識を構造化して、学問の本質を理解する必要があるので、そして、集団内（個人間）での成長が個人の成長を促すという発達の順序を踏まえた授業設計を行うことだった。

平賀先生が作成するメイン教材のプリントは、東京大学・市川伸一教授が提唱する「教えて考えさせる授業」の理論（*1）を書籍等から学び、自分なりに整理して、「知っておこう↓確かめよう↓深めよう」の順で構成している。まず、土台となる基礎知識を学んだ上で「理解確認問題」に取り組み、その知識を理解しているかを確認させる。続いて「理解深化問題」で発展的な学びにチャレンジするという流れだ。

また、物理の本質を理解させる手法は、日本体育大学の角屋重樹教授の授業実践研究から学んだ。そのポイントとなるのは、物理現象を解釈するためのモデルを、生徒自身が探究していく学習過程としたことだ。

「自然科学の本質は、自然現象をモデルを通して見ていくことにあります。実験・検証は重要ですが、生徒が問いについて考える中で、自分なりの解釈モデルを探り出し、検証することが大切です。そこで、物理学者が現象を説明する理論モデルを探究するのと同じように、生徒が

主観的・客観的に解釈モデルを考え、本質に迫ることができる授業デザインを心がけています」

また、グループワークは、メンバー全員が学びに参加できるように、3～4人をランダムに組み合わせている。

思考の活性化・深化への配慮

「2つの必要性」で思考の深まりを促す

平賀先生が授業づくりで最も重視しているのは、教材に「2つの必要性」を組み込むことだ。1つめは、「他者」の必要性であり、1人では解決できない問題、あるいは答えが分かっているも誰かに確認したくなるレベルの問いを設定する。2つめは、「概念」の必要性であり、学んだ概念を使うことで疑問が解消できる問いを設定する。学んだ知識を使い、他者と協働したくなる状況をつくることで、自然と学び合いが生まれる授業を目指している。

プリントの問いは、すべて平賀先生の自作。あるいは入試問題を応用した問題になっている。その多くが、物理の本質を理解させるために、現象を生徒自身の解釈モデルを通して見ていく問いとなっていて、時には、教科書レベルを超え、入試では取り扱わないような、さらにハイレベルな問題も取り入れることもあるという。

平賀先生は、本質を理解させることが確かな理解と定着につながると確信している。

*1 「教えて考えさせる授業」の理論については、市川研究室のホームページを参照。http://www.p.u-tokyo.ac.jp/lab/ichikawa/ok-kaisetu.html

再びグループで、「理解深化問題」を中心に取り組んだ。メンバーだけでなく、他グループとも意見交換をしながら、疑問点を解消していった。5分後に平賀先生から解答・解説が配布されたが、大半がグループワークを継続。正解を出すだけでなく、なぜそうなるのかという問題の本質についての意見を出し合うなど、白熱した議論はチャイムが鳴るまで続いた。

自席に戻り、「理解深化問題」に個人で取り組んだ。『「理解確認問題」のグループワークで解答のヒントをもらったと思うので、じっくり考えてください』と平賀先生。個人で考えさせてからグループワークに臨み、多様な考えに触れさせた上で、個人に戻し、深い理解と定着を促すという手順だ。この間、先生は支援を必要としている生徒を個別に指導した。

場づくりへの配慮

グループワークで表出される生徒のつまづきをキャッチ

平賀先生が他者の必要性を重視するのは、個人の成長は、集団内（個人間）での成長が転化することで生まれるという発達論を重視しているためだ。そこで生徒には、1年次から「この授業は、みんなができるようになることを目的にしている。グループで力を合わせて問題を解ければ、1人で取り組んでも解けるようになり、1人で問題に向かうより、はるかに成長できる」と伝え続けている。グループワークを通して生徒自身が成長を実感すると、理解できないことを共有する恥ずかしさが次第に薄れるという。それでも話し合いに参加できず、理解が十分でない生徒には、個別に指導する。

「教師が話すだけの講義型では、授業中に生

成果と課題

探究学習と連携した授業デザインが今後の課題

同校に赴任して4年が経ち、生徒の変化を実感することが増えてきた。赴任当初はグループワークが深まらないこともあったが、今は生徒が学びに浸る時間が増えた。3年次に平賀先生の授業を受け、それまで苦手だった物理が好きになったという生徒もいるという。

「すべての生徒が真剣に問題に取り組み、理解できていく光景を見た時、また頑張ろうという意欲が湧いてきます」

今後の課題は、生徒自身が問いを設定するような探究的な活動を取り入れることだ。「総合的な学習の時間」で行う探究学習や大学との連携などを含めて、新しい授業をデザインしていく考えだ。

「物理学的なものの方・考え方を養うことが物理を学ぶ目的ですから、その方法は王道と言えます。一見遠回りに思えても、本質を理解させることで、おのずと大学入試に対応できる力も身につくと考えています」

単元の最後には、理解の深化を図るとともに、理解度をチェックするため、自分が最も大事だと考える中心概念について、100字程度で説明させる。単元の中で中心となる概念を自分で言語化させることで、概念の構造化を促すのだ。

徒の理解度を見取るのは容易ではありません。生徒に話させると何が分からないのか、どこでつまづいているのかが浮き彫りになるため、グループワークを取り入れてからは個別指導がしやすくなりました」

平賀先生は、生徒の思考や生徒同士の議論を中断させないよう、自分からは極力働きかけない。生徒に口頭で説明する代わりに、グループワークの進捗を見ながら解答・解説のプリントを配布している。

単元の指導計画

【教科・科目】理科・物理 【分野・単元】光の回折と干渉 【テーマ】ニュートンリング 【設定時数】全8時間の中の8時間目

【単元目標】光が強め合う条件を数学的モデルで表現することを通して、光の干渉に関係する知識を構造化し、物理の見方・考え方を養う。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	<p>【ヤングの実験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ヤングの実験による干渉とはどのような現象か ヤングの実験での干渉条件の数学的表現(数学的モデル)の追究 	<ul style="list-style-type: none"> ヤングの実験で光が強め合う現象を理解し、その理解を数学的モデルで表現することを通して、クラス集団の中で光の干渉に関係する知識を構造化する。 他者を信頼・尊重し、自分と異なる他者の考えを基に自分の考えを改良し、常に自己の成長を追究できる。 <p>【知識、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①本単元の全体概要を説明する。 ②既習の水面波での腹線・節線の理解を基に、観察と理論を関連づけながら、ヤングの実験の現象と条件式について説明する。 ③「理解確認問題」に個人とグループで取り組み、ヤングの実験の現象の理解と明線暗線の条件式の理解を確認。 ④教科書レベルを超えた「理解深化問題」に個人とグループで取り組み、ヤングの実験の現象の理解と明線暗線の条件式の理解を深める。 	<p>【主体的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 協働的な学びによって全員が理解を深める努力を惜しまず学び、成長できていることを指摘し、自己の成長への希望を持たせる。 自分の成長に大きく貢献する時間として物理の授業を生かすことを意識させる。 <p>【対話的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 協働的な学びが、人の成長に影響を及ぼす非認知的能力を高めることを意識させる。 自己の成長を飛躍的に促進する場として、特に協働的な学びの時間を生かすことを意識させる。 他者との協働の必要性を感じ、新たな概念理解を他者に伝える必要が生じるような教材とする。 分らないことを安心して交流し、学び合えるよう、個々の成長を尊重し、他者を実感することを通して、互いの存在を認め合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 協働的な学びの場での生徒の学びの姿
2	<p>【ヤングの実験】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科書のレベルを超える本質的な理解を必要とするヤングの実験に関係する課題を協働的な学びの中で解決する 	<ul style="list-style-type: none"> 数学的モデルによるヤングの実験に関する前時までの理解をさらに深め、クラス集団の中で光の干渉に関係する知識を構造化する。 <p>【知識、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①教科書レベルを超えた「理解深化問題」に個人とグループで取り組み、ヤングの実験の現象の理解と明線暗線の条件式の理解を深める。 ②生徒の学びの様子から理解が不十分である部分を見取り、その部分に焦点を絞って、考える視点を与えたり解答について全体で説明をしたりする。 		
7	<p>【くさび形空気層】</p> <ul style="list-style-type: none"> くさび形空気層による干渉とはどのような現象か くさび形空気層での干渉条件の数学的表現(数学的モデル)の追究 	<ul style="list-style-type: none"> くさび形空気層で光が強め合う現象を理解し、その理解を数学的モデルで表現することを通して、クラス集団の中で光の干渉に関係する知識を構造化する。 <p>【知識、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①くさび形空気層の現象を観察した後、その現象と干渉条件について説明したプリントを基に基礎知識を学ばせる。 ②理解が不十分だった部分を生徒に挙げさせ、それに対して説明する。 ③「理解確認問題」に個人とグループで取り組み、くさび形空気層の干渉現象の理解と明暗の条件式の理解を確認。 ④教科書レベルを超えた「理解深化問題」に個人とグループで取り組み、くさび形空気層による現象の理解と明暗の条件式の理解を深める。 	<p>【深い学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 単元で重要となる中心概念を意識させ、物理に関する知識の構造化を促進する。 新たに習得する概念の必要性を感じる文脈を含む問題を提示する。 研究者の縮図的活動に近づくよう、光の干渉現象を一般化して説明できる数学的モデルの探究を授業の中心に据え、個と集団で学びが住還するよう、教材と場をデザインする。 理解の基となる基礎事項の説明や図表などをプリントに過不足なく簡潔に示し、生徒個人や生徒同士の発言や思考が授業プリントの記述や図表を基にしてつながるよう、教材と場をデザインする。 グループワークで、自然と生徒の発言や思考がつながるよう教材をデザインする。 単元で新たに学ぶ概念の形式を初めに与え、生活経験を含んだ問題を提示して、科学的概念から生活的概念に向けて、そして生活的概念から科学的概念に向けて思考できるように、教材と場をデザインする。 <p>※1～7時間目も「教師の配慮」は同様。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 協働的な学びの場での生徒の学びの姿
8	<p>【ニュートンリング】</p> <ul style="list-style-type: none"> ニュートンリングによる干渉とはどのような現象か ニュートンリングでの干渉条件の数学的表現(数学的モデル)の追究 	<ul style="list-style-type: none"> ニュートンリングで光が強め合う現象を理解し、その理解を数学的モデルで表現することを通して、クラス集団の中で光の干渉に関係する知識を構造化する。 <p>【知識、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①ニュートンリングの現象を観察した後、その現象と干渉条件について説明したプリントを基に基礎知識を学ばせる。 ②理解が不十分だった部分を生徒に挙げさせ、それに対して説明する。 ③「理解確認問題」に個人とグループで取り組み、ニュートンリングの干渉現象の理解と明暗の条件式の理解を確認。 ④教科書レベルを超えた「理解深化問題」に個人とグループで取り組み、ニュートンリングの現象の理解と明暗の条件式の理解を深める。 ⑤「薄膜」「くさび型空気層」「ニュートンリング」に共通する中心概念を自由に記述する週末課題を提示(リフレクション)。 		<ul style="list-style-type: none"> 協働的な学びの場での生徒の学びの姿 週末課題の記述内容

*平賀先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全8時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(<https://berd.benesse.jp>)からダウンロードできます。「HOME」→教育情報→高校向け」をご覧ください。

生徒の声



山崎和真さん

平賀先生の授業は、

物理現象の本質を理解できることが最大の魅力です。公式を導く際には、なぜその公式が必要なのかまで説明してくれますし、プリントの問題も本質的な理解を促す問いばかりです。解答の途中で「こういうことだったのか」と理解できたり、1人では解けそうでも解けない、周りと相談したくなる問いがあったりと、難易度が絶妙に調整されているのを感じます。

グループワークでは教えることの方が多くですが、自分が考えつかなかったアイデアをもらう時もあり、みんなで理解を深めていることを実感します。難易度の高い問題で正解を導き出した時は、「解けた」という以上に、「理解できた」という喜びや達成感でいっぱいになります。

南野琉里紗さん 1年次に平賀先生の「物理基礎」の授業で物理の面白さを知り、2年次で「物理」を選択しました。授業では、物理の本質的な理解を重視し、必要最低限の公式だけが示されるのですが、かえって応用力が身につきます。また、先生自作のプリントは難易度の高い問題ばかりが出されていますが、グループのメンバーの解き方とそう解いた理由を聞いていくうちに、1つの問いにも様々なアプローチがあることを実感します。応用力が身につくとともに、多様な解き方を見つけれられるのも、グループワークのよいところだと思います。

解答後、先生からその日の問いが大学入試の過去問題であることを知らされる時は、そんなレベルまで自分は理解できているんだとうれしくなり、次の学習に向かう意欲が湧きます。

●1年生の「古文」、『枕草子』の全8時間のうちの7時間目。「雪のいと高う降りたるを(第二百八十段)」が題材で、それまでに学んだ敬語の知識を手がかりに、登場人物の人間関係や当時の人々のもののものの情趣について考えた。(P.37に単元の指導計画を掲載)

峯先生の担当する『国語』では、文法事項などを整理するプリントが課題として1日1枚与えられ、生徒は自宅で行い、授業の冒頭10分間は、生徒が教師役になってプリントの答え合わせや解説を行う。この日のプリントの内容は漢文の書き下し文と現代語訳。生徒によるミニ授業が終わると、峯先生による授業が始まった。

熟考と対話の中で
生徒に気づきを委ねながら、
ものの見方や感じ方を深める

峯先生のアクティブ・ラーニング

「何を考えるのか」「何を使うのか」
学びの起点を生徒に委ねる

峯先生が自身の授業において重視しているのが、主体的な学習の実現だ。本時の授業プリントには、素材文である『枕草子』第二百八十段とともに「傍線部はどういうことを言っているのか」といった問いが書かれていたが、肝心の傍線部がどこか素材文には示されていない



長崎県立佐世保西高校

峯 悦子 みね・えつこ

教職歴15年。同校に赴任して2年目。国語科担当。自身の高校時代の経験を土台にして、初任時より生徒の対話を重視した授業を展開。現在、研修部に所属し、地域課題について考える探究学習の設計と推進に取り組む。

長崎県立佐世保西高校

◎校訓は「自主自律」「積極敢為」「親和協調」。単位制による多様な選択科目と習熟度別授業で生徒の進路実現を支援する。より高いレベルの授業を希望する生徒のために、1年次より「ウィングクラス」を編成。ハンドボール部、ソフトボール部などの部活動も盛んである。

◎設立 1964(昭和39)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約240人

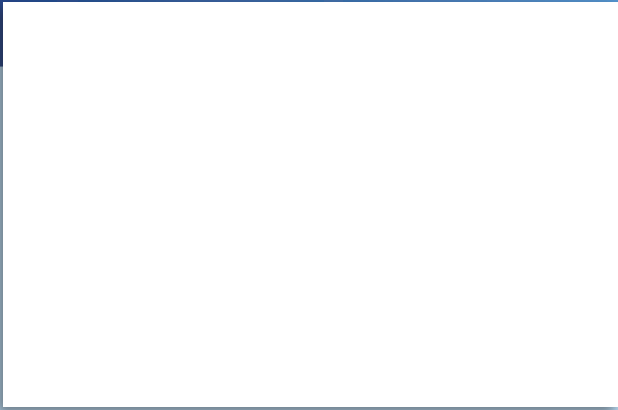
◎2018年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、京都大、岡山大、広島大、九州大、長崎大などに109人が合格。私立大は、東海大、関西大、近畿大、西南学院大などに延べ215人が合格。

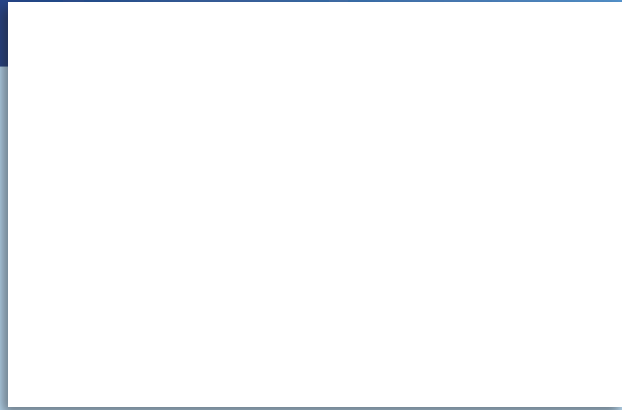
◎URL

<http://www.news.ed.jp/sasebonishi-h/>

*プロフィールは2019年3月時点のものです。



4人グループで意見交換。熟考の時間の途中、峯先生から「分からない人は教科書や電子辞書、文法書を参考にして」と声がかかっていたため、出てきた生徒の意見やその根拠は多様だった。約8分経過したところで生徒は席を移動し、新たなグループで話し合いを続けた。別のグループの意見に生徒たちから「そうなの?」「すごい!」と声が上がっていた。



「雪のいと高う降りたるを」を読み、内容上の核となる箇所を探させ、その結果について隣同士で意見交換をさせた。内容を大まかに捉えた段階で、授業の目標などが書かれたプリントを使って、授業前の段階での理解を自己評価させた。それから峯先生が素材文の核となる箇所を明らかにし、そこでどうということが述べられているかを約10分間個人で考えさせた。

た。平安時代の文学を読み解く際のカギとして、本単元でこれまで学んできた「ものの情趣」を念頭に、「素材文で問いにすべき箇所はどこか」から生徒自身に考えさせるわけだ。

「文章の核となるところを考えさせることは、自分で課題を設定することと同義であり、主体的な学習の出発点です。主体的に課題を設定する力は、社会で求められる資質・能力ですから、授業でも大切にしています」

本時の素材文で傍線部となるべき箇所、つまり「ものの情趣」への理解が問われる一文は、「この宮の人にはさべきなめり」だ。峯先生は生徒に個人、ペアでそれがどこかを考えさせてから答えを明らかにし、さらにそこでどういうことが述べられているかを個人で読み解かせる。峯先生は「分からない人は、文法書、辞書などを参考にしてもよいですよ」と声をかけているが、何を参考にするかを生徒に選択させるのも峯先生が普段から心がけていることだ。

「最初から私が『教科書の35ページを見て』などと示すと、生徒はそこにヒントがあるという前提で見るとしよう。しかし、ヒントの隠し場所から自分で探せば、『あつ、これも!』といった気づきの感動を得られますし、『本当にこれかな?』とさらに考え続けることになります」

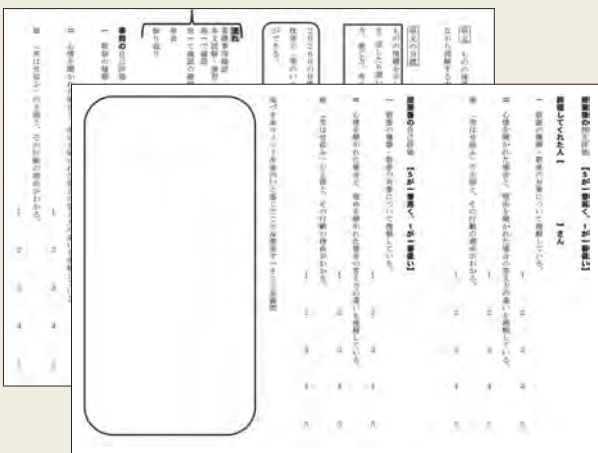
個人の熟考の時間、峯先生は机間巡視で理解があいまいな生徒に、「さべきなめり」の「な」が「なるめり」であることなど、文法上のポイントを伝えた。そうして、傍線部を自分なりに

解釈させてからグループワークに移った。

峯先生は、傍線部の直訳にたどり着いたグループに対して、「『さべき』ふさわしい」と考えたのはだれ?」「どのような行動に対して?」「中宮様が笑ったのはなぜ?」と聞く。生徒の1人が気づきを得た表情が見えたら、峯先生は次のグループへと移動し、全体の読解を深めた。

授業では、生徒は素材文を一読する冒頭の段階と授業の最後の段階とで自己評価を行う。授業の最後の段階では、自己評価に加えて、グループの仲間からも評価をもらった上で、授業の感想や復習すべきことまでを書かせている。

「授業後のみ自己評価を行っていた時は、『難しかった』『家で読み直す』といった浅い内容の感想が多かったのですが、事前評価と他者評価



本時の授業の目標が書かれたプリントで、授業前の自己評価、さらに授業後の自己評価と他者評価が行われる（実物は表裏1枚で印刷）。
*学校資料をそのまま掲載。

授業冒頭に自己評価を行ったプリントの裏面で、本時の目標が達成できたかどうかを授業前と同じ指標で自己評価することに加えて、グループのメンバーからの評価ももらい、「家で学習すべきこと」を書いて授業は終了した。授業で取り組んだプリント類は、成績評価の対象となる。プリントはいったん回収して峯先生がチェックし、SHRの時に返却される。

元のグループに戻り、聞いてきたことを共有しながら、グループとして答えをまとめた。峯先生が「前に出て発表したい人は？」と聞くと、1人の生徒が手を挙げて発表。その後、同じグループの生徒が「補足があります」と発言し、さらに説明を続けた。その後、峯先生が「なぜ、そう言えるの？」と全員に問いかけ、生徒との対話の中で読み解きが進んだ。

思考の活性化・深化への配慮

を加えてからは、『主語がつかめなかったので、接続助詞に気をつけながらも一度読んでみる』などと、具体的な行動計画を書ける生徒が増えました。授業の前後で自分の理解がどう深まったか、グループの仲間と比べて何が不足しているかを丁寧に振り返るようになったからでしょう」

個人の熟考を保障し、多様な視点からの再考を促す

深まりのあるグループワークを実現するために峯先生が大切にしているのが、授業中、1人で熟考する時間を確保することだ。また、グループワーク時の机間巡視においては、意見が収束しそうなグループを見つけては、「なぜ、そう思ったの？」などと問いかけ、根拠を深掘りさせる。また、この日の授業では、グループでの話し合いの途中で席替えをして、ほかのグループの話し合いを聞く場面があった。

「根拠があまりないグループがいくつかあったので、ほかのグループの考えとその根拠を聞くことで、多様な視点から考えを深めさせました」

場づくりへの配慮

発言する機会と

聞く機会の両方を確保する

年度当初など、グループワークがあまり活発

に進まない段階では、生徒にマーカーを持たせて「今日は黄色のマーカーを持っている人が仕切り役になって！」と指名し、「話し合いを仕切る生徒」を決めることもある。そうすることで、グループワークでの最初のひと言が出やすくなる。また、グループ内で国語が得意な生徒が一方的に話すことがないように、「自信のない人から話して」と促すこともある。それは、発言する機会と聞く機会をバランスよくすべての生徒に与えるための配慮だ。

成果と課題

生徒の意見を丁寧に評価して安心して自己表出できる場をつくる

「感性が乏しい」などと言われることもある現代の生徒だが、高校生に語らせる時間を多く取る中で、むしろ発想は豊かで、視点もユニークだと峯先生は気づいたという。しかし、1年間かけて育てた生徒も、2年次以降、人前で間違えたくないという気持ちが強くなり、生徒はあまり話さなくなる傾向があると峯先生は言う。

「授業中に主体性は高まって、やはり生徒には正解を教えてもらいたいという気持ちがあります。だからこそ、答えが1つではないテーマで話し合い、そこで出てきた意見を教師が皆の前で丁寧に評価してあげて、間違ったり人と違ったりすることを恐れずに思ったことを言える雰囲気を作りたいです」

単元の指導計画

【教科・科目】国語・国語総合 【分野・単元】古文 【テーマ・作品】『枕草子』 【設定時数】全8時間の中の7時間目

【単元目標】ものの情趣を示したり、敬語が用いられたりした伝統的な文学作品を、人物関係を捉えながら読解でき、話したり、聞いたり、話し合ったりしたことの内容について自己評価や相互評価を行って、ものの見方、感じ方、考え方を広げることができるようになる。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	『枕草子』「春はあけぼの」の古語「をかし」「あはれなり」等を用いて四季を表現する。	<ul style="list-style-type: none"> 清少納言の言う、四季のよさを読み味わうとともに、「をかし」「あはれなり」の意味の違いを理解した上で、自身の感じる四季の豊かさを古語で表現できる。 【知識、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】	①基礎事項プリントの生徒解説。②「春はあけぼの」を個人で読解。③「をかし」と「あはれなり」の違いを各自で考える。④「をかし」「あはれなり」の違いを踏まえた上で、自分自身が思う四季のよさを表現。⑤班で共有し、班の中で一番よい作品を選出。	【主体的な学び】 想像を働かせて、自分なりにできるだけ古語で表現するように促す。帰宅後、絵を描いたり、インターネット等で調べたりして自分の表現を高める工夫をするよう促す。 【対話的な学び】 その場の取りまとめ役をマーカーを使って決める。班で協力できているかを確認する。 【深い学び】 「をかし」を使うか、「あはれなり」を使うか考える際に、理由や例を挙げて考えるよう指示する。班の話し合いにおいても「なぜ」を使って質問するよう促す。	<ul style="list-style-type: none"> 行動観察 自己評価シート、ワークシートの点検
2	古語「をかし」「あはれなり」等を用いて四季を表現したものの内発表と全体発表。	<ul style="list-style-type: none"> 自分が書いた古文と班員の書いた古文を読み比べることを通して、表現を吟味できる。 「をかし」と「あはれなり」の違いを例を挙げて説明できる。 【知識、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】	①基礎事項プリントの生徒解説。②前時の続きとして、班で自分の書いた作品を読み合う。③班を変えて、別の班で発表を行う。④元の班に戻り、違う班で聞いてきた表現としてよかった点を発表し合う。⑤それを基にして、表現の推敲を行い、よりよい作品へと変える。⑥班で1つずつ全体に発表する。「をかし」「あはれなり」の説明も加える。⑦10班分の発表を聞いた上で最も優れていた班を投票により決定する。⑧教師が文法的な間違い等を最小限に指摘しつつ、感想を述べる。⑨振り返りを行う(ワークシート)。	【主体的な学び】 よりよい表現となるよう、自分で表現を再度工夫するように促す。「をかし」「あはれなり」の意味の違いを、感覚ではなく言葉で表現できるようになることが、本当に理解できたことにつながると理解させる。 【対話的な学び】 班での話し合いを設定。その場の取りまとめ役をマーカーを使って決める。班で協力できているかを確認する。個人で思考する時間を一定時間与えることで、自分の考えを持った上で話せるようにする。 【深い学び】 班を1回変える。元の班に戻り、表現を練り直させる。全体に発表をさせる。	<ul style="list-style-type: none"> 行動観察 自己評価シート、ワークシートの点検
7	『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」の読解I	<ul style="list-style-type: none"> 敬語を手がかりに、本文の作者と定子のやり取りを理解できる。 中宮に仕える女房に求められるものについて理解し、記述で表現できる。 自分の考えを根拠を持って説明することができる。 【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】	①基礎事項プリントの生徒解説。②個人で初読の文章を何も見ずに読解。③設問に個人で取り組む。④班で話し合う。⑤全体で共有。⑥振り返り。	【主体的な学び】 授業前自己評価、授業後評価による見通しと、家に帰ってからの振り返り内容の確認。問題演習を通した個人読解。班のメンバーに説明させる。 【対話的な学び】 班での話し合いを設定。その場の取りまとめ役をマーカーを使って決める。班で協力できているかを確認する。個人で思考する時間を一定時間与えることで、自分の考えを持った上で話せるようにする。 【深い学び】 初読の文章を自力で読解させる。発問のレベルを高く設定する。班で共有する。	<ul style="list-style-type: none"> 行動観察 ワークシートの点検(記述内容) 相互評価、授業前評価→授業後評価の変化
8	『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」の読解II・まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 本文を敬語を手がかりにして読解することができる。 清少納言が取った行動の意味を理解できる。 ほかの女房たちが言った言葉の意味を理解できる。 重要単語が習得できている。 【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】	①基礎事項プリントの生徒解説。②班で前時の復習。③文法事項を押さえながら本文読解。④まとめ。	【主体的な学び】 授業前自己評価、授業後評価による見通しと、家に帰ってからの振り返り内容の確認。 【対話的な学び】 ペアで話す時間の設定。話すための個人思考の時間の設定。 【深い学び】 まとめ用記述問題。	<ul style="list-style-type: none"> 行動観察 ワークシートの点検(記述内容) 相互評価、授業前評価→授業後評価の変化

*峯先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全8時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

生徒の声



山口京子さん 峯先生の授業は、

1人で考える時間があつた上でみんなでお話合つたので、自分でもじっくり考えられ、さらに人と話すことで理解が深まったり、ひらめいたりする感覚があつて、とても楽しいです。私は、中学校の時はペアで話すようにと言われても、話す内容がうまく整理できず、黙ってしまつてしまつてしまつた。でも今は、自分の意見も言えるし、人の意見と照らし合わせながら、より深い意見を言えるようになってきている気がします。古典の文章を読むと、現代の私たちが考えられないようなことを思いついたり、感じたりしていたことに驚きます。そして、私もそんなふうな目の前のものを感じることができるようになつた。自分自身に対する見方が豊かになりました。苦手だった国語が、1年間で得意教科になりました。

田島萌絵さん 今日は、最初のグループでの話し合いで自分なりに答えが出せていたつもりでした。

でも、ほかのグループの話聞いた後、自分からの部分の理解があいまいだったのがよく分かりました。私は、中学校の頃から古典も現代文も苦手で、自宅では教科書の文章やプリントの内容をそのままノートに書き写すような勉強しかしていませんでした。でも、峯先生の授業で、評論の内容を図や短い文章でまとめ直したり、気になることをインターネットなどで調べて、ノートに書きためたりすることを始めてから、自分で考える習慣が身につけてきた気がします。授業でも、グループワークなどで周りの人と話す機会があるので、いろいろな観点で考えられる力があつたように思います。

生徒の進路意識と思考力・表現力を高めるべく、全校体制でキャリア教育を推進

変革のステップ

背景と課題

- 体系的な進路指導が不十分であり、生徒に進路意識を醸成することが思うようにできていなかった

実践内容

- 「総合的な学習の時間」の改革 2018年度の1学年から、「総合的な学習の時間」を中心とした「キャリア教育のスタンダード」の構築を推進。活用する教材を統一し、生徒に定期的に振り返りをさせて、その内容を蓄積することに
- カリキュラム・マネジメントの推進 19年度に始める探究学習に向け、全校体制で学校グランドデザインを策定。育成を目指す資質・能力を明確にし、その定着度合いを測るためのルーブリックを作成するとともに、カリキュラム・マネジメントを推進する体制も整えた
- 教科指導の改善 アクティブ・ラーニングの視点による指導改善を推進。公開授業などを通じて、生き生きと学ぶ生徒の姿を全教師に示し、意識改革を行った

成果と展望

- 目的意識を持って学ぶ生徒が増え、基礎学力が向上
- 教師間で共通認識が図られ、連携が強化された

PROFILE



旧制・大沼実業補習学校として開校。校訓に「誠実・明朗・健康」を掲げる。コミュニケーション能力の育成を土台に、健全な精神の育成、学力向上と進路実現を目指している。2022年度に同県立坂下高校と統合予定。

設立	1921(大正10)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約100人

2018年度進路実績(現役のみ) 私立大は、仙台大、東北福祉大、東北公益文科大、いわき明星大、城西国際大、大東文化大、日本大などに16人が合格。短大、専門学校進学59人。就職38人。

住所 〒969-6262
福島県大沼郡会津美里町字法幢寺北甲3473

電話 0242-54-2151

Web site <https://ohnuma-h.fcs.ed.jp/>

生徒に大きな可能性を感じ、中堅教師を中心に学校改革に着手

福島県立大沼高校は、4年制大学から専門学校、就職まで、幅広い希望進路を抱く生徒が集まる学校だ。2017年度に赴任した小松山淳先生は、近年は国公立大学への合格者が出ていない状況に課題を感じていたと話す。

「本校は伝統的に学年団主導で進路指導を行ってきたこともあり、学年によって進路指導にばらつきがありました。また、生徒は素直で優しい反面、自信のなさからか、主体性に課題が見られます。しかし、生徒が書いた文章を読んだり、話をしたりする中で、キラリと光るものを感じることが何度もありまし

*1 ベネッセの教材の1つで、生徒一人ひとりの視野を広げ、将来の進路について考えるきっかけを与える教材。

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

た。体系的な指導をすることで、進路意識が向上すれば、生徒は自己実現に意欲的になれるはず。そうならば、国公立大学に挑戦する生徒も増えていくと考えました」

そうした考えと熱意が評価され、18年度、小松山先生は1学年主任となった。渡部孝男教頭は、学校改革への思いをこう語る。

「本校には、目的が不明確なまま入学してくる生徒も少なくありません。その原因の1つは、『学校の色』がないことだと考え、意欲の高い中堅の先生方に改革の先頭に立つてもらい、進路指導を学年団が主導するスタイルから脱却することで、本校の新たな魅力が



教頭
渡部孝男 わたなべ・たかお

教職歴24年。同校に赴任して1年目。「生徒が『成長できた』、中学校の先生方が『送り出してよかった』と感じられる学校にしたい」

教務主任

本田一弘 ほんだ・かずひろ

教職歴25年。同校に赴任して6年目。「生徒のよりよい生き方や人間的な成長を支えられる教師でありたい」

1学年主任

小松山淳 こびやま・あつし

教職歴13年。同校に赴任して2年目。「生徒の未来を大きく変えられるところに教職の醍醐味を感じる」

1学年担任

長谷川美穂 はせがわ・みほ

教職歴13年。同校に赴任して2年目。「多くの経験や人とのかわりを通して、生徒たちが成長できるよう支援したい」

生まれると期待しました」

キャリア教育の指導を体系化し、体験的な学びの場を充実させる

18年度の1学年団では、どんな教師が担当しても、一定の質の取り組みとなることを目指した「キャリア教育のスタンダード」の構築を最重要課題として位置づけた。同校では、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)を生徒のキャリア形成の場として活用してきたが、取り組みの内容は学年ごとに異なり、生徒の進路意識の醸成に課題がある学年が少なくなかった。そこで、まずは総合学習の改革に着手した。

「生徒には、高い目標を設定し、その達成を図ってほしいと思っています。そのためには、自分は社会で何をしたいのかを考えさせ、将来への展望を抱かせることが必要です。また、大学入試で多面的・総合的な評価がより重視される中、進路学習や探究学習などの体験的な学びを充実させていけば、生徒の志望理由書やポートフォリオの内容を豊かにできるのではないかと考えました」(小松山先生)

教材は、「進路サポート」(*1)と「表現サポート」(*2)を使用。同教材であれば、生徒に将来像を描かせたり、探究学習や推薦・AO入試に必要な表現力を高めたりすることができるのではないかと考えた。進路サポート付属の「進路探究ワーク」については、文理選択のワークを割愛するなど、生徒のレベルや必要性に合わ

せて課題を精選して取り組ませた。

「指導力の高い教師でなければ活用できない教材では、スタンダードとして定着しません。進路サポートや表現サポートに統一すれば、指導の質を担保することができると考えました。実際、学年団で最小限の打ち合わせを行うだけで取り組ませることができ、指導面で負担を感じることもありませんでした。また、社会への視野が広がれば、生徒は様々なことに挑戦したくなるでしょう。そうした意欲を行動に移していく中では、初対面の人やよく知らない人に対しても、自分のやりたいことを的確に伝える必要が生じます。そこで、進路サポートと表現サポートを併用し、社会への関心と表現力の両方を高めようと考えました」(小松山先生)

生徒に学びを深めさせるため、定期的な振り返りを徹底

総合学習では、ポートフォリオの構築にも力を入れている。具体的には、「Class」(*3)のアンケート機能を活用し、学校行事や進路講演会、学期末の振り返りを行わせることにした。振り返りの内容が単なる事実の羅列にならないよう、アンケート項目を作る際は、「その行事でどういう役割を担ったのか」「どのように成長したのか」など、自己の成長・変容のメタ認知につながるものになるよう工夫した。アンケート機能を使えば学年を超えてフォーマット

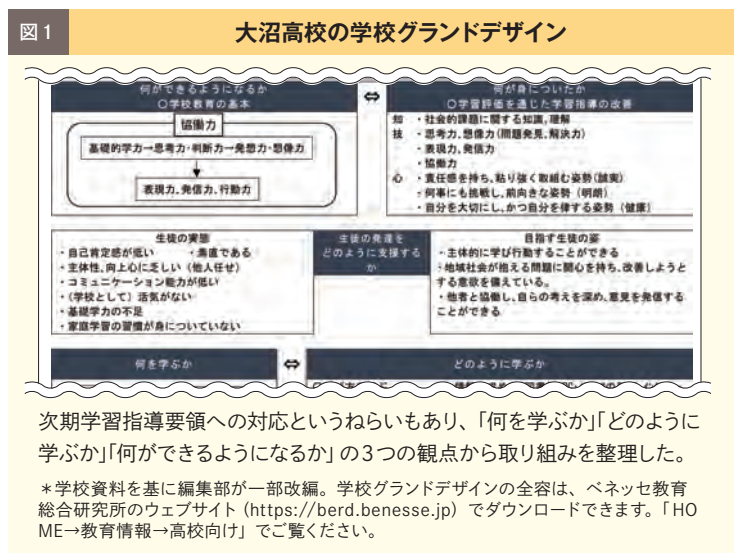
*2 ベネッセの教材の1つ。低学年からの体系的なカリキュラムに沿って、生徒同士の対話的な学びを通して思考力・判断力・表現力を身につけていく教材。
*3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

が共有できるため、次の学年団の負担軽減につながるというメリットもある。ポートフォリオの構築は、3年次の志望理由書や自己PR書の作成で必ず生かされると、18年度1学年担任の長谷川美穂先生は話す。

「推薦入試や就職活動に向けた指導で、3年次に3年間を振り返らせても、生徒の多くは『よかった』『大変だった』といった漠然とした言葉でしか語れません。記憶が鮮明なうちにポートフォリオに記入し、自分がその活動でどのようなことを感じ、考え、どんな成長をしたのかを掘り下げておけば、志望理由や自分像が具体的にになり、進路意識も高まると期待しています」

学校グランドデザインを策定し、カリキュラム・マネジメントを推進

19年度には、総合学習での探究学習をさらに充実させることを目指す。その準備として、18年度の後半からは、全校を挙げた2つの取り組みを行った。1つめは、学校グランドデザインの策定だ。渡部教頭と各学年の教師数人から成るワーキンググループを設置し、学校教育目標である「個々の生き抜く力を育み、地域社会を支える人材を育てる学校」を実現するために何をすべきかを議論。次期学習指導要領も踏まえながら、「社会的課題に関する知識・理解」などの7つを生徒への育成を目指す資質・能力として明示し、その達成に必要な取り組みを体系



化した(図1)。ワーキンググループのメンバーである教務主任の本田一弘先生は、こう述べる。「本校では、少子化の影響によるクラス減が続いており、22年度には近隣校との統合を予定しています。そうした中、目指す生徒像にうたわれた『地域社会を支える人材』の育成を切実な課題として捉える先生方が増えていきました。学校が一丸となるためにはグランドデザインが必要だという認識も、多くの先生が持っていたと思います」

2つめは、学校グランドデザインに基づくルーブリックの作成だ。渡部教頭が委員長を務

め、小松山先生や長谷川先生、本田先生、進路指導部長、各教科団の代表者らが所属する新たな分掌「カリキュラム・マネジメント委員会」を設置し、全校で取り組む体制を整えた。

19年1月の職員会議では、同委員会の提案により、ルーブリックの素案を議論した。教師が7つのグループに分かれ、学校グランドデザインに示された7つの資質・能力を1つずつ担当。各資質・能力について5段階の評価規準案を作成した。会議後、同委員会がその案を修正し、ルーブリックを完成させた(図2)。19年度から、主に探究学習において活用していく予定だ。

「ルーブリックの作成にすべての教師がかかることにより、探究学習の実行段階で自信を持ってルーブリックを活用できると考えました。実際、素案作成のプロセスを通して、本校の生徒のあるべき姿を深く考えるようになったという先生もいました」(渡部教頭)

探究学習の内容と流れも固まりつつある。具体的には、まず1年次に、課題設定や調査・分析の方法などの探究スキルの基礎を習得させる。そして、2年次からは、地元の会津美里町役場を始めとした公共団体の協力を得て、地域の課題を学び、具体的な方策を探究する「美里学」(仮称)を展開することを計画している。

国語科を起点として、生徒の考えを深めさせる授業を目指す

アクティブ・ラーニング(以下、AL)の視

図2

大沼高校のルーブリック

目指す姿		レベル1	レベル2
	目的とする過程	集団の一員としての役割を持つ	社会の中で責任を自ら果たす
	知	1,2年のうちに身につけておきたいレベル	基礎
1	社会的課題に関する知識、理解	地域や社会の成り立ちについての基礎的な知識を得る。	家庭やクラス内などの目的地域社会が抱える課題についての知識を得る。
2	思考力、想像力(問題発見、解決力)	与えられた問題を解決しようとする事ができる。	与えられた問題を分析する。
3	表現力、発信力	自分の気持ちや意見を他者に伝えようとする事ができる。	クラスなどの集団の中で目まとも、意見を述べることが

学校として育成を目指す7つの資質・能力のそれぞれについて、段階的に「目指す姿」を示している。

*学校資料を基に編集部が一部改編。ルーブリックの全容は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) でダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

点を重視した指導改善も、キャリア教育と並行して進めてきた。同県の公立高校では、教師の1人をA.L推進委員としている。18年度の同校では、前任校でもA.Lを実践してきた国語科の長谷川先生が委員を務めた。

「生徒の中には、授業にしっかりと臨めている状態とは、教師の話聞き、ノートを取ることだけだと思っている者もいます。そうした生徒の多くは、深く理解せず、暗記に頼った学習をしているためか、定期考査では高得点でも、模擬試験では思うような得点ができないことも少なくありません。生徒がより主体的に学習する授業を行う必要があると考えました。また、推薦・AO入試に必要な表現力や他者と協働できる力を育成したいという

思いもありました」(長谷川先生)

長谷川先生は、生徒の思考を深めたり、協働を促したりできるよう授業を工夫した。例えば、本文の読解を行う際には、文章中における着目すべきポイントを示した上で、生徒同士が話し合う場を設定。そして、生徒一人ひとりに考えを発表させながら、授業を展開した。そうした中で、生徒同士の学び合いが活発に行われるようになった。すると、文章中から根拠にあたる部分を見つけ、それに基づいて論理的に考えをまとめたり、説得力のある発表をしたりするクラスメートに刺激を受け、自分でもそうした読解・発表ができるよう頑張る生徒が目立つようになったという。

長谷川先生は、A.L推進委員として、教師のA.Lへの関心や理解を深めることにも力を入れた。例えば、自分の授業を公開するとともに、他教科の教師に国語の授業で行うディベートの審査員を依頼したり、インタビュー活動の聞き手役になってもらったりした。そうした中で、講義型の授業とは異なる生徒の生き生きとした姿を目のあたりにしたことにより、生徒の主体性や協働性を重視した授業に力を入れる教師が増えていった。本田先生も、自分の担当する国語の授業を変えた1人だ。

「私は講義型の授業が中心でしたが、正しい読解の仕方を教えるだけの指導に疑問を感じていました。長谷川先生の授業を見て、自分でも文学作品の解釈を生徒に行わせ、出て

きた疑問を発展させるような授業を目指しました。すると、生徒はクラスメートの様々な考えに触れ、思考を深めるようです。論理的に読解できるようになったと感じています」

目的意識を持ち、基礎学力を身につけていく生徒たち

一連の改革の成果は、早くも実を結んでいる。その1つが、基礎学力の向上だ。「基礎力診断テスト」(*4)の結果では、GTZ(*5)の伸び率が50%を超え、Dゾーンの生徒が大幅に減った。

「総合学習で目的意識が醸成されたことにより、学習意欲が芽生えたことが要因の1つだと思えます。課題の提出率も上がっており、日々の生活をきちんとしてようとする意識が、どの生徒にも感じられるようになりました」(長谷川先生)

1学年の取り組みから学校全体の改革へ道筋をつけたことも、大きな成果だ。

「本校では、学校改革に対して多くの先生方の理解と協力が得られました。そうした雰囲気が生まれた背景としては、『このままではいけない』『魅力的な学校にしたい』という思いが多くの教師に共通していたからでしょう。今後は、探究学習を軸に据え、生徒はもちろん、教師自身もワクワクするような取り組みを推進していきたいと考えています」(小松山先生)

*4 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。

*5 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。

SGHを軸にした学校改革

全校体制による課題研究で、
生徒の学びを深めさせ、
社会への広い視野を育む

変革のステップ

背景と課題

- 学力向上を実現したため、次なる目標として「グローバル人材の育成」を目指した

実践内容

- **課題研究を推進する体制の整備** 2014年度、SGH(*1)の指定校となり、1年次の学校設定科目「Local Water Issues (LWI)」、2年次の学校設定科目「Global Water Issues (GWI)」で課題研究を推進。チーム・ティーチングにより、全教科の教師が課題研究にかかわる体制を構築している
- **「論理的思考力テスト」の開発** 課題研究の成果を客観的に把握するため、教育学研究者の助言を得ながら、論理的思考力のアセスメントを独自に開発
- **英語の指導改善を推進** 2018年度、静岡県教育委員会の「英語教育コアスクール」の指定を受け、「英語でやり取りする力」を培うために指導改善を進める

成果と展望

- 様々な教科の知識を融合して考えられる生徒が増加
- 生徒の視野が広がり、進学実績がさらに向上

PROFILE



旧制・静岡県立三島^{たが}高等女学校として開校。校訓に「自律」を掲げる。2004年度、共学校となったのを機に学校改革に着手。14～18年度には、同県内で唯一のSGH指定校となり、全校を挙げて課題研究を推進している。

設立	1901(明治34)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約280人

2018年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、筑波大、お茶の水女子大、東京外国語大、横浜国立大などに112人が合格。私立大は、上智大、東京理科大、立教大、早稲田大などに延べ682人が合格。

住所	〒411-0033 静岡県三島市文教町1-3-18
電話	055-986-0107
Web site	http://www.edu.pref.shizuoka.jp/mishimakita-h/home.nsf/IndexFormView?OpenView

「学力向上を実現し、新たな目標
「グローバル人材の育成」を設定

静岡県立三島北高校は、2004年度、女子校から共学となったのをきっかけに、学校を挙げた指導改善に着手した。まず、3年間を通して土曜講習や週末課題を継続するなど、学力向上対策を推進する体制を整えた。次に、特進クラスを設置し、学習指導・進路指導を強化。すると、同クラスの生徒の頑張りや他クラスの生徒を刺激し、高みを目指そうとする意識が学校全体に浸透していった。そうした段階的な改革によって進学実績は向上し、国公立大学への合格者数は、女子校だった頃から倍増した。

14年度には、次なる目標として「グローバル

*1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

人材の育成」を掲げ、SGHの指定校となった。SGH推進室長である英語科の稲葉亜矢子先生は、次のように語る。

「本校では、生徒の教科学力が向上する中、国際社会に貢献できる『グローバル人材の育成』という新たな教育目標を設定しました。その達成に向けた第一歩として、SGHの指定を受け、事業や授業の改善を行ってきました」

生徒の実態を適切に把握し、課題研究の指導に反映させる

同校のSGHにおける課題研究では、生活に



教務主任
飯田美穂 いいた・みほ
教職歴29年。同校に赴任して4年目。国語科。生徒「First」

進路指導主事
川村陽一 かわむら・よういち
教職歴27年。同校に赴任して5年目。英語科。「個々の生徒を大切にして、生徒一人ひとりの希望進路の実現を目指す」

英語科
中島由美 なかじま・ゆみ
教職歴24年。同校に赴任して2年目。SGH推進室。「The road to success is always under construction.」

SGH推進室長
稲葉亜矢子 いなば・あやこ
教職歴22年。同校に赴任して6年目。英語科。「生徒とともに成長できる教師でありたい」

欠かせない資源である「水」を取り上げる(図1)。

1年次には、週1回の学校設定科目「Local Water Issues (以下、LWI)」で地域における水の課題、2年次には、週2回の学校設定科目「Global Water Issues (以下、GWI)」で世界における水の課題について、グループごとにテーマを設定して探究する。水ジャーナリストの橋本淳司氏を始めたとする水の専門家を講師に招き、生徒にアドバイスをしてもらおう機会を積極的に設けている。両学年の3学期には、各グループが探究の成果を英文のポスターにまとめ、代表のチームは事業報告会などで発表する。そして3年次には、2年間で探究した水の課題について、生徒一人ひとりが英語で論文を書く。課題研究の中核を担う取り組みである1年次のLWI、2年次のGWIでは、生徒の実態を適切に把握し、指導に反映させることを重視。各グループに教師の目が行き届くよう、チーム・ティーチングを行っている。LWI・GWIに携わる全教師は週1回集まり、指導を振り返りながら、各グループの進捗状況や課題などを共有。次回の授業の指導案を検討・修正している。

「課題研究は、生徒が社会で必要とされる問題解決のプロセスを体験し、主体的に学びを深めるための取り組みです。水についての研究は、あくまでも手段であることを教師間で常に確認しています。そうした中で、生徒に問題解決のプロセスを意識させるためのア

図1 課題研究の流れ

時期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年次のLWI	初期指導	基礎学習	課題設定	フィールドワーク	日本語ポスター作成	英語ポスター作成	海外研修	成果発表	英文ポスター作成	成果発表準備	成果発表	GWI準備
2年次のGWI	個人エッセー作成											
1・2年次の海外研修(※)			課題設定	海外研修	英文ポスター作成							
3年次	成果発表準備	成果発表										

※希望者を対象に実施。
*学校資料を基に編集部で作成。

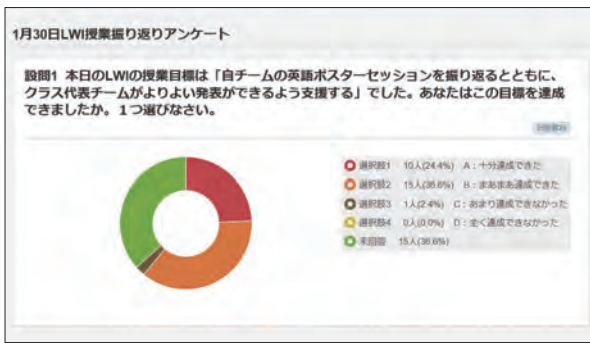
アイデアも生まれました(稲葉先生)

1年次のLWIでは、段階的にゴールを設け、振り返りの場を多くした。毎回の授業後、グループごとに進捗状況や課題、改善点などを「Classi」(※2)に入力させ、他グループに参考にしてほしい振り返りがあれば、次回の授業で担任が紹介している。

「こまめに課題を洗い出し、改善を図ること、生徒たちは学びを深めていきます。そ

* 2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

図2 Classi を活用した生徒アンケートの集計画面



生徒には、本時のLWI・GWIの授業目標の達成状況や、次回の授業に必要な準備など、課題研究についてのアンケートを定期的にClassiで配信している。SGH推進室では、その回答を集計し、全教師で共有。課題研究の指導改善やプログラムの充実につなげている。
*学校資料をそのまま掲載。

うして探究する面白さを実感し、より広い分野の文献を調べたり、改めて実験を行ったりするなど、次第に粘り強く取り組む生徒が目立つようになり「稲葉先生」

また、Classiは、生徒の振り返りだけでなく、プログラムをより充実させていくためのフィードバック機能としても活用している(図2)。

生徒の論理的思考力を客観的に測り、多面的・総合的評価を推進

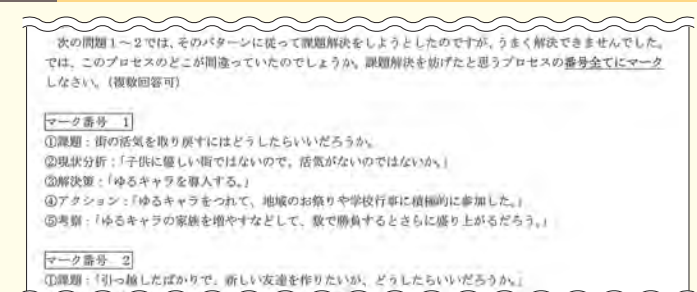
課題研究をより充実させようと、取り組みの成果検証にも力を入れている。同校が独自に開発したのが、全生徒を対象とする「論理的思考力テスト」だ。16年度、SGH推進室のメンバーが他校への視察などによる情報収集を始め、17

年度には試作テストを実施した。ところが、試作テストは時事的な設問が中心であったため、課題研究によって生徒に論理的思考力が身についたのかどうかを把握できるものではなかった。そこで、認知科学などを専門とする静岡大学教育学部の河崎美保准教授のアドバイスを得ながら、「生徒に考えさせる」「問題解決における手法の効果の妥当性を問う」といったポイントを意識して内容を練り上げていった。

そうして完成したのが、18年9月に実施した問題だ(図3)。それは、①課題解決のプロセスのどこに課題があるのかを見つける設問、②日本語の文章における接続詞の正しい使い方を選ぶ設問、③「ふるさと納税は促進されるべきだ」という主張に対する複数の意見を示し、それらの意見が論理的に正しいかどうかを判定する設問の3つで構成されている。同テストの結果を分析し、模擬試験の結果と比較したところ、1年生では論理的思考力が高い生徒ほど教科書力が高くなっていたという。SGH推進室に所属する英語科の中島由美先生は、こう話す。

「1年生が受ける模擬試験では、20年度に始まる『大学入学共通テスト』を見据え、論理的思考力を求められる問題が増えました。そうした中、本校の論理的思考力テストと模擬試験の結果に相関があったということは、本校が想定する論理的思考力は、新しい大学入試で求められる資質・能力に対応しているのかもしれない。その検証は今後の課題で

図3 2018年9月実施の「論理的思考力テスト」



「論理的思考力テスト」は、朝読書の10分間に全生徒を対象に実施。作問にあたっては、生徒が取り組みやすいよう、短く簡潔にすることを心がけたという。

*学校資料を基に編集部が一部改編。2018年9月実施の「論理的思考力テスト」の全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(<https://berd.benesse.jp>)でダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

す。また、論理的思考力を適切に把握できるようにすれば、これからの大学入試や次期学習指導要領で重要性が高まる多面的・総合的評価の推進にもつながります」

生徒の英語力をより高めるべく、英語で考えさせる場面を増やす

課題研究での英文によるポスターセッションでは、生徒の英語力の課題が顕在化した。発表では堂々と考えを述べる生徒が多い半面、質疑応答に移ると、質問をする生徒は少なく、また、質問が出ても、それに対して思うように英語で

答えられない生徒が目立ったという。

「本校の生徒の多くは、時間をかけて英語で考えをまとめ、プレゼンテーションをするのは得意です。一方、臨機応変に考え、話すことが求められる場面になると、英語が出てこなくなってしまう。グローバルに活躍するためには、何も準備していなくても、英語で話せる力が必要です。そこで、とつさの受け答えが求められる場面を授業に設けることにしました」（中島先生）

その一環として、17年度からは、毎回の「コミュニケーション英語」の冒頭3分間で生徒同士のペアワークを行っている。18年度には、静岡県教育委員会の「魅力ある学校づくり推進事業」における「英語教育コアカスールの指定を受けたこともあり、生徒同士が「Why?」「How?」などを用いて質問し合うなど、多様なペアワークを行った。

「英語教育コアカスール」の取り組みとしては、海外の高校生や大学生と交流する場面も増やしている。その1つが、英語のイベントなどに取り組む部活動である国際交流部が企画したプレゼンテーション大会だ。近隣の高校数校に加え、ベトナムの高校生がインターネットのテレビ電話機能を用いて参加した（写真）。

「今回のプレゼンテーション大会では、学校の代表という意識が生まれたためか、生徒は、より意欲的に練習し、本番に臨みました。18年度は国際交流部の生徒から出場者を選抜

写真 2018年8月の海外研修では、ベトナムの高校を訪問した。19年3月のプレゼンテーション大会では、海外研修の訪問先の生徒たちがインターネットのテレビ電話サービスを用いて参加し、同校の生徒たちと英語による質疑応答を行った。

2年次まで幅広く学べるよう、19年度から教育課程を改訂

しましたが、今後は選抜対象を広げていきたいと思います」（中島先生）

同校のSGHの指定が18年度で終了したことや、次期学習指導要領への対応というねらいから、19年度には教育課程を改訂する。「総合的な探究の時間」（以下、「総合探究」）では、SGHでの課題研究を引き継ぎ、SDGs（*3）をテーマとする探究学習を行う。

現行教育課程からの最も大きな変更点は、3年次から文系・理系に分かれるようにしたことだ。同校には、3年次に理系から文系に変える生徒や、力を入れる教科・科目を早い段階で絞る生徒が少なくなかった。そうした生徒は、3

年次の後半に学力が伸び悩む傾向にあるという。そこで、2年次までは幅広い教科・科目を学べるようにした。改訂を主導してきた教務部で国語科の飯田美穂先生は、次のように話す。

「低学年の段階の学習内容は初歩的なものです。そこで、生徒が学びを深めた段階で主体的に文理選択ができるようにしたいと考えました。バランスよく学ぶことで根本的な問いを立てる力がつくと思っています」

自分のやりたいことに主体的に挑戦する生徒が増えた

SGHを軸にした学校改革の成果は、生徒の姿に表れている。課題研究では、教科学習で習得した知識・技能を応用し、問題の解決策を提案できる生徒が目立つ。教科学力も伸び、国立大学には毎年100人以上が合格するようになった。また、社会への視野を広げ、将来海外で働くことを希望する生徒も多い。進路指導主事の川村陽一先生は、生徒の変化を次のように語る。

「以前は、ほかの生徒と一緒に動かなければ動かない生徒が少なくありませんでした。しかし、現在の生徒は、自分から進んで行動できるようにになりました。自分のやりたいことを見つけ、主体的になれているのだと思います。今後は、「総合探究」における探究学習が学校改革の中心となる。「論理的思考力テスト」も問題点を改善しながら継続していく予定です。

* 3 Sustainable Development Goalsの略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。①貧困をなくそう、②飢餓をゼロになど、17の目標と169のターゲットから成る。

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、専門学科の「課題研究」のルーブリックを使って生徒の学びの成果を可視化するための指導について検討する。

山口県立下関工科高校 かすが よしえ 春日貴江先生提供
「ルーブリック」

Before

課題研究ルーブリック 応用化学工学科

資質・能力	行動目標	A	B	C	D	自己評価				
主体性	指示を待つのではなく、自分がやるべきことを見つけ、自発的に取り組むことができる。	自分がやるべきことを見つけ率先して課題に取り組む。	指示を仰ぎ、意欲的に課題に取り組む。	指示を待って、課題に取り組む。	前向きに課題に取り組むことができない。					
実行力	失敗を怖れずに行動することができる。	何事に対しても前向きにチャレンジすることができる。	すすめられればチャレンジできる。	他の人がすれば、する。	失敗を怖れて新しいことにチャレンジしない。					
課題発見力	分析結果をもとに取り組むべき課題を明確にできる。	自ら、分析し、課題を明確にできる。	指示があれば、分析し、課題を明確にできる。	分析をするが、課題が明確にならない。	分析できない。					
計画力	目標達成のために優先順位をつけ、手順、方法の複数案の中から実現性の高い最適案を選択することができる。	優先順位、実現性の高さを考慮し、最適案を選択することができる。	優先順位、実現性の高さを考慮することができる。	手順・方法を考えることができる。	なにが優先かわからない。					
	計画と進捗状況の違いを把握し、計画を修正することができる。	進捗状況に合わせて計画を修正できる。	計画と進捗状況の違いに留意している。	計画を立てることができる。	無計画にすすめようとする。					
知識・理解	定性分析・定量の内容を理解している。	よく理解している。操作が正確で速い。	まあまあ理解している。操作は、正確である。	ある程度理解している。操作を間違えることがある。	できない。					
組織行動力	リーダーを中心として行動できる。 (協調性+リーダー; 計画性、他; 規律性) リーダーはその日の内容を考え、指示を出すことができる。その他の者は、リーダーの指示を仰ぎ行動する(敬語)。	よくできる。	まあまあできる。	周囲に助けをもらいながら、できる。	できない。					

課題

- 1 学期末にルーブリックを使って評価を行ったが、どのようなタイミングで評価を行えば、生徒が自身の学びを改善するようなよりよい振り返りになるか
- 2 「課題研究」という授業内容が変化する教科で、数値に表しにくい資質・能力をどのように評価すればよいか

山口県立下関工科高校の春日貴江先生は、2018年度、応用化学工学科の「課題研究」において、ルーブリックを使った評価を導入した。春日先生自身は既に自分の担当する専門教科でルーブリックを活用してきたが、生徒がグループで主体的に学習を進める「課題研究」では初めての試みだった。今回、ルーブリックを用いた評価は学期末に行ったが、生徒が自身の学びを振り返るといふ点で評価のタイミングは適切だったのか、検討したいと考えていた。また、生徒の自己評価、他者評価も印象評価になりがちだったため、数値化されなくても納得度の高い評価とするための仕組みも必要だと感じていた。

適切な頻度、タイミングで
納得度の高い評価を行いたい

検討メンバー



ツール提供者

山口県立
下関工科高校
春日貴江
かすが・よしえ



長崎県立諫早高校
高比良周一
たかひら・しゅういち



宮崎県立延岡星雲高校
柳井健二
やない・けんじ

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

「課題研究」 ルーブリック



After

改良ポイント

1 授業の節目や

単元のまとめなど複数回、ルーブリックを使って評価させる

生徒が自身の学びの改善をスムーズに図れるよう、ルーブリックを使った評価の回数を増やし、評価結果を蓄積していく。

2 育成を目指す資質・能力のいくつかに焦点をあてて、理由とともに評価させる

評価の回数が増えたことで評価そのものに時間がかかりすぎないように、学校として育成を目指す資質・能力のうち、生徒が「自分が特に伸ばすことができた」「仲間が特に伸ばすことができた」と感じているものを選んで、理由とともに記述する。他者を評価した部分を切り取り、生徒間で交換することで、一人ひとりの生徒が自分自身を振り返られるようにする。

ルーブリック

資質・能力	行動目標	A	B	C	D
主体性	指示を待つのではなく、自分がやるべきことを見つけ、自発的に取り組むことができる。	自分がやるべきことを見つけ率先して課題に取り組む。	指示を仰ぎ、意欲的に課題に取り組む。	指示を待って、課題に取り組む。	前向きに課題に取り組むことができない。
実行力	失敗を恐れずに行動することができる。	何事に対しても前向きにチャレンジすることができる。	勧められればチャレンジできる。	ほかの人がすれば、する。	失敗を恐れて新しいことにチャレンジしない。

今回の授業・単元で特に伸ばすことができた資質・能力を2つ選び、そう思った理由を書きましょう。
また、そのほかの資質・能力についても評価しましょう。

自分を評価しよう						
名前	特に伸びた資質・能力	そう思った理由				
	・()カ					
	・()カ					
4段階評価		主体性	実行力	課題発見力	計画力	知識・理解 組織行動力

他者を評価しよう						
名前	特に伸びた資質・能力	そう思った理由				
	・()カ					
	・()カ					
名前	特に伸びた資質・能力	そう思				
	・()カ					

他者評価については、切り取って生徒同士で気軽に交換できるように、肯定的な記述のみとし、4段階評価は行わない

「理由」を述べながら、授業や単元の節目で評価に臨む

学期末に行ってきたルーブリックを用いた評価を、授業の節目や単元のまとめごとにし、具体的なエピソードの記述も行わせることで、評価を次の取り組みの改善につなげやすくなった。評価の機会が増えると評価に時間が割かれてしまい、授業時間が減ってしまふことも考えられるため、ルーブリックにおける6つの資質・能力を時間をかけずに評価できるように、その授業・単元で特に自分や他者が伸ばすことができたと思う資質・能力を2つ選んで、そう思う理由とともに自己および他者評価することにした。自分や他者が「身につけた資質・能力」を考えさせることで、長所を見抜く力を身につけさせたいというねらいもある。

次ページでは、3人の先生方の検討の様子をダイジェストで紹介!



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。

「課題研究」ルーブリック



活用の流れ

- 1 年度当初にルーブリックを生徒に配布し、
評価の観点を周知する
- 2 授業や単元の節目などで
ルーブリックを用いて生徒が
自己および他者評価する
- 3 年度末にルーブリックの改訂に取り組む。
生徒に「どのような観点で評価してほしいか」
などを聞き、改訂に生かす

根拠を語ることで、
評価の納得度を高め合う

「課題研究」におけるルーブリックは、生徒にとっては、学習活動の中で、自分の成長を測る手立ての1つである。ルーブリックをよりどころにした自己評価、他者評価は、可能な限り数多く行うことが望ましいと、検討会では意見が一致した。しかし、ただ何となく的印象でこれまで通りの4段階評価をすると、納得度の高い評価が実現するとは限らない。そのため、自分や他者が特に伸ばしたと思う資質・能力を選ばせて、そう思う理由を述べながら丁寧に評価させることにした。それによって、たとえ主観が土台であっても、納

得度が増すことを期待できるからだ。

さらに、自分や他者が「特に伸ばしたと思う資質・能力」という視点での記述を求めることで、他者を前向きに評価する力を身につけさせるようにした。もちろん、相互評価ではできないことを指摘すべき局面もあるが、数値で評価できない活動に取り組む生徒には、まずは自分や他者のよいところを見抜き、言語化する力を身につけてほしいという声が多く聞かれた。

同校のルーブリックでは、育成を目指す資質・能力の一部は生徒たちの議論の中で定義されたことも紹介された。ルーブリックは学習の当事者である生徒が作り、改訂にもかかわるべきだという点でも意見は一致した。

検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、
ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

自分や他者の長所に気づく力を身につけさせたい

山口県立下関工科高校 春日貴江 かすが・よしえ



今回の検討会で得た大きな改訂方針の1つは、ルーブリックを基にした生徒の自己および他者評価の回数を増やすことです。生徒たちとその日の授業や単元で評価したい観点を選ばせることで、短時間でありながら、納得度の高い評価の場を頻繁に設けられそうです。評価が漠然としたものにならないように、根拠となるエピソードや内省を記入させる案も取り入れたいと思います。

ルーブリックを使った評価を通して生徒に期待するのは、自分や他者の長所に気づく力を高めることです。高校卒業後は社会人として活躍する生徒が多い本校では、長所に気づく力は高校3年間のうちに確実に身につけてほしい力の1つです。自分や他者の長所に素直に目を向けられる雰囲気や課題研究の授業で醸成していけば、生徒のメタ認知能力も高まっていくと思います。先生方とお話する中で、ルーブリックのメリットに目を向けることができたことで、私自身の心が軽くなったことも大きな収穫でした。

春日先生プロフィール 教職歴20年。同校に赴任して3年目。応用化学工学科主任。工業科担当。「自己有用感を高め、母校に誇りを持ち、地域社会に貢献する産業人を育成したい」
学校プロフィール 全日制・定時制／機械工学科 電気工学科 建設工学科 応用化学工学科（以上、全日制、機械科（定時制）／共学／1学年約225人（全日制）、40人（定時制）／2018年度入試合格実績／なし（1期生の卒業は2019年3月）

「これからの学びの支援」につながる評価を

長崎県立諫早高校 高比良周一 たかひら・しゅういち



私たちはこれまで、「評価＝結果」とばかり考えてきたのかもしれない。しかし本来、評価は生徒のこれからの学びを支援する材料です。だからこそ、ルーブリックは学期の最後などに活用するだけでなく、途中で何度も活用して、次の学びを見通すことが大切です。「総合的な探究の時間」などは生徒全員に共通する数値目標がないからこそ、学習の価値を確認できるような肯定的な評価が不可欠です。本校では、生徒会役員が、委員会活動を評価・改善するためのルーブリックを作成しています。共通のゴールや指標が設定しにくい活動を評価・改善するという意味では、学校の様々なシーンでルーブリックが活用できます。

ルーブリックは作って終わりというものではなく、それを基にした指導の目線合わせと、ルーブリックそのものの見直しが必要でしょう。社会の変化を受け止めながら、「育てたい生徒像」を適切に更新し、それを共有しているか、ルーブリックを通した自己検証が私たち教師に求められています。

高比良先生プロフィール 教職歴20年。同校に赴任して10年目。2学年主任。CDA（*1）委員長。国語科。「生徒同士、生徒と教師の対話を通して、生徒の主体性、創造性を育む学校を目指したい」

学校プロフィール 全日制・定時制/普通科/共学/1学年約280人/2018年度入試合格実績（現役のみ）/国公立大は、東京大、京都大、大阪大、九州大、長崎大などに213人が合格。私立大は、東京理科大学、明治大、早稲田大、立命館大などに延べ140人が合格。

*1 Comprehension (理解)、Discovery (発見)、Ambition (大志) の頭文字をとった、同校独自の進路観醸成プログラム。

「評価」を通して学校のアイデンティティーを確立する

宮崎県立延岡星雲高校 柳井健二 やない・けんじ



ルーブリックを使った評価には、これまで個々の教師の暗黙知にとどまっていた見取りの力を、学校としての共有財産にするというメリットがあります。学校として育成を目指す資質・能力を生徒の活動場面に落とし込むことで、指導のぶれも少なくなるでしょう。また、生徒の中には自己肯定感が低く、集団での自分の価値、役割を十分に認識できていない生徒もいますが、そうした生徒にとってルーブリックは、「高校3年間でこういう姿を目指そう」というメッセージになります。ルーブリックを活用することで、学校としてのアイデンティティーの確立が促進されるわけです。

そのように考えると、ルーブリックの作成や見直しには、どんな生徒を巻き込みたいですね。本校でも「人間力向上」をスローガンにした課題研究が本格化しています。が、「活動してみてもどんな力が必要だと思っただ？」「もっと評価してほしかったことはある？」などと生徒に聞きながら、ルーブリックを作成、更新していきたいです。

柳井先生プロフィール 教職歴26年。同校に赴任して10年目。主幹教諭。教務部。英語科。「活躍できる場を与え、対話を通して導き、生徒一人ひとりに成長や自立を感ぜさせたい」

学校プロフィール 全日制/普通科・フロンティア科/共学/1学年約200人/2018年度入試合格実績（現役のみ）/国公立大は、山口大、宮崎大、大阪府立大などに25人が合格。私立大は、駒澤大、近畿大、福岡大などに延べ133人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

指導ツールを募集しています！

「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材で検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①～④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒情報が削除されているかご確認をお願いいたします

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容（目的・活用時期・活用方法）
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時）にて承ります。（株）ベネッセコーポレーション CPO（個人情報保護最高責任者）
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

「社会の箱庭」で仲間とともに 答えが1つではない問いに向き合う

公立小学校のプログラミング教育

私が訪問しました

京都府・私立京都産業大学
附属中学校・高校

森本 岳

もりもと・たかし



◎教職歴 14 年。同校に赴任して 4 年目。情報科主任。問題解決型学習やアクティブ・ラーニングの視点を取り入れながら、企業から提示された課題にチームで取り組み、調査や企画立案、プレゼンテーションなどを経験させる探究学習のプログラムを構築し、その推進役として活動している。

京都府・私立京都産業大学附属中学校・高校

全日制／普通科／共学／1学年約 380 人／2018 年度入試合格実績（現浪計）：国公立大は、京都大、大阪大、神戸大、大阪府立大などに 62 人が合格。私立大は、京都産業大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ 783 人が合格。

私が授業をしました

大阪府・
大阪市立苗代なわしろ小学校

金川弘希

かながわ・ひろき



◎教職歴 10 年。同校に赴任して 6 年目。小学 5 年生担任。授業にプログラミングを取り入れたのは 5 年前。「子どもたちには、プログラミングを楽しみながら、科学技術が社会でどのように生かされているのか、社会の仕組みそのものに関心を持ってもらいたいと思っています」

大阪府・大阪市立苗代小学校

「スーパー・チャレンジ・スクール」をモットーに、子どもたちが「なりたい自分」「してみたい夢」の実現に向け、自分の特性や能力を最大限に発揮し、大きく成長している教育活動を進める。児童数 488 人。

*プロフィールは 2019 年 3 月時点のものです。

実際にプログラミングでできたことを発表。思い通りに進まなかったグループの発表時、金川先生は子どもたちに、「どうすればいいか教えてあげるチャンスだよ!」と声をかけた。

ほかのグループの作業を観察しやすいように、金川先生は机の配置にも配慮している。椅子も片づけているので、子どもたちは気になったグループがあればすぐに見に行き、意見交換することができる。

◎お知らせ 今回ご紹介した金川先生のプログラミングの授業の詳細は、下記のレゴエデュケーションが公開する授業案サイトにて、ご確認ください。

<https://legoedu.jp/lessonplan/?p=317>



金川 小学5年生の理科で、流れる水の働きを学んできた子どもたちが、今日はプログラミング教材「レゴ® WeDo2.0」(*1)を使い、洪水の被害を防止する装置を作りました。画用紙に書いた完成予想図を基に、グループで話し合いながら作業を進めました。

森本 どのグループも、試行錯誤しながら作業していました。ほかの人と相談しながら新しい価値を生み出すという、資質・能力を育む活動だと思いました。今日の授業は2コマ連続でしたが、どの子どもも休み時間になっても作業を止めることなく集中していましたね。グループ内で作業を分担していたのですか？

金川 自分の作業が終わったら暇になってしまいますから、分担はさせていません。子どもたちには、「グループでよいものを完成させるためなら、一人ひとりで、どんな作業をしてもよい」と話しています。中には、グループ内で同じ作業をしているケースもありますが、それも後で気がつけば、子どもたちにとって学びになります。

森本 するべきことや役割を洗い出し、チームとして動きを生徒に俯瞰させることが多い高校の探究学習とはやはり

この日のプログラミングは、具体的な課題について仮説と検証を繰り返す「社会の箱庭」でした



大きな課題に向けて、小さな課題を設定し、それに挑戦する体験を、小、中、高と連続的に積み重ねたいです



異なりますね。一方で、金川先生が子どもたちに「こうしたら？」などと指示をしないところは、高校の探究学習での教師のかかわり方と似ていました。

金川 どうすればうまくいくかを教えることはまずありません。手助けするのはあるべき部品が見つからない時くらいです。行き詰まった時には、ほかのグループを見てくるように勧めます。

森本 答えが1つではない問いが目の前に現れた時に、1人で悩むのではなく、仲間と多様な視点で話し合う経験こ

そ、学校で必要だと思えます。ただ、高校生は集団の中で目立つことを恐れがちで、ユニークな意見が出にくい場合がありますから、探究学習を始める際は、ブレインストーミングなどで生徒の思考の枠を広げることを心がけています。

金川 今回の授業のような内容の時は、まず完成予想図を自由に考え、紙に表現させるのがよいのでしょうか。そして、間違ってもいいよ、人と違ってもいいよと普段から繰り返して伝えることが大切だと思っています。

森本 高校生のコミュニケーション力とコラボレーション力をどのよう高めるか、今日の授業などを踏まえて今後を考えていきたいと思えます。



洪水の被害を防ぐためにどんな装置が必要か考え、グループで完成図を描いた上で、実際にプログラミングを始める。装置は、洪水の発生を知らせる警報、川の中の土を掘り出して水位を下げる設備など、様々なアイデアが出された。

今日の学びを 自校の指導につなぐ

「答えが1つでないことは
楽しい」と思える
授業を目指す



金川先生は、プログラミング教材を手段にして教科の理解を深めながら、社会で求められるコミュニケーション力や探究心を育てよう工夫されていて、とても共感しました。また、金川先生は、最後のグループ発表で、「最後までできていなくても、どこで行き詰まったのか、どこが分からなかったのかを言えれば大丈夫」「できたかどうかよりも、どれだけ悩んだかが大切」と何度もおっしゃっていました。高校では、生徒は答えが1つではない問いを前にすると「しんどい」「不安」と口にします。それならば私は、「答えが1つではないのは楽しい」と生徒が感じられるような授業を目指そうと、今日、改めて思いました。

*1 WeDo 2.0 ソフトウェアは、レゴエデュケーションが提供する小学生向けのプログラミング教材です。



農学・理学・工学・医学を融合して学び、 繊維の可能性を広げる研究に挑む

信州大学 繊維学部



シルクのタンパク質を医療用材料に 活用する研究を行っています

「応用生物科学実験」で、シルクをスポンジなどの医療用材料に加工しました。入学当初は食品分野に興味がありましたが、シルクの持つ可能性に感動し、医療分野に役立てる研究を行っています。(片桐さん)

シルクナノファイバーの研究のため チェコに留学予定です

シルクを極細の糸にしたナノファイバーについて研究中です。原料は、水とシルクのため安全性が高く、医療用材料として注目されています。社会に貢献できる研究にすることを目指しています。(柴田さん)



博士課程の先輩から研究手法などを学べます

3年次からは、週1回研究室生が集まり、卒業研究の進捗を報告し合います。先日は、博士課程の先輩の前で卒業発表会に向けた練習を行いました。先輩のより専門的な研究にも触れられ、刺激を受けています。(片桐さん)



**1年次は研究に必要な
ファイバー工学の基礎を学ぶ**

1910(明治43)年に上田蚕糸専門学校として創立した信州大学繊維学部は、現在、日本で唯一の繊維学部である。同学部では、繊維を基にした衣類の工学関連分野と農学・理学・工学・医学が融合したファイバー(※)工学を学べ、先進繊維・感性工学科、化学・材料学科、応用生物科学科、機械・ロボット学科の4学科が設置されている。

1年次では、共通教育科目と専門基礎科目を学ぶ。専門基礎科目の1つである基礎科学科目は、大学の研究で必要な理系科目の基礎を学ぶ科目だ。応用生物科学科4年生の片桐



繊維学部
応用生物科学科4年

片桐杏菜

かたぎり・あんな
長野県長野高校卒業。食品開発の仕事に興味があり、同学科に入学。



繊維学部
応用生物科学科3年

柴田恵里花

しばた・えりか
滋賀県立膳所高校卒業。小中学校時代に経験した蚕の研究がきっかけで、入学。

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

* 繊維には、衣類に使われる綿・絹(シルク)・毛(ウール) などがあるが、ファイバーは細くて長い形状の物の総称で、繊維や繊維の集合体はもちろん、スケールがマイクロ・ナノレベルの各種タンパク質やDNAから、人間の背丈よりも長い電線や光ファイバー等まで含まれる。細くて長いことで、ほかの材料では実現できない高度な機能を持つ。

杏菜さんは、高校時代に「生物基礎」しか学んでいなかったため、「基礎生物学」を履修したという。

「2年次以降には『分子生物学』『ゲノム生物学』など、発展的な内容を学びます。『基礎生物学』では、専門的な講義についていく上で必要な基礎を学びました」（片桐さん）

幅広い実験や実習を経験し、研究の土台を培う

2年次からは学科ごとの授業で、専門科目を学ぶ。応用生物科学科3年生の柴田恵里花さんが研究の面白さを感じたのが、2年次後期に履修した「生物科学基礎実験」だという。同科目では、微生物や動物、植物などの生物の知識を深めるとともに、実験器具の使用法を学び、実験データの解析法の基礎を習得する。

「特に印象的だったのは、マウスの解剖実験です。雄雌両方を2人1組で解剖し、両者の違いを確認しました。少人数での実験は、意見交換などがしやすく、深い考察ができます」（柴田さん）

同学部には附属農場があり、フィールドを活用した農場実習を行っているのも特徴だ。応用生物科

学科では、羊、蚕、綿など繊維を取ることができる動植物に実際に触れることで、生物由来の繊維がどのように作られているのかを知り、研究に役立てることをねらいとしている。

シルクファイバーを再生医療用材料として研究

3年次になると専門的な内容を学び、後期から研究室に所属する。蚕の研究をしたいと同学部に入学した柴田さんは、3年次前期の必修科目「応用生物科学実験」で、玉田靖教授の指導の下に行った蚕が産生するシルクに関する実験に興味を持ち、玉田研究室への入室を決めた。

「蚕の幼虫が作る繭は1本のファイバーから成り、それを精錬処理してタンパク質のフィブリンを抽出し、スポンジ状にして医療用材料を作る研究の基礎を学びました。自分も医療用材料の研究をしたいと思いました」（柴田さん）

片桐さんも玉田研究室に所属し、卒業研究ではフィブリンをゼリー状に凝固したゲルにし、関節などの軟骨を再生する医療用材料の開発を目指し研究に取り組んでいる。

「軟骨再生の材料をゲル化できれ

ば、手術時に切開せずに注射等で体内に注入できます。身体により負担が少ない医療用材料になる可能性があると考えると、やりがいがあります」（片桐さん）

また、同学部は、産学連携にも力を入れている。片桐さんも卒業研究の傍ら、医療機器メーカーとの共同研究に取り組んだ。

「研究の実用化には、材料を作るための化学の知識、材料の性質を測定する物理の知識、生体での評価をする生物の知識が必要です。また、データ分析には統計学も不可欠です。それらの知識を組み合わせ、柔軟に応用する力が求められます。高校や大学1、2年次で学んだ基礎が大事だと実感することも多いです。今後は、大学院で研究を深める予定です」（片桐さん）

柴田さんは、大学の留学制度を利用し、3月からチェコ共和国のリベッツ工科大学テキスタイル工学部に3か月間留学する。

「留学先では、シルクナノファイバーについて研究する予定です。再生医療の研究が盛んな大学なので、最先端の技術を学び、研究者を目指したいです」（柴田さん）

大学の思い

知識と創造力で 繊維の可能性を広げる研究を



繊維学部
教授
玉田靖
たまだ・やすし

本学では、繊維の持つ可能性について様々な学問を横断して学び、幅広い知識と創造力を有する専門人の育成を目指しています。例えば、私の研究室では、シルクを用いた医療用材料の開発に取り組んでいます。シルクは2500年以上前から今日まで医療用材料として使われてきました。それは、昆虫由来のタンパク質は構造がシンプルなため生体に安全で、強いという特徴を持っているからです。

ファイバー工学の可能性を追究する学生の創造力をさらに伸ばすために、2018年度から学科横断教育プログラムをスタートさせました。ファッショニング学・先進複合材料工学・国際連携の3つのプログラムを用意し、在籍学科を問わず、複合的な内容を履修できるプログラムです。

卒業生の主要な就職先は、海外もマーケットとしている製造業です。そこで、海外60以上の大学・研究機関と連携し、学生の海外留学を推進しています。繊維を軸にグローバルに活躍できる研究者・技術者を育成していきたいと考えています。

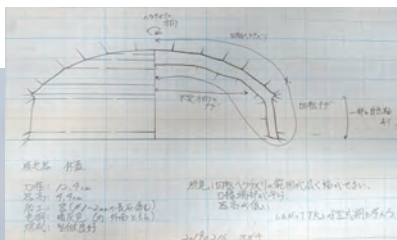


世界遺産の宝庫、奈良で本物に触れながら、文化財専門職を目指す

奈良大学 文学部 文化財学科

タイの水中遺跡保存のために、日本の保存技術を生かしたいです

タイに2度行き、現地の壁画などの文化財や、水中遺跡発掘現場を見学。沈没船から出土した陶磁器の保存を卒業研究のテーマにしました。日本の文化財の保存技術を世界で役立てたいと思っています。(島袋さん)



発掘調査して出土した遺物を自分の手で計測します

須恵器すえき(*1)について研究中です。出土した土器は、外形を実測して(写真左)図面(写真右)にします。それを基に、作られた時代を特定することが考古学の醍醐味の1つです。(鈴木さん)



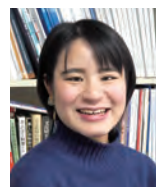
遺物の保存には、分析機器や薬剤の知識も必要です

卒業研究では、水中から出土した陶磁器の修復にはどの保存方法が適しているのかを繰り返し実験。結論を導くためには、粘り強い作業が必要であることを実感しました。(島袋さん)

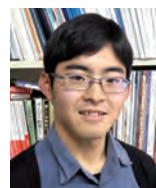
世界遺産や国宝など、文化財の宝庫である奈良。奈良大学文学部文化財学科は、そうした立地を生かして文化財を幅広く学び、守り、生かし、後世に伝える人材を育成している。これまで全国最多の700人以上の学芸員・文化財専門職員を輩出してきた実績を持つ。

同学科には、「考古学」「美術史学」「史料学」「保存科学」の4つのコースが設置されている。1、2年次はコースに分かれず、4分野について広く学ぶ。カリキュラムで重視されているのが、本物の文化財を題材として研究を行う「現地・現物主義」だ。

1年次から本物の文化財に触れながら学ぶ



文学部
文化財学科4年
島袋花子
しまぶくろ・はなこ
沖縄県立球陽高校卒業。
神社仏閣の保存・修復に
興味があり、同学科に入学。



文学部
文化財学科4年
鈴木郁哉
すずき・ふみや
静岡県立島田高校卒業。
社会や歴史への関心が
高く、同学科に入学。

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

*1 古墳時代(5世紀前半)に朝鮮半島から伝わった技術を使って焼いた土器。丘陵の斜面をくりぬいた窯の中で高温で焼かれたため、それまでの野焼きによるものと比べて、硬く焼き締まった土器であることが特徴。

1年次の基礎科目からその精神を重視した教育が行われている。文化財学科4年の鈴木郁哉さんは、こう振り返る。

「『考古学概論』では、奈良県内の遺跡を見て回り、『美術史概論』では、毎週のように美術館・博物館で絵画や仏像を観察しました。1年次から様々な文化財に直接触れることで、文化財を学問的に見る目が鍛えられました」

文化財専門職を目指す学生が全国から集まり、主体的に学ぶ

同学科で特徴的なのは、文化財に関連する仕事がしたいと明確な目標を持って入学する学生が多く、主体的に学ぶ風土が根づいていることだ。鈴木さんは、1年次から「考古学実習室」で行われる自主ゼミに参加。有志の学生が、同学科で発掘した遺物の整理作業を行っている。

「発掘された土器の破片の色や口縁部分の模様から、作られた時代を特定する先輩方を見て、自分もそうなりたいと感じました。先輩に誘われて、平城京跡の発掘に参加するなど、1年次から現場で作業することを通じて、学びたいことが絞られて

いきました」(鈴木さん)

鳥袋花子さんは、2年次から今津節生教授の研究室を訪ねている。

「私は沖縄県出身のため、水中遺跡に興味がありました。今津教授の『保存科学講読』の授業で、陸上より水中の方が出土する遺物が多いことを知りました。タイの水中遺跡の現地視察にも同行させてもらい、さらに関心が高まり、3年次から今津研究室に入りました」(鳥袋さん)

実習で実物に触れて学び、研究手法を確かなものにする

3年次から専攻コースごとに専門的な実習が行われる。保存科学コースを専攻した鳥袋さんは、「保存科学実習」で木材や金属などの保存技術を学んだ。

「遺物の色や形が変わらないように保存するために、特別な溶液で含浸(*2)する作業をします。材質によって適切な溶液やその濃度が異なり、木材は収縮率なども考慮しなければなりません。数学や化学の知識を大学でこれほど使うとは思っていませんでした」(鳥袋さん)

考古学コースを専攻した鈴木さんは、須恵器を研究している。

「卒業研究では、奈良近郊で発掘された初期須恵器に絞って、形状ごとの分布などを調べました。一つひとつの史料を地図上に示していき、地域によって祭司用が多いなど、使われ方に差があることが分かった時は、大きな達成感がありました」(鈴木さん)

世界遺産で学芸員実習を行うなど、現地・現物で学ぶ

学芸員の資格取得に必要な「博物館実習」は、奈良県内の博物館で行われる。鳥袋さんは、世界遺産である春日大社国宝殿で、鈴木さんは奈良県立橿原考古学研究所で、1週間の実習に参加した。

「展示物の日本刀の手入れの方法を学びました。保存方法についてより詳しく学べたほか、展示の工夫も知ることができました」(鳥袋さん)

今後、2人ともに同大学の大学院に進んで、研究を深めるといふ。

「卒業後は、実際に遺跡発掘にかかわれる文化財専門職を目指したいと思っています」(鈴木さん)

「水中考古学の研究を深め、博物館などで保存・修復にかかわる仕事が行いたいです」(鳥袋さん)

大学の思い

マネジメント力を備えた文化財のスペシャリストに



文学部
文化財学科 教授
今津 節生
いまつ・せつお

本学科は、1979年に日本で初めての文化財学科として創設されました。総合的に文化財学を学べるカリキュラムを用意しています。

最も重視しているのが「マネジメント力」の育成です。例えば、博物館に就職したら、展示物すべてを把握しなければならぬため、自分の専門分野以外の文化財に関する知識や技術も求められます。加えて文化財を守る法律の知識、市民のみなさんとのコミュニケーション力も必要でしょう。そうした現場で求められる実践力を、体験的に身につけられるようにしています。

また、学外にも学びの場があります。文化財専門職として就職した先輩のネットワークを生かして、先輩が調査にかかわる発掘現場や博物館でアルバイトをする学生も少なくありません。

今後、力を入れていきたいのが、文化財の防災についてです。阪神淡路大震災以降、文化財を通じた文化の復興も重要視されています。文化財が被害に遭った際、即座に行動ができるような文化財のスペシャリストを育成していきます。

*2 木材や金属などに、薬品や樹脂、水などの液体を浸して含ませること。

これからの会議・研修のあり方、作り方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる一助となるよう、今号からは、対話の場づくりに取り組む実践者に話を聞いていく。

なぜ、学校現場に「対話」が求められているのか

津屋崎ブランチ LLP 代表、
LOCAL&DESIGN (株) 代表取締役
山口 寛

やまぐち・さとる 行政、教育機関、地域、企業など、様々な場で対話を促進し、構成員が主体的に課題に取り組む集団づくりを支援するファシリテーターとして活躍。高校における探究学習で、生徒が対話のスキルを身につけるためのワークショップを行ったり、まちづくりをテーマにした住民会議で高校生ファシリテーターを養成するなど、高校現場や高校生とのかかわりも多い。本コーナーの監修者の1人(2017年6月号、8月号、2018年4月号、6月号を監修)。



対話のある集団で イノベーションが 生まれる

学校を取り巻く状況が変わり、学校全体として、そして教師一人ひとりとしての指導のあり方に変化が求められている今、校内の会議や研修における対話の重要性が増しています。なぜ、変化に対応するために対話が重んじられるのか。学校ではありませ

んが、興味深い例をお話しします。

先日、東海地方の僧侶たちの宗派を越えた勉強会にファシリテーターとして参加させていただきました。近年、檀家の減少という問題に直面している寺は宗派を問わず少なくありません。もちろん、寺にとって檀家数は重大な問題です。しかし、「どのようにして檀家を増やすのか」を考える前に、現代の寺は地域においてどのような存在でありたいのか、今、寺には何が求められているのかを話し合いたいと、若い僧侶たちが声を上げたのです。若い僧侶たちは、「寺のあり方、僧侶としての使命は今までと同じでよいのだろうか」と自らに問いました。

そして、資質・能力を重視する新しい学力観に基づいた指導の確立が求められている学校も、「学校や教師の役割」を根本から問い直すことが求められています。学校組織の中で先生方が多様な考えを語り合い、それらを混ぜ合わせ、変化する社会の中での学校、教師の役割を問い直し、新しい指導のあり方を構築していく。そのように学校現場でのイノベーションを起こすような自由な対話が必要でしょう。

大きな変革、イノベーションは、これまでの常識にとらわれずに課題に



同じ属性で、人間関係が固定化した 集団であるほど、話し合いの場では ファシリテーターの存在が必要

向き合った時に生まれます。若い先生、
赴任したばかりの先生も含め、すべて
の先生が、「これからの学校はどんな
存在でありたいのか」「学校には何が
求められているのか」を自由に語り合
えた時、学校にもイノベーションが起
こるかもしれません。
とはいえ、本質を問い直すというこ
とは簡単ではありません。特に、同じ
属性の人が集まった集団、人間関係が
固定化している集団にいる時、私たち
は常識や思い込みに支配されがちで
すし、誰もが思ったことを自由に発
言する会議にはなかなかなりません。
だからこそ、対話を促すファシリテー
ターという役割が必要になるのです。

一人ひとりが 対話の力を身につければ 集団は強くなる

私がかかわっているサッカークラ
ブの例をお話しします。そのクラブの
監督は、全国に名を知られた強豪校で
サッカーを学びました。現役時代の練
習は非常に厳しく、監督にとってサッ
カーは楽しいものではなかったそう
ですが、社会人になって数年ぶりに
サッカーを再び始めた時、サッカーの
楽しさに改めて気がついたというの
です。「サッカーが楽しいものである
ことを忘れてしまい、あの時の自分の
ようにサッカーを嫌いになっ
て子どもがいるのではないか」。そう思っ
た彼は、自らクラブを立ち上げました。
幼稚園児から大人まで200人以
上のメンバーがいるそのクラブでは、
今、練習メニューに対話を取り入れて
います。「二人ひとりがスキルアップ
することも大切だけれど、対話を通し
たチーム力向上にも取り組もう」「サッ
カーを楽しみ、サッカーを通じて社会
に貢献できる力を養うために、練習の

中に対話を取り入れよう」と、監督は
メンバーに呼びかけたのです。
月に数回、ファシリテーターとして
私がそこで行っていることは、一見
サッカーとは関係のないことです。よ
くするのが、絵や写真を見て、それ
ほかの人に言葉で伝えるゲームです。
うまく伝わらなかったグループとうま
く伝わったグループにどんな伝え方
の違いがあったのかを話し合ってい
く中で、自分の話が相手に伝わらな
い時、その理由は相手ではなく、自分
中にあることが多いことに気がつき
ます。そのゲームを繰り返すことで、
一人ひとりの伝える力が高まってい



山口氏がつくる対話の場では、参加者に合わせて、写真のような「対話の心得」が提示される

きます。また、そうした場に、保護者を招くこともあります。親子で取り組み中で、自分が子どもに対して常に「上から目線」で接していたことに気づき、子どもとの接し方が変わったという保護者もいます。

そのように、言わば対話のレッスンを繰り返す中で、選手同士の話し合いが練習中もおのずと増えていきました。また、合宿のルールを選手たちだけで話し合っただけで決めてもらったところ、ルールをみんなが守るようになり、監督やコーチの負担が激減しました。そして、チームは着実に成長し、今では地域の強豪に迫る活躍を見せるまでになっています。

その結果は、サッカークラブだから、子どもだからもたらされたことでしょうか。私はそうは思いません。大人は、「言っても分かってもらえない」と思い込み、伝え合い、分かり合うことを早々に諦めてしまいがちです。しかし、対話を重ねていく中で、伝え方や聞き方を学ぶことができます。そして、お互いを信頼し、集団として強くなるのです。それは学校という場において、先生方にも実現できることだと思います。先生方は、今、伝え合うことができているでしょうか。

対話によって 私たちは対立を 乗り越えられるのか？

最近、私は、学校の統廃合について行政と住民が話し合う場でのファシリテーターを務めました。統廃合か否かで行政、住民が対立する中、私は双方に、「自分の信念をぶつけ続けるのではなく、自分と相手の意見のメリット・デメリットを考えましょう。そして今、私たちの目の前にあるもの以外の選択肢は本当にないのかを考えてみませんか」と、繰り返し訴えました。

数か月にわたる話し合いの中、自分と異なる意見に向き合うことで、参加者は、「自分の意見＝全員の意見ではない」ということを少しずつ理解していきました。そして、統廃合か否かという二者択一でスタートした議論は、分校の設置などを含む4つの選択肢にたどりつくことができたのです。

私は行政に、「最後には1つの道を選ぶにしても、それ以外の道を選ばなかった理由をぜひ住民に説明してください。そして、その道を選択するこ

話し合いのプロセスが生かされていることが 分ければ、「これからも話し合おう」と 私たちは希望を持つことができる



とで生まれるデメリットにどう対応するのかも、併せて伝えてください」とお願いしました。話し合いの結果が自分が見たものでなくても、結論に至る過程で自分の意見に耳を傾けてもらえれば、参加者はそれまでの話し合いを無駄とは思わないでしょう。それは学校の会議でも同じですよ

ね。学校として目指すもの、教科や学年としての指導のあり方などを先生方で話し合う際、自由な対話によって表出した多様な意見を丁寧に拾い上げ、合意形成に反映していくことで、先生方は「これからも話し合おう」と、自分のいる組織の未来に希望を見いだせるはずです。

2019年2月号へのご意見

* 2019年3月時点の情報です。

カリキュラム・マネジメントの重要性を実感

2月号の特集での「大学入学共通テスト」の試行調査の問題分析は、今後の授業のあり方を考える上で参考になった。従来の指導では補えない部分もあり、単元末に演習問題を取り入れていかなければならない。特に、読解力の育成では、他教科との連携がさらに重要になることから、カリキュラム・マネジメントの必要性を感じた。

静岡県・沼津市立沼津高校 谷野公彦

「読解力」の意味を改めて考える

「読解力」は「問題を読み解く力」と捉えていたが、2月号の特集を読み、教科横断で育成すべき読解力と、各教科・科目で育成すべき読解力があり、学校が組織的に育成しないと身につかないと実感した。

栃木県立茂木高校 阿久津功

他教科との共通点を発見

2月号の特集の座談会が参考になった。私は英語科担当だが、国語科担当の先生が言われていた「多彩なジャンルの文章を読む機会を増やすとともに、精読も必要」というのは、英語にもあてはまる。英字新聞から広告、学術論文、SF小説まで読ませ、生徒の感性を磨いていきたいと思った。

和歌山県立橋本高校 寺田順子

「読解力」とは何か？

「読解力」があるかどうかは感覚的に分かるが、「読解

力」を定義し、その向上を評価する指標の設定は難しい。また、「読解力」の必要性を教師間で共通認識を持つことも難しい。2月号の特集は、そうした現状を理解することに意義があったと思う。

福岡県・福岡市立博多工業高校 森永明子

三者面談を有意義にするシートの工夫

普段得られない情報を三者面談で保護者から引き出すためにも、2月号の「改良！ 指導ツール ピフォーアフター」で取り上げられたような三者面談シートが必要だ。生徒の3年間の履歴を見ることができ、意識と行動の変化に結びつく記入法を模索していたので、2月号のシートを参考にしたい。

鹿児島県 匿名希望

クィア・スタディーズとは何かを記事で勉強

教育現場では、ジェンダーフリーを掲げておきながら、ジェンダーやセクシュアリティについて触れるのは学校としてふさわしくないとする雰囲気や伝統的な男女観が残っている。我々教師の理解も乏しく、生徒に正確な情報を提供することが難しいのが現状だ。そうした中、「大学の学び 最新ナビ」の早稲田大学文化構想学部の記事で、「クィア・スタディーズ」がどんな学問なのかを知ることができ、ありがたかった。生徒に正しい進路指導をするためにも、新しい学問分野について勉強することが大切だと改めて思った。

静岡県立御殿場高校 美那川雄一

OFF SHOT



今号から、高校の先生が小学校や中学校など、校種の異なる学校を訪れ、新たな指導のヒントをつかんでいただくことを目指したコーナー「高校教師 study-tour」をスタートさせました。初回は、STEM/STEAM教育(*)でも注目されているプログラミング教育です。次期学習指導要領を見据え、高校でも関心が高まっているプログラミング教育を先行して進めている小学校の取り組みから、高校の先生に気づきを得ていただきたく、取り上げました。取材が始まると、お互いの共通する点や異なる点に刺激を受け、また、本質的な部分で小学校と高校のご指導がつながっていることが分かり、2人の先生が共感し合われている姿に、この企画を実現させてよかったと思いました。ご協力いただいた両先生に感謝します。次号も先生方の刺激となる異校種取材が行えるよう頑張っております！ (西村)

『VIEW21』高校版 公式アカウント

LINE@

友だち募集中！

『VIEW21』高校版や教育に関連する最新情報をタイムリーにお届けします。*お友だちの登録方法は、右の2次元バーコードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加をお願いいたします。



VIEW21 高校版 2019 6 月号

次号は6月20日発行(予定)

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

教師を育てた 言葉たち

No. 013

大分県立竹田高校 田所 伸先生

たどころ・しん

◎教職歴16年。同校に赴任して2年目。進路指導副主任。地理歴史科担当。前任校在籍時に立ち上げた「Oita Education Seminar」は、現在も存続。学校の違いを超えて教師が自主的に集い、学び合うスタイルは、その後、長崎県など全国に広がった。



10 年間勤務した前任校は、県下有数の進学校でした。そのため、同僚や生徒との会話は成績に関連した話題が多く、それはとても大切なことだと分かった上で、生徒が将来を見据えて、自身をもっと高めへ押し上げたいような働きかけをしたいと考えるようになりました。「景気が悪い」「先が見えない」と大人から言われながら育ってきた生徒が、「自分は、こんなふうには人生を生き抜くぞ!」と、希望を持って目指す将来像を描けるようにしてあげたいと思ったのです。しかし、教師としても、社会人としても、まだまだ経験の浅い私には、生徒に明確に示せる言葉はすぐには見つかりませんでした。

生徒が生きる未来はどんな社会で、どんな力が求められるのか。私はいろいろな本を読み、校内外の様々な人に話を聞きました。地元有力企業の人事部長に面会を申し込んだこともあります。そんな中、経済産業省が主催した有識者会議から、これからの社会で求められる資質・能力として定義された社会人基礎力が示されました。その中には、主体性、働きかけ力、実行力といった要素から成る「アクション」という資質・能力がありました。これこそが、自校の生徒に私が示すべきものだと感じました。

生 徒たちは優秀であるため、仲間や教師の考えを察知し、スマートにリアクションすることができます。半面、自らアクションを起こそうとすることは少ないため、壁にぶち当たる機会は多くはありませんでした。しかし、失敗経験は改善や成長につながる貴重な機会として必要です。そこで私

は、「Action」という言葉をいろいろな場面で発し、生徒に前に踏み出すことを求めました。感動的な「Action」はクラスを超えてたえようと、トロフィーも作りました。生徒たちはホームルームや学校行事で自ら目標を掲げ、高校生活をよりよいものにするために新しい企画を立て始めました。時には、それまでの学校の常識を打ち破るような提案も出されましたが、「Action」を促した責任を果たすため、生徒とともに管理職のもとに説明に行きました。そして、提案が実現できなかった時は1人の仲間として生徒に自分の力不足をわび、一緒に悔し涙を流しました。

「Action」は生徒だけでなく、自分自身にも求めました。県内の若手教師に呼びかけ、経験や悩みを語り合う勉強会を立ち上げたのもその1つです。勉強会は今も続き、1人で頑張っている人、モヤモヤを抱えている人がいると聞けば、私から電話をして「一緒に頑張ろう」と声をかけています。そうした自分の「Action」は、失敗も含めてできるだけ生徒に話してきました。未来は確かに予測できませんが、分からないからといって立ち止まって待つわけにはいきません。分からなくても一歩踏み出している自分の姿を、人生の後輩である生徒に見せたいからです。

3 学年主任として生徒を送り出した年、私は前任校を離れました。離任式の日、卒業式を終えた3年生全員から、「最高のActionはあなただ」というメッセージとともにトロフィーが返ってきました。「Action」という言葉が言霊ことだまを宿して私と生徒に染みついたのだと、この上ない喜びを感じました。

大分県立竹田高校 全日制/普通科/共学/1学年約160人/2018年度入試合格実績(現役のみ):国公立大は、岡山大、広島大、長崎大、熊本大、大分大などに43人が合格。私立大は、神奈川大、近畿大、西南学院大、立命館アジア太平洋大などに延べ71人が合格。

※プロフィールは、2019年3月時点のものです。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume 1 2019年4月号
2019年4月15日発行 / 通巻第375号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング
©Benesse Corporation 2019

お客様
サービスセンター

[フリーダイヤル] 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17

9KVOL1

 Benesse